

讃岐国府跡 3

2021. 3

香川県教育委員会

序文

讃岐国府跡は、香川県坂出市府中町に所在する古代の讃岐国を代表する官衙遺跡です。江戸時代から昭和40年代まで文献・地名・歴史地理的研究が行われ、昭和50年代から香川県教育委員会と坂出市教育委員会による発掘調査が実施されています。これらの発掘調査では、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を多く確認するなど広域に広がる国府域の存在を語る大きな成果が得られ、その一部は、令和2年3月に史跡讃岐国府跡として国の指定を受けました。

史跡指定を受けた部分は、讃岐国府跡の主要施設の一つです。しかし、国庁をはじめとした他の主要施設の存在や広がりについての把握は十分ではありませんでした。

香川県教育委員会は、平成30年度から「讃岐国府跡探求事業」を開始し、史跡指定地周辺の実態解明及び範囲の確認を行ってまいりました。本書で報告するのは、平成30年度から令和2年度にかけての発掘調査成果です。

3カ年にわたる調査で、従来の施設の広がり確認されたほか、新たな主要施設の内容をとらえ直すことにつながる調査成果が挙げられました。これらの成果は今後の讃岐国府研究において、貴重な資料となるものと考えられます。

また、本報告書が、今後の地域史研究の研究の基礎資料となり広く活用されるとともに、郷土の歴史研究を発展させる一助として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

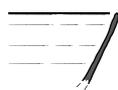
最後になりましたが、本報告書を作成するにあたり、地元坂出市府中町の皆様や、地元自治体である坂出市教育委員会、助言・指導をいただきました関係者の皆様に対して、厚く感謝申し上げます。

令和3年3月

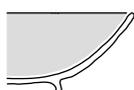
香川県埋蔵文化財センター
所長 西岡達哉

例言

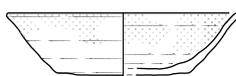
1. 本報告書は、香川県坂出市府中町に所在する「讃岐国府跡」の第36次～38次調査の発掘調査報告である。
2. 本発掘調査は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成30年度から令和2年度まで実施した。
4. 本書の執筆は、竹内裕貴が担当した。
5. 本書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第IV系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
6. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SB 掘立柱・礎石建物 SE 井戸 SD 溝
SK 土坑 SP 柱穴 SX 性格不明遺構
7. 本書で報告する遺構の番号は、調査区ごとに遺構の種別に係わらず遺構の通し番号を付与し、冒頭に調査区名を付与した。その中で建物・柵列のみ通し番号で振り替えた。各調査年度で遺構名が重複することはないが、年度間では同一遺構名が存在する。
8. 遺構断面図中の注記の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32版』を参照した。
9. 遺物実測図における種別毎の網掛けは以下のとおりである。



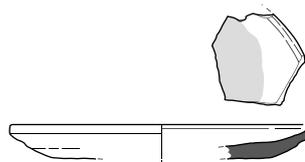
須恵器



黒色土器



油煙



摩滅痕（硯）

10. 発掘調査及び本報告書作成に際し、下記の機関や方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。（敬称略、五十音順）
坂出市教育委員会、坂出市府中町自治会、水利組合、高松市埋蔵文化財センター、
井上勝之、大久保徹也、大橋泰夫、坂井秀弥、高上 拓、乗岡 実、馬場 基、渡部明夫
11. 出土遺物の分類については、下記の文献を参考にし、年代についてはそれらを総合的に判断した
須恵器・土師質土器（古代）：佐藤竜馬 2016「IV 調査研究 讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）」『香川県埋蔵文化財センター年報』香川県埋蔵文化財センター
須恵器・土師質土器（中世）：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会
輸入陶磁器：太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会
瓦 器：尾上実 1993「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
吉備系土師質土器椀：山本悦世 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
緑釉陶器：高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』新陽社
灰釉陶器：山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』新陽社

目次

第1章 調査に至る経緯	
第1節 讃岐国府跡探求事業の経緯と経過	1
第2節 各年次の発掘調査地点の選定	1
第3節 調査体制	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法と調査地点	5
第2節 第36次調査の成果	5
第3節 第37次調査の成果	25
第4節 第38次調査の成果	60
第4章 自然科学分析	
第1節 讃岐国府跡第37次調査出土の動物遺存体	67
第2節 放射性炭素年代について	74
第3節 讃岐国府跡出土の柱の樹種同定	78
第4節 讃岐国府跡の花粉分析	80
第5節 考古学的所見との整合	85
第5章 まとめ	86

遺物観察表	93
-------	----

写真図版

附属DVD-R（出土遺物個別写真データ掲載）

挿図目次

図1 讃岐国府跡の位置（上）と既往の調査地（下）	3	図18 36-5区 西壁断面図	19
図2 讃岐国府跡周辺の遺跡分布図	4	図19 36-5区 褐灰色シルト層出土遺物	20
図3 第36次調査 調査区配置図	6	図20 36-5区 遺構出土遺物	21
図4 36-1～3区 調査区平面図	7	図21 36-5区 遺構平・断面図	21
図5 36-1区 調査区東壁	8	図22 36-5区 SP5004平・断面図	22
図6 36-2区 調査区東壁	8	図23 36-5区 SP5004出土遺物及び灰色シルト層出土遺物	23
図7 36-3区 調査区南壁	9	図24 36-4～6区 遺構外出土遺物	24
図8 36-1～3区 遺構外出土遺物	10	図25 第37次調査調査地点	26
図9 36-4～6区 調査区断面図	11-12	図26 37-1～3区 調査区壁面断面	27-28
図10 36-4～6区 平面図	13	図27 37-1～3区 1面遺構平面図	30
図11 36-4、5区平面図	14	図28 37-1区 1面遺構出土遺物	31
図12 36-4区調査区断面図	15	図29 37-1区 2面遺構平面図及びSD断面図	32
図13 36-4区 灰褐色シルト層（E層）出土遺物	15	図30 37-1区 2面柱穴平・断面図1	33
図14 36-4区 褐灰色シルト層（F層）出土遺物1	15	図31 37-1区 2面柱穴平・断面図2	34
図15 36-4区 褐灰色シルト層（F層）出土遺物2	16	図32 37-1区 2面溝出土遺物	35
図16 36-4区 SD4001出土遺物	18	図33 37-1区 2面柱穴出土遺物	36
図17 36-4区 SP4002平・断面図	18	図34 37-1区 3面平面図	37

図 35	37-1区	SD1038	出土遺物	38	図 55	37-3、5区	遺構外出土遺物	55
図 36	37-1区	SD1041	出土遺物	38	図 56	地点2	37-4区位置図	56
図 37	37-1区	SD1042	出土遺物	39	図 57	37-4区	平面図・西壁断面図	57
図 38	37-1区		包含層出土遺物	40	図 58	37-4区	SK4004平・断面図	58
図 39	37-2区		1面遺構出土遺物	41	図 59	37-4区	出土遺物	58
図 40	37-2区		2面平面図 溝・土坑断面図	42	図 60		第38次調査地点	60
図 41	37-2区		2面 柱穴平・断面	44	図 61		第38次調査平面図	62
図 42	37-2区		2面遺構出土遺物	45	図 62		38次調査調査区壁面断面図	65-66
図 43	37-2区		3面平面図	46	図 63		イヌ計測場所位置図	69
図 44	37-2区		3面遺構出土遺物	47	図 64		動物遺存体 時期別出土相	70
図 45	37-2区		遺構外出土遺物	48	図 65		37次調査 2面及び6層での動物遺存体出土位置と点数	71
図 46	37-3区		2面平面図・遺構断面図	49	図 66		37次調査 3面及び7層での動物遺存体出土位置と点数	72
図 47	37-3区		2面遺構出土遺物	50	図 67		ウイグルマッチングを行った試料	76
図 48	37-3、5区		平面図	51	図 68		暦年校正結果	77
図 49	37-3区	SP3030	平・断面図	52	図 69		讃岐国府跡出土柱の光学顕微鏡写真	79
図 50	37-3区	SD3021	断面図	52	図 70		産出した花粉化石	81
図 51	37-3、5区	SB1001	出土遺物	52	図 71		讃岐国府跡における花粉分布図	83
図 52	37-3区	SP3023	平・断面図	53	図 72		第36次調査地点及び周辺の状況	87
図 53	37-3区		3面柱穴出土遺物	53	図 73		第37次調査 地点1 遺構変遷	89
図 54	37-3区		3面 SD3010 出土遺物	54	図 74		第37・38次調査地点周辺の古代の遺構	90

表目次

表 1	讃岐国府跡 第37次調査出土動物種名一覧	67	表 6	単体測定試料の放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	77
表 2	讃岐国府跡出土動物遺存体一覧	68	表 7	讃岐国府跡出土柱の樹種同定結果	78
表 3	ウイグルマッチング測定試料および処理	74	表 8	分析試料一覧	80
表 4	単体測定試料および処理	74	表 9	産出花粉孢子一覧表	84
表 5	試料 No.1 放射性炭素年代測定・ウイグルマッチング結果	75			

写真図版目次

1. 36-4~5区	全景写真(南から)	29. 37-3区	SP3048 検出状況	57. 36次調査遺構外出土遺物	
2. 36-1~3区	遠景(南から)	30. 37-1区	SD1038 検出状況	58. 37-1区	SD1002 出土遺物
3. 36-5区	SP4005(東から)	31. 37-2区	SK2020 断面	59. 37-1区	SP1018,SP1033 出土遺物
4. 36-4区	全景写真	32. 37-2区	SD2018 断面	60. 37-1区	SD1038 出土遺物
5. 36-1区	南壁断面	33. 37-2区	SD2037 断面	61. 37-1区	SD1041 出土遺物
6. 36-1区	南壁断割断面	34. 37-3区	SD3010 土器検出状況	62. 37-1区	SD1042 出土遺物 1
7. 36-1区	南壁西端断面	35. 37-3区	SD3021 断面	63. 37-1区	SD1042 出土遺物 2
8. 36-2区	東壁断面状況	36. 37-1区	SD1043 断面	64. 37-1区	6層出土遺物
9. 36-2区	東壁断割断面	37. 37-1区	2面遺構検出状況	65. 37-2区	SD2001 出土遺物
10. 36-2区	全景(北から)	38. 37-1区	SD1002 完掘状況	66. 37-2区	SD2018,SP2016 出土遺物(硯)
11. 36-3区	西壁断面	39. 37-2区	SD2001 検出状況	67. 37-2区	SD2010 出土遺物
12. 36-3区	全景(北から)	40. 37-3区	SP3027 検出状況	68. 37-2区	6層出土遺物(硯)
13. 36-4区	灰褐色シルト層検出状況	41. 37-1区	SD1038・SD1041 断面	69. 37-3区	SD3021 出土遺物
14. 36-4区	北半部完掘状況	42. 38-1区	完掘状況	70. 37-3区	SP3004 出土遺物
15. 36-5区	灰褐色シルト層上面	43. 38-1区	SD1005 検出状況	71. 37-3区	SP3023 出土遺物
16. 36-5区	SP4005 断面	44. 38-1区	SP1031 検出状況	72. 37-3区	SP3023 柱痕
17. 36-4、5区	全景	45. 38-1区	SB1003 および周囲の柱穴	73. 37-3区	SP3042 出土遺物
18. 36-4区	SD4001 完掘状況	46. 38-2区	SE2002 断面および検出状況	74. 37-3区	3面遺構検出時出土遺物(硯)
19. 36-5区	SP5009 断面	47. 38-2区	遺構検出状況	75. 37-3区	6層出土遺物(軒平瓦)
20. 36-6区	平坦面検出状況	48. 38-2区	SD2007 断面	76. 37-3区	6層出土遺物(埴埴)
21. 37-3.5区	全景写真	49. 38-2区	全景	77. 37-3区	6層出土遺物(陶硯)
22. 37-1区	全景写真	50. 36-1~3区	遺構外出土遺物	78. 37-3区	6層出土遺物(石製品)
23. 37-4区	全景写真	51. 36-4区	E・F層出土遺物	79. 37-4区	SD4001 出土遺物
24. 37-4区	SP4005 断面	52. 36-4区	SD4001 出土遺物 1	80. 37-4区	SP4005 出土遺物
25. 37-2区	3面全景	53. 36-4区	SD4001 出土遺物 2	81. 37-4区	遺構外出土遺物(硯)
26. 37-3区	SP3023 断面	54. 36-5区	F層出土遺物	82. 出土動物遺存体 1	
27. 37-3区	SP3030 断面	55. 36-5区	遺構出土遺物	83. 出土動物遺存体 2	
28. 37-3区	SP3042 断面	56. 36-5区	SP5004・灰色シルト層出土遺物		

第1章 調査に至る経緯

第1節 讃岐国府跡探求事業の経緯と経過

讃岐国府跡探求事業は、平成30年度まで継続した讃岐国府跡探索事業に継続する形で、令和2年3月に史跡指定となった範囲外の讃岐国府跡の施設の内容や、国府域の広がりを確認するために行われた事業である。事業は、発掘調査と報告書作成のための整理作業があり、平成30年度～令和2年度は発掘調査、事業最終年度の令和2年度に整理作業を行った。

第2節 各年次の発掘調査地点の選定

発掘調査は、計3カ年にわたって行われた。各年度の調査地点の選定については、第3章でそれぞれ掲載するが、事業の目的とした讃岐国府跡の広がりへの把握と、開法寺東方地区以外の主要施設の把握のための年度ごとに調査地点の設定を行った。なお、各年度の調査期間と面積は、下記のとおりである。

- ・平成30年度（第36次調査）…平成30年11月1日～平成31年3月4日 調査面積：142㎡
- ・令和元年度（第37次調査）…令和元年10月23日～令和2年3月31日 調査面積：178㎡
- ・令和2年度（第38次調査）…令和2年9月1日～令和2年12月6日 調査面積：60㎡

第3節 調査体制

発掘調査・整理作業の体制については、以下のとおりである。

平成30年度発掘調査体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	白井 道代	総括	所長	西岡 達哉
	副課長	片桐 孝浩		次長	時松 弘志
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	時松 弘志(兼)
	課長補佐	中川 聡朗		副主任	斎藤 政好
文化財グループ				主任	高橋 範行
	課長補佐	片桐 孝浩(兼)		主任	丸尾 麻知子
	主任文化財専門員	信里 芳紀	資料普及課	課長	古野 徳久
	文化財専門員	真鍋 貴匡		主任文化財専門員	松本 和彦
				主任文化財専門員	乗松 真也

令和元年度発掘調査作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	原田 智	総括	所長	西岡 達哉
	副課長	片桐 孝浩		次長	石野 高雄
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	石野 高雄(兼)
	課長補佐	中川 聡朗		副主任	斎藤 政好
文化財グループ	課長補佐	片桐 孝浩(兼)		主任	高橋 範行
	主任文化財専門員	松本 和彦		主任	丸尾 麻知子
	文化財専門員	真鍋 貴匡	資料普及課	課長	古野 徳久
				主任技師	竹内 裕貴

令和2年度発掘調査・整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	渡邊 智子	総括	所長	西岡 達哉
	副課長	愛染 伊知郎		次長	樋口 和幸
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	樋口 和幸(兼)
	課長補佐	愛染 伊知郎(兼)		副主任	斎藤 政好
文化財グループ	課長補佐	古野 徳久		主任	高橋 範行
	主任文化財専門員	松本 和彦		主任	石田 こずえ
	技師	益崎 卓己	資料普及課	課長	佐藤 竜馬
				主任技師	竹内 裕貴

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

讃岐国府跡は、現在の坂出市東部に当たり、県中部を南北に流下する綾川の下流域に形成された沖積平野（以後、綾北平野と呼称）の最奥に位置する。

綾北平野は、その南北長は4km、最大幅3.5km程しかなく、平野の西側、東側をそれぞれ城山、五色台といった標高400m以上の山地に挟まれ、平野中央を流れる綾川の堆積作用で形成された沖積平野である。平野の標高は、平野最奥である讃岐国府跡周辺の遺構面でも15m前後であり、比較的傾斜が緩やかに河口部まで至る。現在の海岸線は、塩田開発やその後の埋め立てにより、北側に位置しているが、当時の海岸線の復元では、現在の雄山、雌山付近に汀線が想定でき、海岸部は入り組んだ形状をしていたと考えられる。

讃岐国府跡は、現在の綾川の河道と西側に所在する城山に挟まれた範囲に所在する。これらの範囲内の地形の検討・発掘調査成果の整理から、城山より派生する丘陵に由来する微高地と、それらにある谷筋に由来する低地帯が東西方向に複数状伸びることが確認されている（香川県教育委員会 2011・2016ほか）。従来の発掘調査の傾向からも、讃岐国府跡の主要施設は、微高地上に推定される。

また、上記の範囲内では現地形でも明瞭に段差が確認できる範囲が存在する。図1の低地帯1とした範囲では条里型地割の乱れや、北側の微高地との間に大きな段差が見られ、綾川のかつての氾濫により形成された河岸段丘とされる。その成立年代については県内の他の例を参照すれば古代末に想定され（高橋 1994）、段丘の形成が当該時期にあたるかについては今後の検討が必要であるが、段丘下で行われた発掘調査から、段丘下の開発が中世以降に下ることが推定されている（香川県教育委員会 2019）。

第2節 歴史的環境

讃岐国府跡とそれらを取り巻く環境について、綾北平野の時期ごとの遺跡動向を中心に記載する。

旧石器時代については、遺跡はあまり明瞭ではない。本報告でも記載するが、讃岐国府跡では、当該期の遺物が少量確認されている。丘陵の比較的高標高の地点に遺跡が存在する可能性はあるが、平野部への展開状況は判然としない。

縄文時代についても、遺跡の展開は不明な点が多い。讃岐国府跡では、既往の調査で縄文時代晩期に相当する土器が確認されているほか、当該期の遺構も確認されている。石器・土器類も一定量出土しており、微高地上を中心に、集落域が形成されていた可能性が高い。

弥生時代の遺跡は、讃岐国府跡よりも北側の下流域に集中する。本鴨遺跡は、弥生時代前期の集落である。弥生時代中期には、丘陵上にも集落が展開し、讃岐国府跡周辺においても、綾川での河川改修工事に伴い、綾川河床遺跡が調査され、弥生時代中期の遺物が多く出土する等、集落立地の点で変化が見られる。

古墳時代は、集落の状況は判然としない。古墳の動向から考えると、前期古墳は、平野を囲む丘陵地帯に点在する。タイバイ山古墳、弘法寺古墳といった古墳が確認されるが、平野内での古墳の集中や規模の突出は見られない。沿岸部においては、丘陵上の眺望地に前期古墳の築造が続く。古墳時代中期以降も、依然として活発な古墳築造状況とは言えないが、継続的な古墳の築造が平野内で認められる。

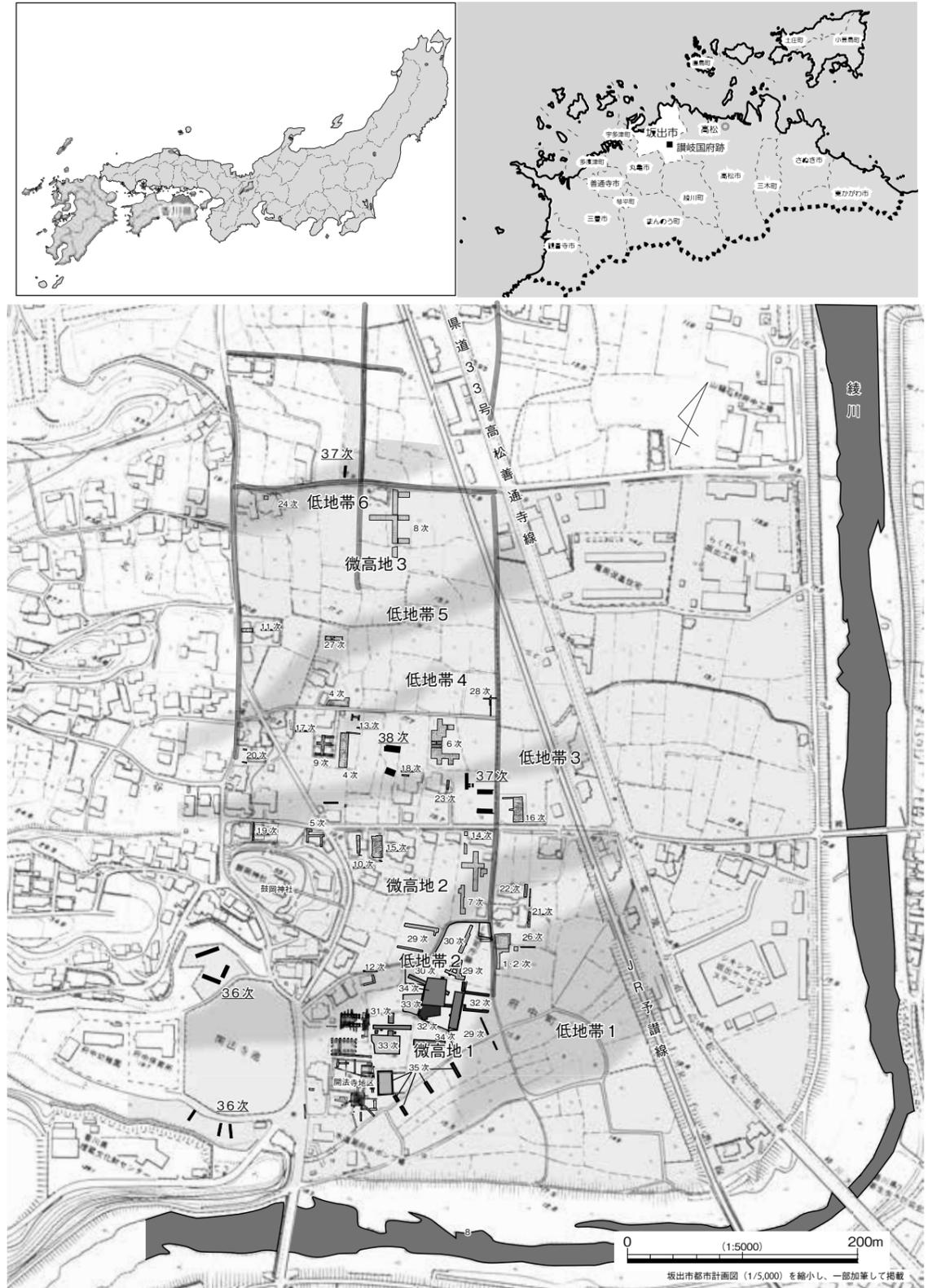


図1 讃岐国府跡の位置（上）と既往の調査地（下）

しかし、古墳時代後期以降は、古墳築造動向には大きな変化が認められる。この段階も集落の状況は明らかではないが、綾北平野においては後期古墳の築造が活発となり、特に大型の石室を持つ古墳が平野の東西の丘陵部に展開する状況が認められる。

これらの古墳群は、複数の群が平野内に併存し、7世紀中葉まで継続する。群内でも最大規模の古墳石室は、県内の他地域と比べても大型であり、平野内の古墳群の集中度合も他地域には見られない特徴がある。それ以前の古墳動向と築造動向が大きく変わることや、加茂古墳群では鴨庵寺跡、醍醐古墳群では醍醐寺跡といったように後続する古代寺院が存在することから、地域勢力の古墳時代～古代への変遷を考える上でも重要な点が多く、後に平野の最奥に国府が造営されることとの関連も含め、注目すべき動向である。

古代の綾北平野の遺跡は、讃岐国府跡のほかは上記の古代寺院が確認されている程度である。ただし平野の沿岸部では惣社神社遺跡において古代の遺物の散布が認められる。惣社神社周辺は当時の汀線の付近に位置しており、河口部の浜堤上に所在するという遺跡の立地からも、国府に設けられた国府津に関連する遺跡である可能性が考えられる。

中世以降については、遺跡の動向は明らかではない。讃岐国府跡でも一定量の遺構が確認されるほか、惣社神社遺跡等でも中世の遺物が確認されているが、そのほかの遺跡については、調査事例が少なく、遺跡の実態は今後の課題である。

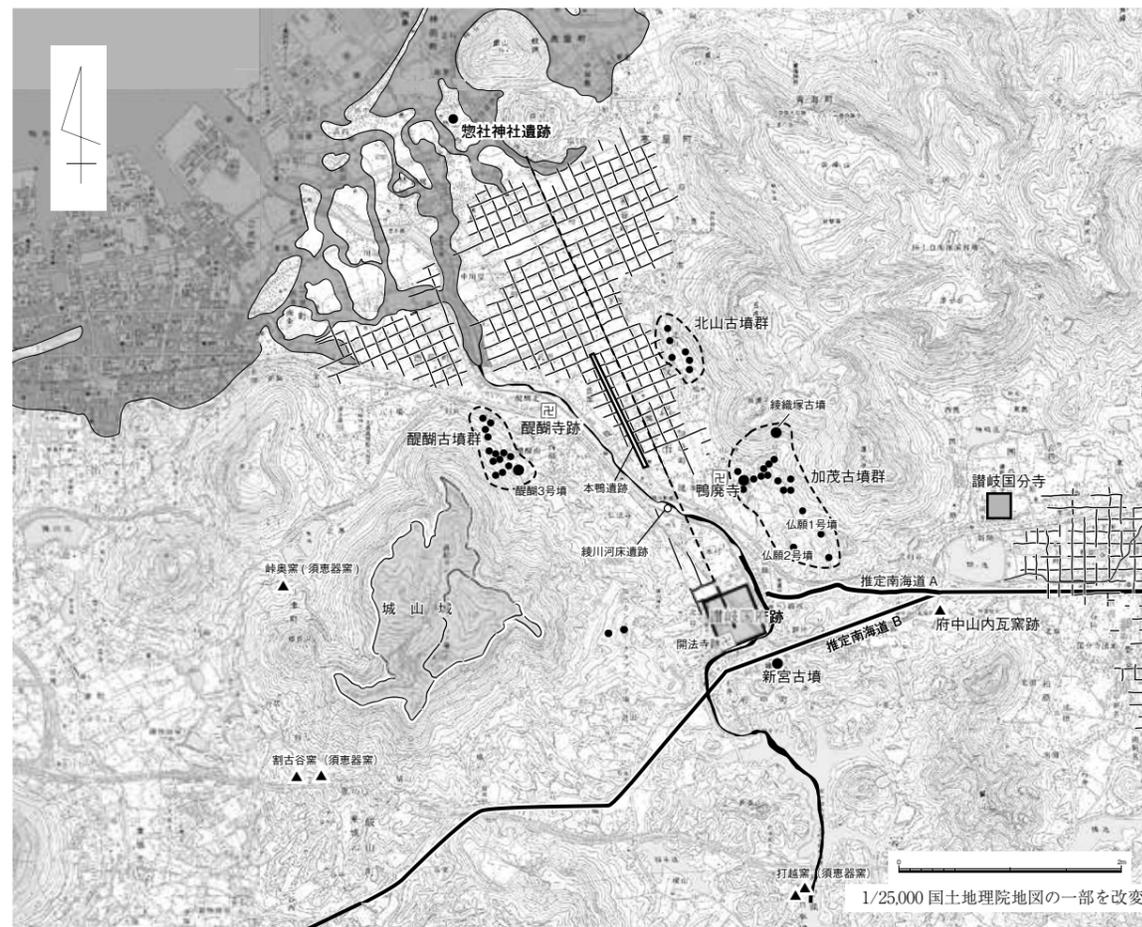


図2 讃岐国府跡周辺の遺跡分布図

第3章 調査成果

第1節 調査の方法と調査地点

平成30年度から令和2年度までの発掘調査(第36～38次調査)の成果を報告する。調査次数の考え方は、既刊の報告書の調査次数を踏襲している。なお、第36、37次調査でも、複数地点で調査を行っているが、いずれも第36、37次調査と呼称する。第36次調査以前の調査の内容や経緯については、既往の報告書で詳述されている(香川県2016、2019)。

調査では複数の遺構面が確認された。一部の遺構については、整理作業での検証により、調査時に示した帰属遺構面を変更している。第37、38次調査では、国土座標に基づいた2×2mのグリッドを設定し、各グリッド毎に出土遺物の取り上げを行っている。遺構名については、調査区名・検出順に個々に4桁の番号を付与している。

讃岐国府跡探求事業の目的と方針

平成30年度までの調査・研究により所在や国府を構成する施設の内容が判明した開法寺東方地区以外の施設も含めた、讃岐国府跡の範囲とその内容を確認することを目的としている。以下に各年度の目的と方針を含めた概要を示す。

〔平成30年度(第36次調査)〕開法寺地区の西側、現開法寺池の南北の水田において、国府の施設の広がりを確認することを目的とした。調査は古代の遺構・遺物の包蔵状況や地形状況の確認のためのトレンチ調査を行った。

〔令和元年度(第37次調査)〕既往の調査により施設の存在が想定されていた(香川県教育委員会2016)範囲について、施設の範囲と内容の把握を目的とした。従来から地形や周辺の調査状況から施設の東辺及び北辺が推定される範囲において、区画推定範囲の周辺遺構の状況を面的に把握するための調査区を設定し調査を行った。

〔令和2年度(第38次調査)〕令和元年度に調査した施設について、その範囲をより詳細に捉えるため、西辺と想定される箇所を把握することを目的とした。区画施設の位置や形状を確認し、周辺の地形との関係や、遺構包蔵状況を確認するためのトレンチを設定し調査を行った。

第2節 第36次調査の成果

1. 調査区の設定と調査の方法

周知の埋蔵文化財包蔵地「讃岐国府跡」の近接地で、関連する遺構・遺物の有無の確認を目的とし、平成30年11月から平成31年2月まで試掘調査を実施した。開法寺池の北側を開法寺池北地区(36-1～3区)、同南側を開法寺池南地区(36-4～6区)を対象とし、幅1.5mの調査区を設定し、地形や遺構の包蔵状況を確認した(図3)。

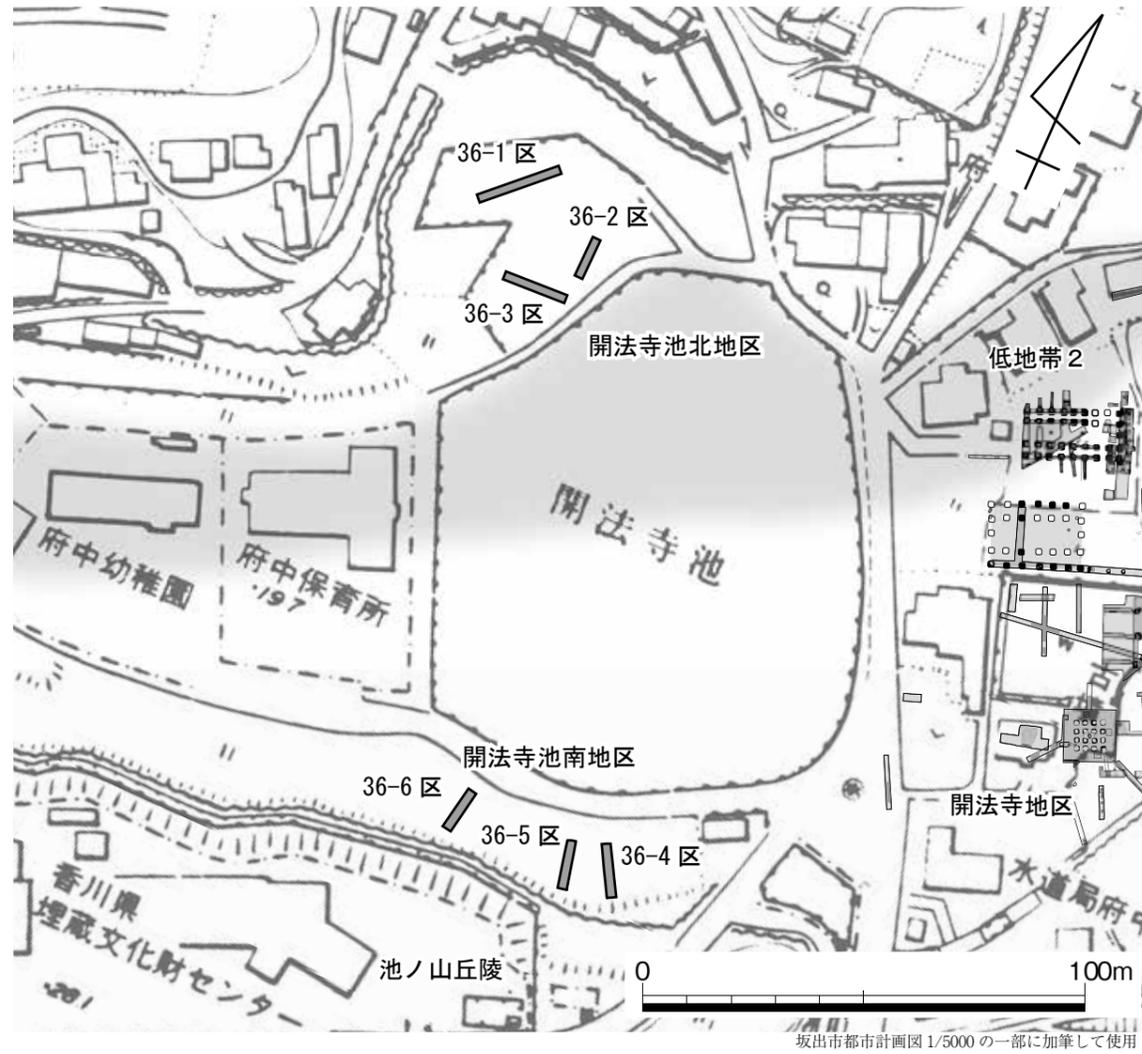


図3 36次調査 調査区配置図

2. 開法寺池北地区 (36-1～3区) の調査成果

現況で0.5m程の標高差が認められる2筆の水田に調査区を設定した。上段に36-1区、下段に36-2、3区を設定している。

まず、36-1～3区の基本的な層序関係について整理する。

耕作土除去後の床土の下位から、遺物包含層が確認された。これらは大別2層 (A・B層) に分けることができる。A層は、中世後半以降に形成された造成土と考えられ、層厚の違いはあれど、36-1～3区で確認される。下位の包含層 (B層) は、人為的な造成や盛土によって形成されたものではなく、黒褐色の粘質土を中心としており、自然堆積層であると考えられる。さらに下位で基盤層 (C層) が見られる。36-1～3区の調査では掘削深度の都合上、基盤層は部分的にしか検出できていない。

(1) 36-1区の調査成果 (図5)

床土である2層の直下に、3～7層 (A層) が堆積している。図化できる出土遺物はないが、概ね中世後半の所産と考えられるため、中世後半以降の堆積が想定される。下位には8～10層 (B層) が見

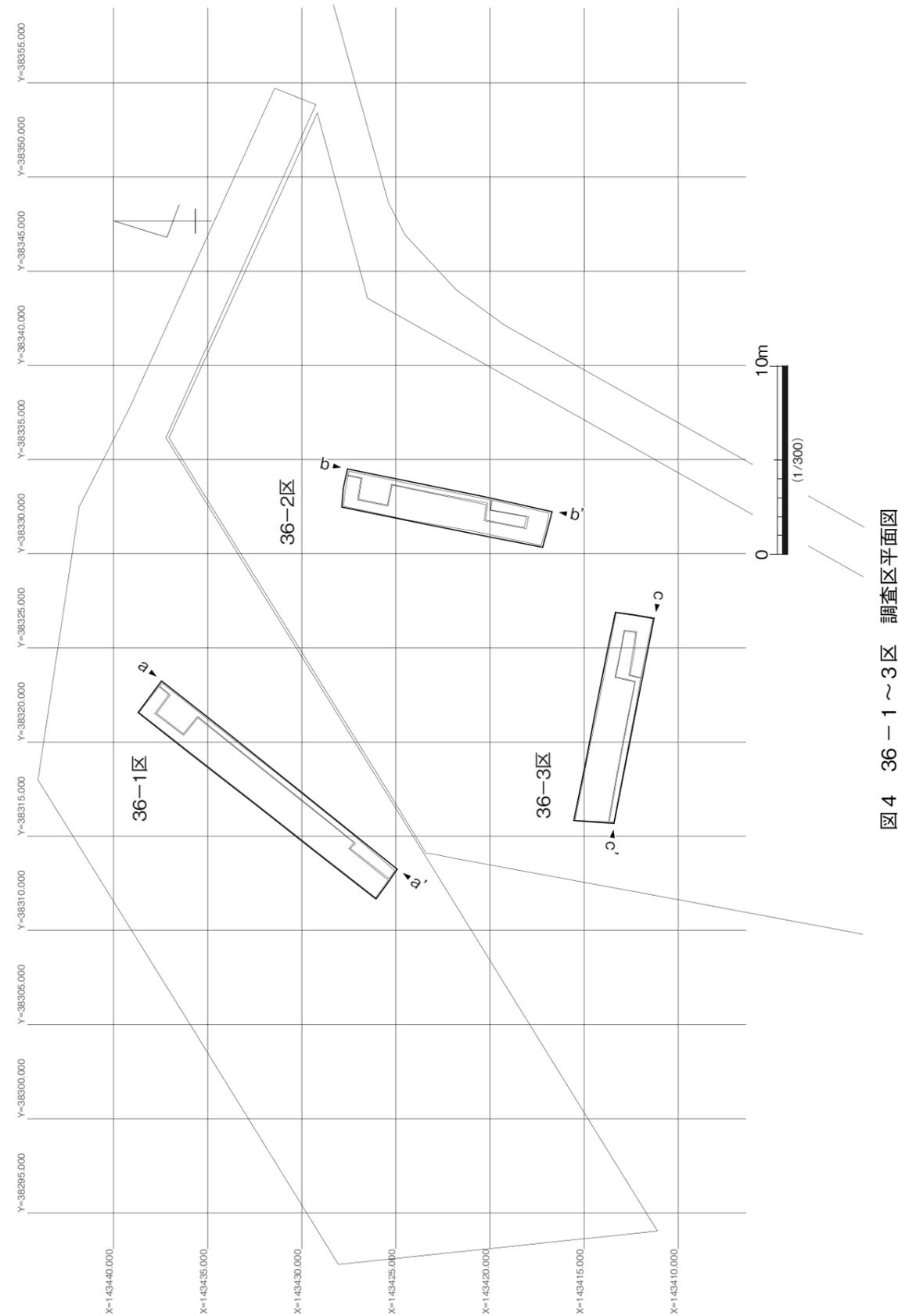


図4 36-1～3区 調査区平面図

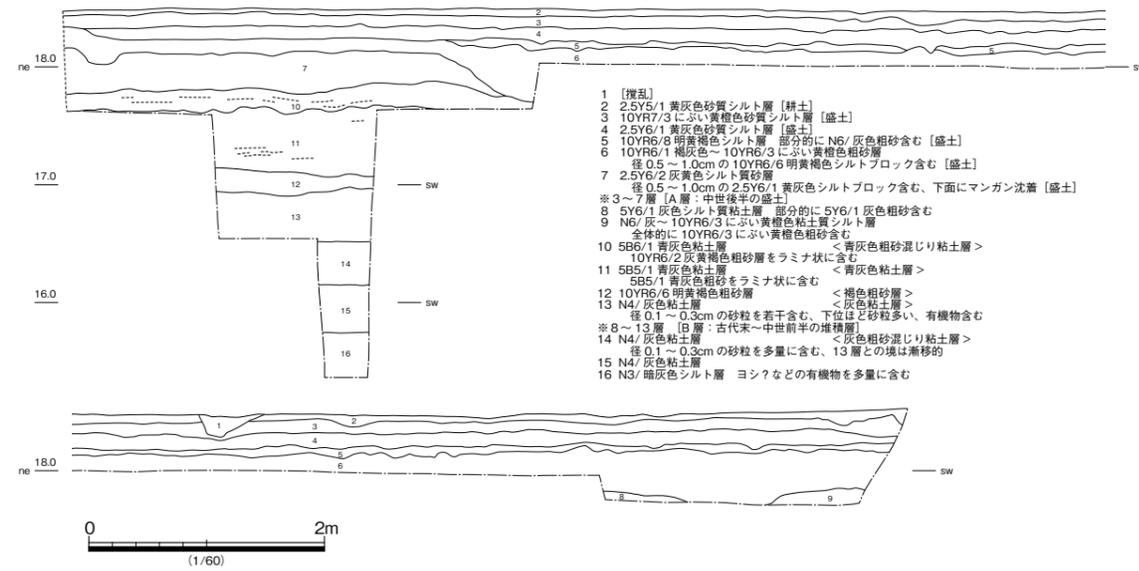


図5 36-1区 調査区東壁

られる。36-1区では、B層上面で掘削を停止し、調査区北西部ではB層も掘削している。B層は標高15.5m付近まで掘削を行ったが、基盤層は確認されなかった。B層からも遺物が確認されるが、古代末～中世前半の遺物が多く、これらがB層堆積の下限年代を示すと考えられる。

(2) 36-2区の調査成果 (図6)

36-2区では、14.8mで基盤層(C層)を検出した。床土の直下には、7層まで細かい単位の造成土が確認できる。8層以下については、土色や土質が大きく変化し、上面もほぼ平坦に近いことから、その上下で造成の大きな単位が見て取れる。8層～19層までは人為的な造成の痕跡が確認でき、36-1区の状況と照らし合わせると、同時期の造成である可能性が高い(A層)。A層と基盤層の間には粗砂

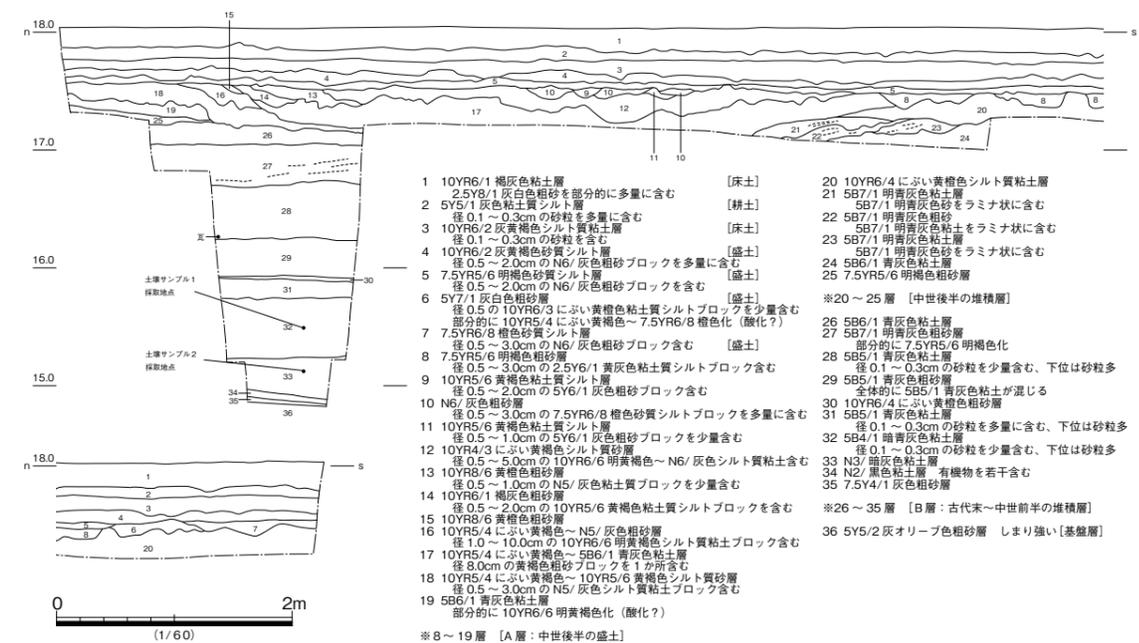


図6 36-2区 調査区東壁

とシルト～粘土層が交互に厚く堆積するB層を確認している。

(3) 36-3区の調査成果 (図7)

36-3区は、調査区の西側で異なる土色の層(2～5層)が確認された。断面での広がりを見ても、かつて複数の筆であった調査区周辺を合筆した際の造成土である可能性が高い。その下位にA層(6～9層)が確認される。A層の下位には調査区全面にB層が確認される。B層は部分的に断割りを行い、0.5m以上の堆積が確認できたが、基盤層は検出できていない。

(4) 地形と出土遺物 (図8)

全ての調査区で中世後半以降の造成土と、それ以前の包含層の堆積が確認できた。

基盤層の検出状況から地形について検討すると、36-1～3区のうち、最も東側に位置する36-2区で確認された基盤層の標高は14.8m程で、東に想定される低地帯2(香川県教育委員会 2016)が埋没面した標高に近い。低地帯2は、これまでの調査により8世紀以降に次第に埋没が進み、古代末に平準化していく中で、低地帯部分に遺構が形成される(香川県教育委員会 2019)。低地帯2の上面と36-2区の基盤層の標高が近いことから、低地帯2が由来する谷筋の最深部は、開法寺池北地区、あるいは開法寺池の北半部に推定される。したがって、開法寺池南半や、それらの周辺は開法寺東方地区と同様比較的安定した土地条件を持つ、地形的に連続したエリアとしてとらえることも可能である。

なお、B層が確認される範囲は、北側の丘陵部分に入り込むような広がりを見せる。36-1～3区で確認された低地部分(B層)は、谷筋での遺構形成に伴い、低地帯位置を調整するための地形改変痕跡の可能性も考えられる。

また、36-1～3区では古代以降の遺物が出土している。さほど磨滅しておらず、大きな移動を受けているものではないため、古代の遺構は近隣に推定できる。出土遺物は図8に示した。

1は須恵器杯である。底部のみ残存しており、内面には火樗が残る。全面に摩滅痕跡が確認できることから、硯としての転用が想定される。2は須恵器壺である。口縁部のみが残存しており、端部付近で短く屈曲する。広口壺の口縁部である可能性が高い。3は須恵器杯である。深手の杯身であり、扁平な高台を貼り付け、その外部で明瞭な稜線を持たず立ち上がる。口縁端部までほぼ直線的に伸び、立ち上がりはやや急である。低平化した高台の形態、口縁部の立ち上がりから考えて佐藤編年Ⅱ期に該当すると思われる。4は須恵器鉢である。口縁端部を玉縁状に肥厚させる。内面、外面共に明瞭に回転ナデの痕跡を残す。口縁端部の特徴から、篠産の須恵器鉢と考えられ、口縁端部の形態から10世紀中葉(前山2・3号窯併行)と考えられる。5は丸瓦である。側縁部のみ残存しており、全体形状は不明である。凹面には布目を残し、側面の端部についてはケズリにより面取りを行う。凸面については、摩滅のため

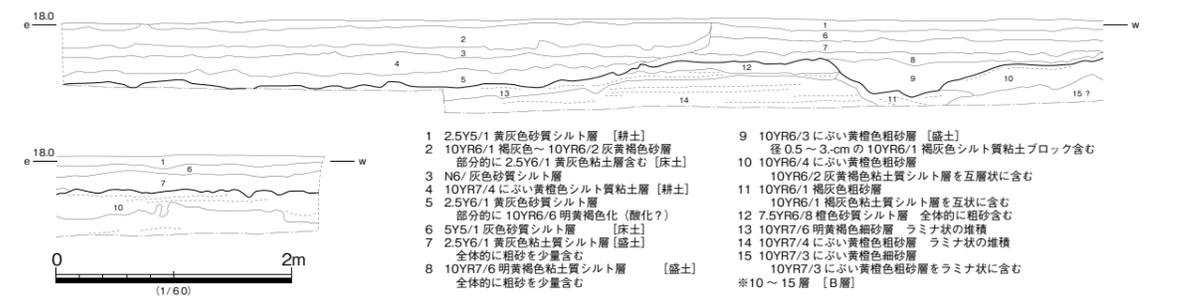


図7 36-3区 調査区南壁

調整不明である。6, 7は平瓦である。6は凸面に縄タタキの痕跡を残す。タタキ方向は若干斜交している。7は凸面に格子目タタキが見られる。凹面には摸骨痕が確認される。6のタタキ方位が斜行することは、時期が下る特徴である。7は摸骨痕が認められ、格子タタキを採用する点で、古い年代が考えられる。複数時期の瓦が出土している点は、周辺の発掘調査状況と類似し、出土遺物は8～10世紀のものが目立つ。

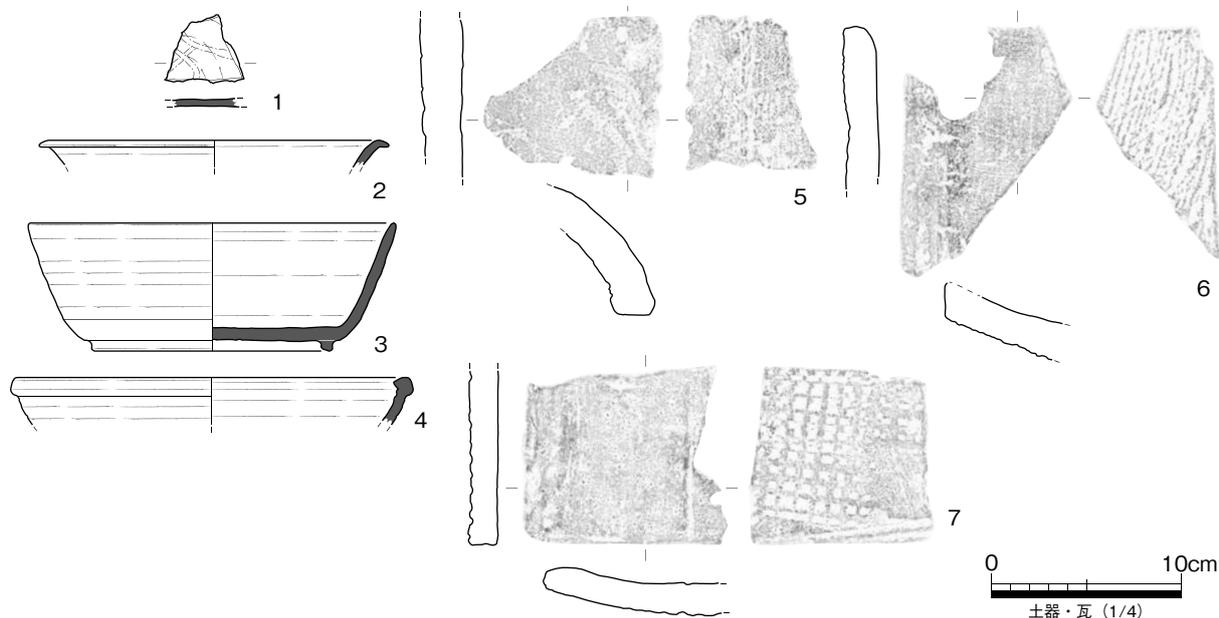


図8 36-1～3区 遺構外出土遺物

3. 開法寺池南地区（36-4～6区）の調査

開法寺池を挟んで南側の水田に調査区を設定した。36-4～6区は、それぞれ、谷筋から丘陵に向かう地形に合わせて南北方向に設定した。調査の結果、丘陵緩斜面に設けられた平坦面や9世紀～11世紀前半の溝、柱穴を検出したほか、遺構面を被覆する包含層も確認された。

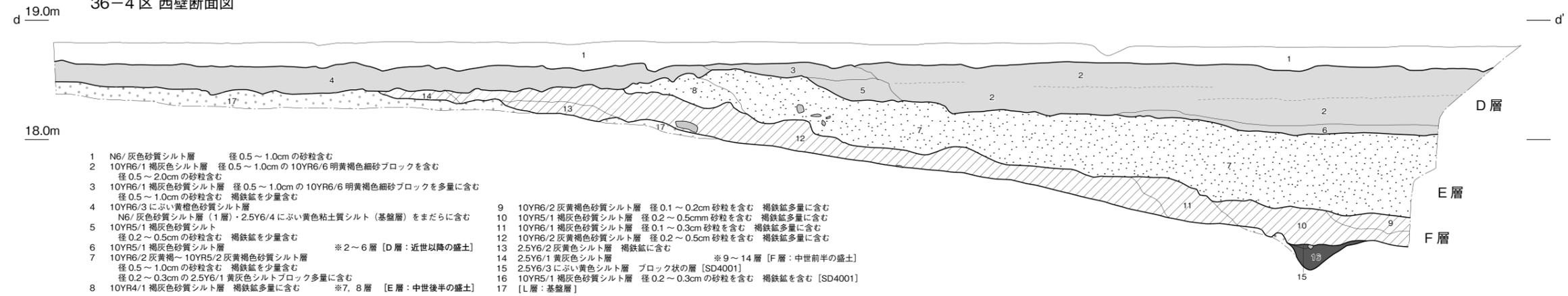
土層の堆積状況は、開法寺池南地区で共通するため、図10に土層図を示す。36-4～6区は、部分的に近世以降の耕作地化に伴う造成土が確認できる（36-4区のD層）が、その下位には、中世後半の遺物を含むE層、中世前半の遺物を含むF層が確認された。堆積状況から人為的な盛土の可能性が高い。36-5区では細かい単位の盛土が想定され（G、H、K層）、遺構の前後の段階での整地や造成が想定される。

（1）36-4区の調査成果

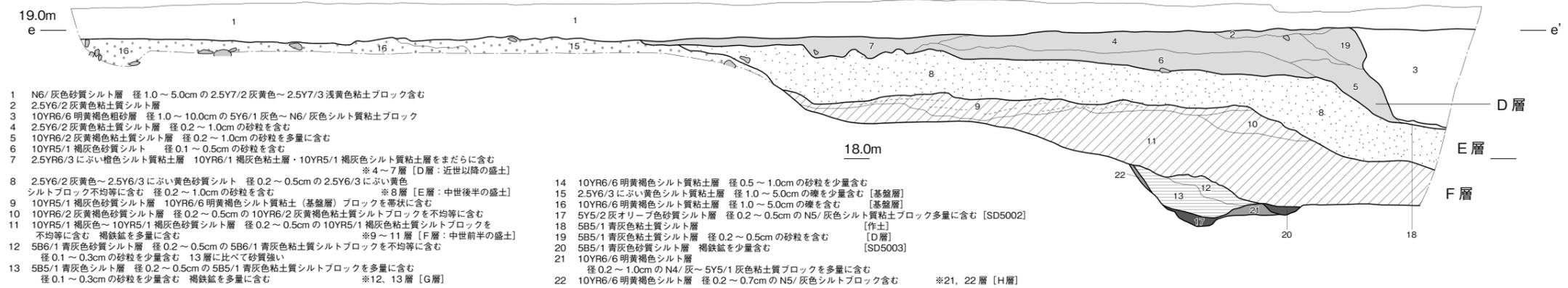
現地表面より0.4 mの高さで丘陵から伸びる緩斜面の端を検出した。斜面は緩く北側に傾斜し、調査区北端付近では、平坦面が確認できる。緩斜面の端を造成し、平坦面を作った痕跡と考えられる。包含層は、耕作地化に伴う造成（2～5層-D層）や、緩斜面地に堆積した層（E層）が確認される。さらに下位には、9層～14層（F層）が確認される。E層は灰褐色シルト層を主体としており、F層は褐色灰色シルト層を主体としている。

E層・F層出土遺物は、図13・14に示した。

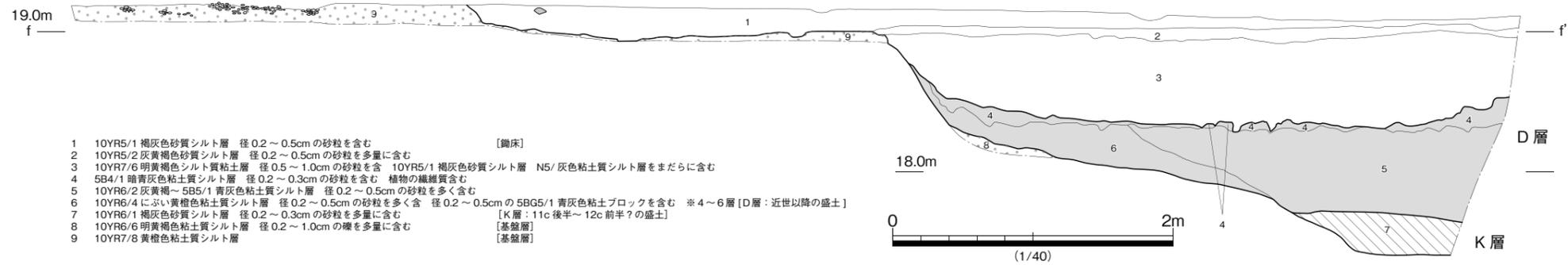
36-4区 西壁断面図



36-5区 西壁断面図



36-6区 西壁断面図



D層	近世以降の盛土・鋤床	土師質土器 (近世以降、少量) 須恵器・土師器・瓦 (古代、少量)
E層	中世後半の盛土	土師質土器足釜 (少量) 須恵器・土師器・瓦等 (古代)

F層	中世前半の盛土	須恵器・土師質土器 (11c 後半~12c 前半) 須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦等 (古代)
G層	9~10世紀の盛土 (灰色シルト)	須恵器 (古代、少量)
H層	8c~10c 後葉?の盛土	遺物なし

K層	11c 後半~12c 前半?の盛土?	土師質土器 (小片、少量)
----	--------------------	---------------

図9 36-4~6区 調査区断面図



図10 36-4～6区 平面図

灰褐色シルト層（E層）出土遺物（図13）

8は土師質土器足釜である。足釜の脚部先端付近であると考えられ、先端は欠損している。長軸方向にストロークの長いナデを施す。9は緑釉陶器椀である。口縁部のみ残存しており、端部付近でやや外反する。10は須恵器皿である。口縁部まで直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。外面には火襷が認められる。11は須恵器壺である。体部下半の破片であるが、内外面に回転ナデが確認できる。12は土師質土器甑である。口縁部が屈曲なくほぼ直線的に伸びる、外面には細かなタテハケを施しており、内面には指オサエの痕跡が残る。13は土師質土器羽釜である。口縁部付近のみ残存している。短く直立する口縁部と、その直下に巡る鏝が取り付け。鏝は貼り付けでほぼ水平に延び、端部はナデにより面を持つ。外面には縦方向のハケを施し、内面には横方向のナデが確認できる。

出土遺物に古代～中世前半の遺物も含むものの、8の土師質土器足釜や、下位のF層の堆積年代から考えると、E層の堆積は、中世後半以降に比定できる。

褐灰色シルト層（F層）出土遺物（図14）

14は緑釉陶器椀である。底部付近の破片で、径の復元は難しい。胎土は黄褐色を呈し、外面にのみ浅黄緑色の釉薬が認められる。平安京近郊産の可能性が高い。15、16は土師質土器杯である。15は底部のみ残存しており、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離し、底部からやや内湾しながら、急に立ち上がる形態が想定される。16は底部径6.6cm、口径10.4cm、器高2.4cmを測る。底部はヘラ切りで切り離し、口縁部まで直線的に延びるが、口縁端部付近ではやや内湾する。17～20は須恵器杯である。17は底部径が6.2cmを測る。直線的に外方に広がる体部を持ち、外面に火襷がみられる。18は底部径6.8cm、口径11.4cmを測る。口縁部までが直線的に外方に広がるが、その立ち上がりは急であり、口縁端部に向かって器壁が厚くなる。19は奈文研分類の杯Bであり、断面台形あるいは方形の高台を

持つ。底面はヘラ切りで、のちに高台を貼り付ける。高台やや外方に稜を持ち、そこから口縁端部に向かって延びる。20は須恵器碗である。円盤状の底部から、直線的に外方に開く。底部はヘラ切りにより切り離され、底部径は7.4cmを測る。外面に細かい単位で回転ナデが確認されており、内面の見込みと体部の境界には、明瞭な段差が見られる。21は須恵器皿である。底部と体部の境界が特に外面において不明瞭で、直線的にやや急に立ち上がり、口縁部はやや外反し端部を丸くおさめる。

瓦は丸瓦・平瓦が出土している。22は丸瓦である。凸面は調整をナデ消した痕跡が認められ、凹面には、ケズリの痕跡が残る。端面は、側面についてはナデを施すが、広端部については、面取り状にケズリが施される。23～27は平瓦である。23は二辺が残存し、凹面は布目がナデによって消されており、凸面には平行の縄目叩きが残る。側面はケズリが施されるが、広端面には、繊維のような圧痕が認められ、一部側面にも確認できる。24は広端が残存する。広端幅は25.2cmで、側面はケズリを施す。凹面には一部布目圧痕を残すが、大部分はそれらの上からナデを施す。凸面は、縄タタキ目が確認されるが、すべて側面に平行する。広端部にもケズリ確認できる。25は凹面に布目を残し、側面はケズリを施す。

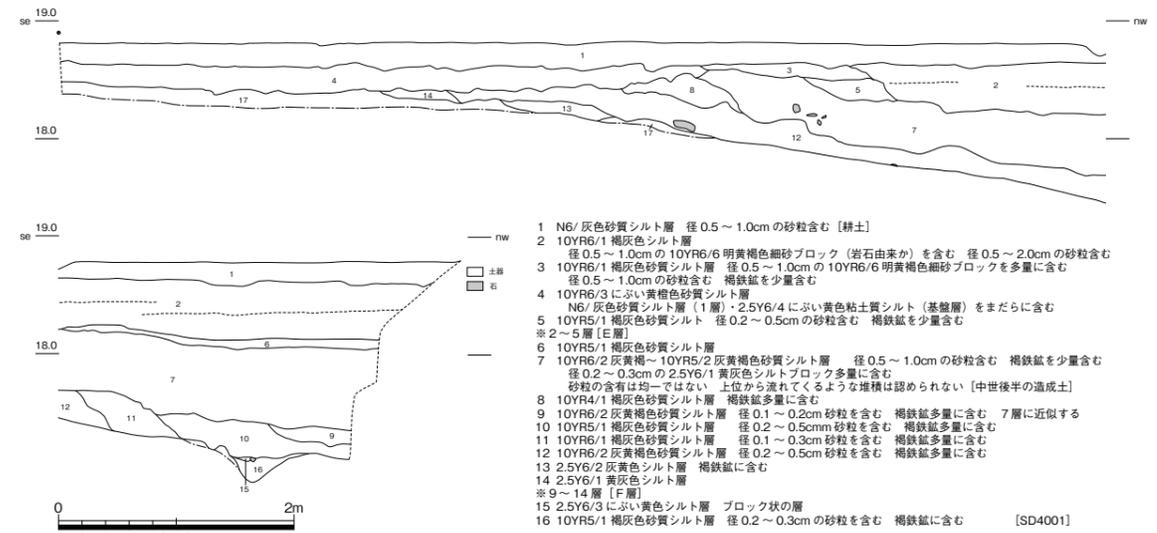


図12 36-4区調査区断面図

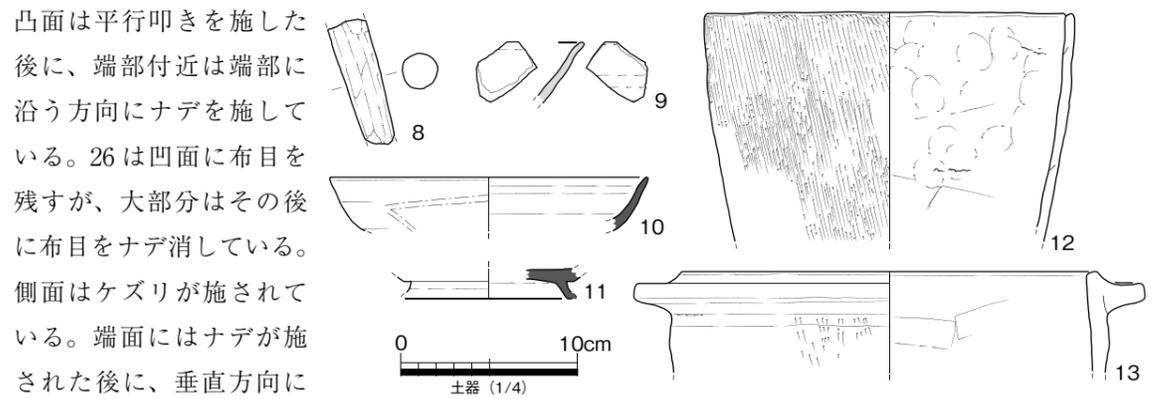


図13 36-4区 灰褐色シルト層 (E層) 出土遺物

27は凹面に布目圧痕の上からケズリが確認される。側面付近にはケズリ痕が確認でき、凸面は縄目叩きが確認できる。叩きの方向は、平行と斜行方向が確認できる。

褐灰色シルト層 (F層) 出土遺物は、瓦含め大半が古代の遺物である。その中で最も新しい15.16の土師質土器杯が、佐藤編年V期中相に相当することから、11世紀以降の堆積年代が想定される。

なお、F層の下位で遺構は検出されており、調査区の遺構の下限年代も、この層の年代年代となる。

SD4001 (図11・12・16)

調査区北端で検出された溝である。調査区を横断するように検出された。断面は逆三角形に近く、埋土は単層である。溝の平面形は直線的ではなく、調査区内の基盤層と同様、南側の丘陵の形状に合わせて少し屈曲する。出土遺物は、一部に遺構直上遺物として取り上げたものがあり、直上の包含層に由来する遺物の可能性があるが、それらも併せて報告する。

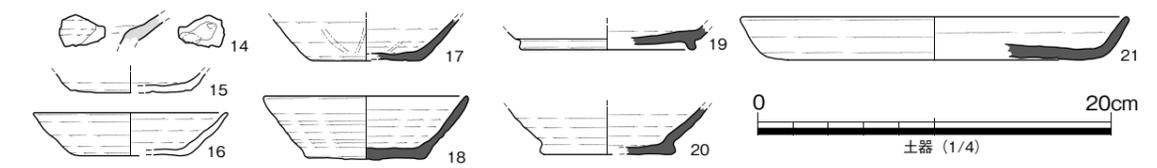


図14 36-4区 褐灰色シルト層 (F層) 出土遺物1

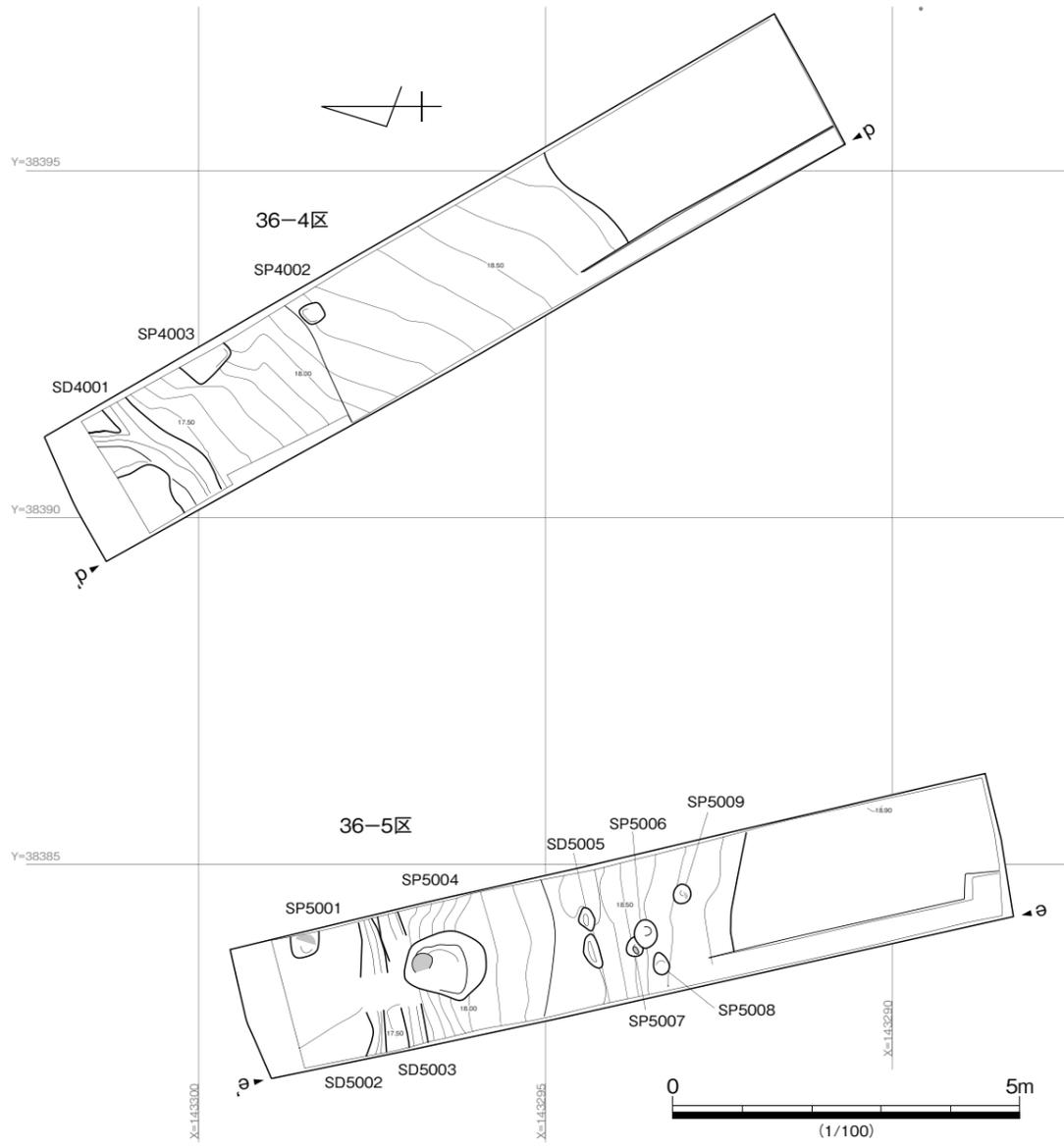


図11 36-4、5区平面図

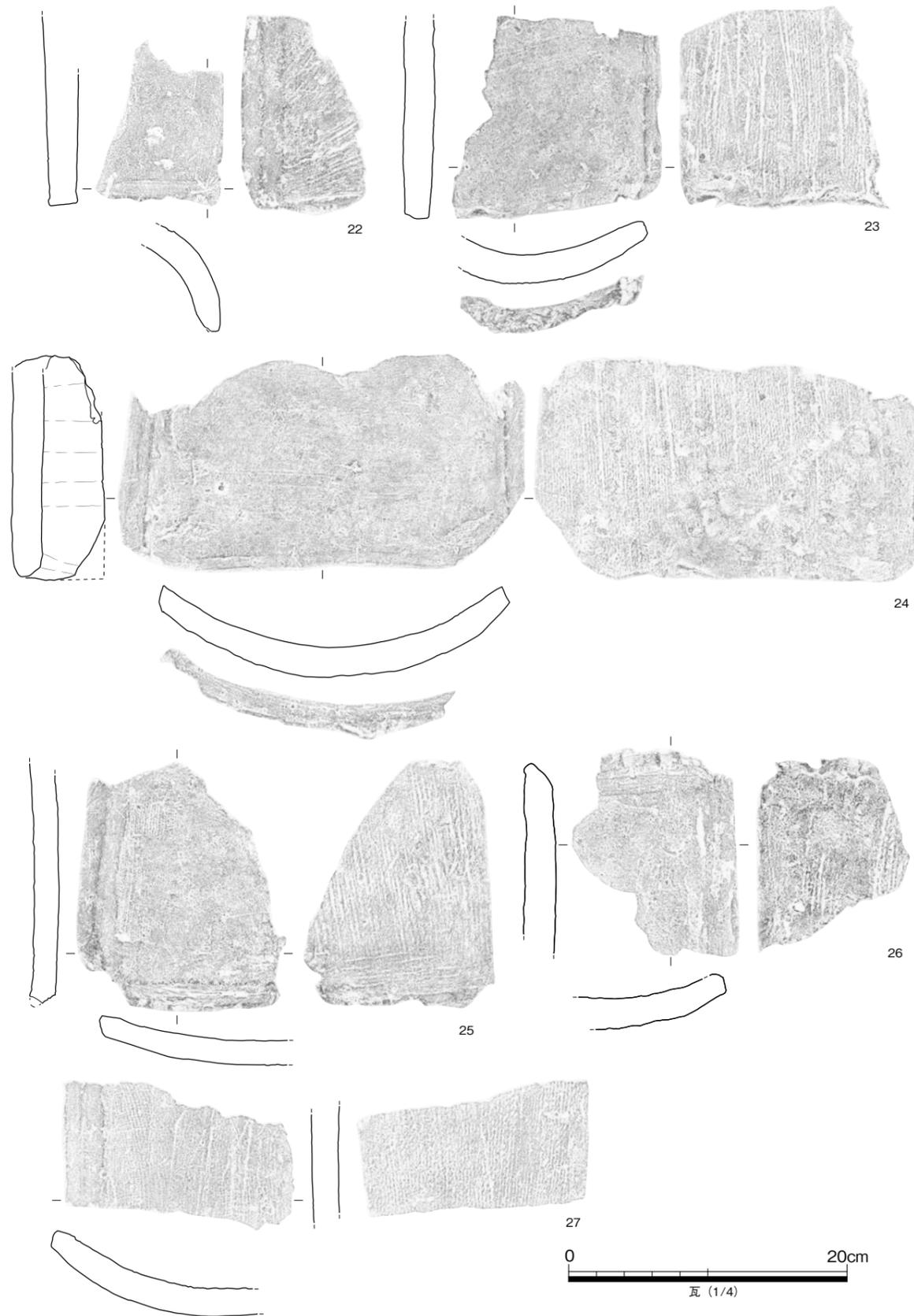


図15 36-4区 褐灰色シルト層 (F層) 出土遺物2

28～36は遺構直上出土遺物である。28は土師質土器碗で、高台は断面逆台形であり、やや外方に開く。29は土師質土器杯である。底部と体部の境界は明瞭であり、体部からやや内湾気味に口縁部まで延び、口縁端部の上部は面を持つ。外面は細かい単位の回転ナデを施す。30は須恵器皿である。底部付近に強いナデを施し、それより上部は口縁端部までは弱く外反しながら大きく開く。端部は丸く仕上げている。内面のみ火轆が確認できる。31は須恵器杯である。底部にはやや強いナデを施し、それより上部については、内湾しながら立ち上がる。内外面には細かい単位のナデを施す。32は須恵器壺である。小型の壺の体部であり、体部中央付近で明瞭な稜を持つ。底部や口縁部を欠いており、詳細は不明であるが、法量からは小型の壺と考えられる。33は土師質土器鍋である。把手部分のみが残存している。34はふいご羽口である。形態を復元することは難しいが、外面にガラス質の付着を確認できる。35、36は平瓦である。35は凹面に布目が確認されるものの、その後ナデを施す。凸面は叩きの痕跡をナデ消している。側面は削りにて複数面の面取りを行う。36は凹面に布目を残し、凸面には格子目叩きが施される側面は削りによって面取りされている。

37～47はSD4001出土遺物である。37は土師質土器碗である。断面三角形の低い高台を持つ。38、39は須恵器蓋である。38はつまみを持つ蓋で、外面天井部でヘラ切りを行うが、ヘラ切りとナデ部分の境界が不明瞭であり、形態的にも明瞭な稜線を持たない。内面にはナデを施すが、中央部分には硯として使用された痕跡が残る。39は口縁端部は丸く収めており、天井部の外方から外面ではヘラケズリを施す。40～43は須恵器杯である。40は断面逆台形の低い高台を持ち、高台より外側から立ち上がり、ほぼ直線的に端部まで延びる口縁部を持つ。径は小さいが、扁平な高台とやや急に立ち上がる口縁部を持つ。41は口縁部のみが残存している。端部の内面にはナデにより面を持たせて、内面には斜方向の沈線を施す。42は口縁部のみ残存しており、外方に直線的に広がる形態を持つ。43は断面方形の低い高台を持つ。底部はヘラ切りの痕跡が残されており、内面にはナデが施されているが、やや凹凸が目立つ。44は須恵器盤である。口縁部は内湾気味に伸び、端部は上部に拡張する。45は丸瓦である。凸面の調整は不明瞭であるが、ナデの痕跡が部分的に認められる。凹面には、斜方向のケズリの痕跡が確認できる。側面にはケズリを施している。46、47は平瓦である。46は凸面に平行縄叩きの後にナデ、凹面には布目の上から斜め方向の削りを施している。側面はケズリを施し、端面にも削りを施す。端面には自然釉が付着している。47は凹面、凸面ともに調整は摩滅しており不明である。焼成についても軟質であり、端面、側面も調整は明瞭ではないが、形態からケズリを施していた可能性が高い。

出土遺物には8世紀代にさかのぼる資料を含むが、下限は9世紀前半まで下る。37の土師質土器碗については、10世紀中葉以降の年代が考えられるが、出土状況の認定に難が残るため、これを混入と考えれば、遺構の時期は9世紀前半の年代が考えられる。

SP4002 (図17)

調査区中央付近で検出された。平面形はややいびつであるが、一辺0.3m程の隅丸方形の柱穴である。断面の状況からは、後世に埋土の大半が削平されている状況が確認できた。出土遺物のうち、時期を特定できるものは出土していない。柱穴自体が小規模であることと、緩斜面の中央付近で検出されることから、褐灰色シルト層の堆積前、あるいはそれ以後に形成された遺構である可能性も考えられる。

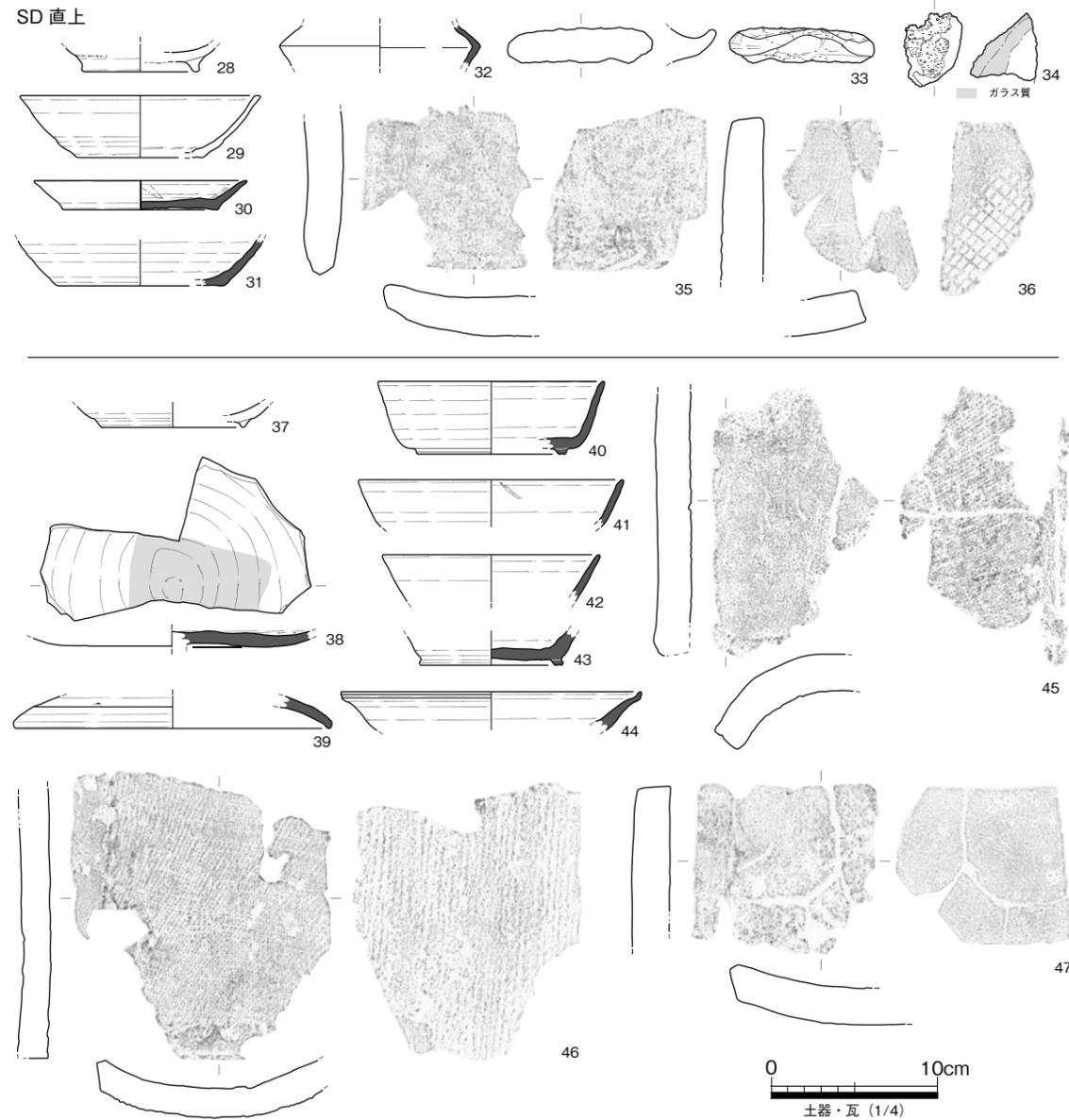


図16 36-4区 SD4001 出土遺物

(2) 36-5区の調査成果

36-4区と同様、現地表面から0.5m程で調査区南端では基盤層が確認される。調査区北側では緩斜面が確認され、その下位に平坦面が確認された。平坦面のとその周辺を中心に、複数の遺構が確認された。

褐灰色シルト (F層) 出土遺物 (図19)

48は不明鉄製品である。棒状の鉄製品の端を曲げる。用途等は不明であるが、工具や金具の一部であると考えられる。49は土師質土器皿である。底部径6.8cm、口径8.4cmを測る。底部から短く立ち上がる小皿であり、底部はヘラ切りによって切り離す。口縁部からはやや開き気味に外方に延びる。50は土師質土器碗である。底部のみが残存している。高台

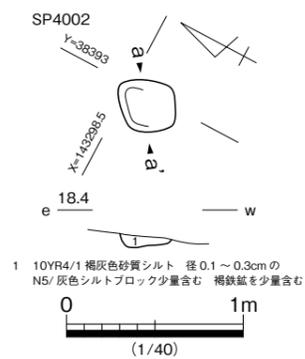


図17 36-4区 SP4002 平・断面図

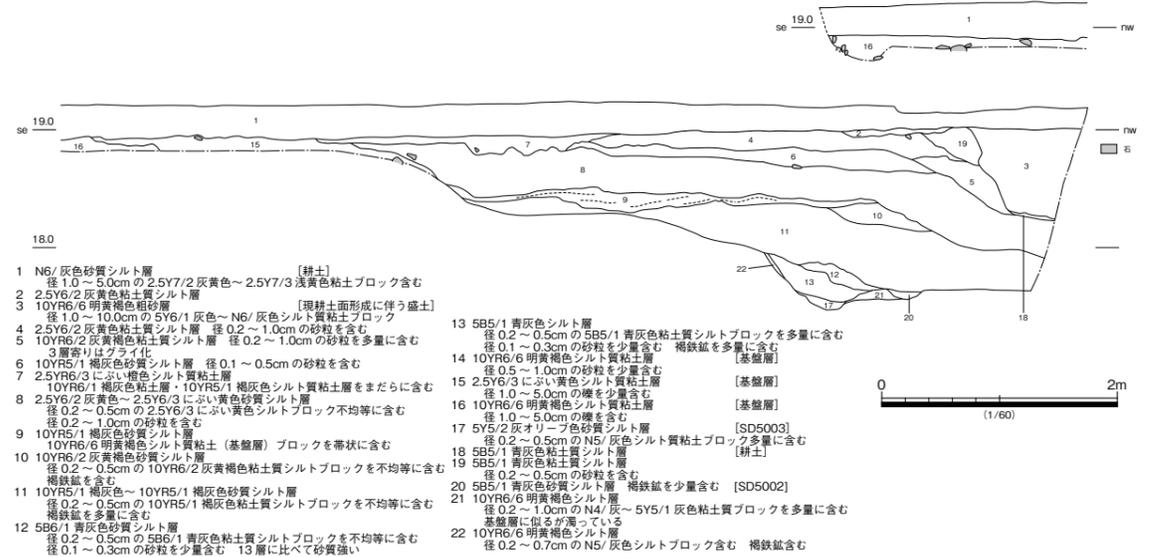


図18 36-5区西壁断面図

径6.0cmを測る。高台は、断面三角形形状であり、貼り付けの痕跡を残す。51は灰釉陶器碗である。底部のみ残存しており、高台径5.6cmを測る。高台は断面台形で、三日月形を呈する。底部には糸切りの痕跡が明瞭に残る。施釉の範囲や痕跡については明確に確認できない。53、54は須恵器蓋である。53は口径11.6cmを測る。天井部は平坦で、ヘラケズリを施す。口縁端部は、端部を軽く下方につまみ出したような形態を呈している。54は口縁端部はわずかに面を持たせるが、内面も含めて端部の下方への拡張は明瞭ではない。外面に他個体の溶着痕跡がみえる。52、55は須恵器壺である。52は底部のみが残存しており、細頸壺等に復元できる可能性が高い。高台径は8.0cmを測る。丸みを持つ高台が、やや外方に開くように付けられる。底部はヘラ切りであり、高台の内側には爪型の圧痕が確認できる。55は広口壺等の壺の底部と考えられる。底部径は11.0cmを測り、直線的に延びる体部を持つ。外面には、回転ヘラケズリが施されている。56は丸瓦である。凸面に布目とその後に施されたナデの、凹面に縄叩き目が確認される。側面、端面にはケズリが確認される。57-59は平瓦である。57は凹面に布目を残す。凸面には格子叩き目を施す。側面と端面にはケズリを施す。58は凸面に縄叩きを施し、その後端面付近にナデを施す。凹面には布目残りその後ナデを部分的に行っている。側面にも布目残り、端面はケズリが施される。59は屈曲が弱く、凹面に一部布目圧痕を残すが、大部分はケズリが施されている。側面は、一部ナデが施されるが、凹面側に段差が残り、段差中にも布目圧痕が認められる。凸面は調整が判然としないが、叩きのような圧痕が残る。

SP5001 (図20・21)

調査区北端で検出された、直径0.4m程の平面楕円形の柱穴である。深度は0.45m程で、柱痕が明瞭に確認できる。抜き取り等の痕跡は確認できない。出土遺物は図20に示した。

60は凸面に縄叩きを施す。平行叩きと斜行叩きが混在する。側面は調整が不明瞭であり、凹面には布目痕が部分的に残されるが、ケズリを受けている部分が多い。

出土遺物は僅少で、詳細な年代は不明であるが、検出位置から古代のものと考えられる。

SD5002 (図11・20)

調査区北側で検出された。調査区南側の丘陵に沿うように伸び、検出幅0.3m、深度0.1m程の小規模

な溝である。埋土からは、流水の痕跡は確認されない。出土遺物は図20に示した。61は須恵器甕である。体部のみが残存しているが、内面を硯面として転用している。

出土遺物からは、詳細な年代の特定は難しいが、SD5003に先行し、その年代を埋没の下限とする。

SD5003 (図11)

SD5002の南側で検出された。南側の丘陵の方向に沿うように伸びる。検出幅は0.3m程でSD5002と類似するが、底面の標高は少し低い。

出土遺物は、図化できるものが出土しておらず、年代を特定し得るものも少ない。SP5004の形成に伴う造成土の下位に位置することから、9世紀以前の遺構である可能性が高い。

SP5004 (図22・23)

調査区北側で検出された。長軸の径が1.2mを測る大型の柱穴である。平面形はややいびつであるが、隅丸方形に近い形をとる。柱穴の主軸はほぼ真北を向き、条里型地割の方向に合致しない。深度は0.5m程であり、抜取りを行った痕跡が断面に確認される。抜取り後に埋め戻しが行われていたようであり、近隣にて引き続き建物が建てられた可能性も考えられる。抜取りの下位から柱痕等の痕跡は明確に確認できなかったが、柱穴の底面に張り付けるように板状の石材が置かれていた。位置関係からも根石とし

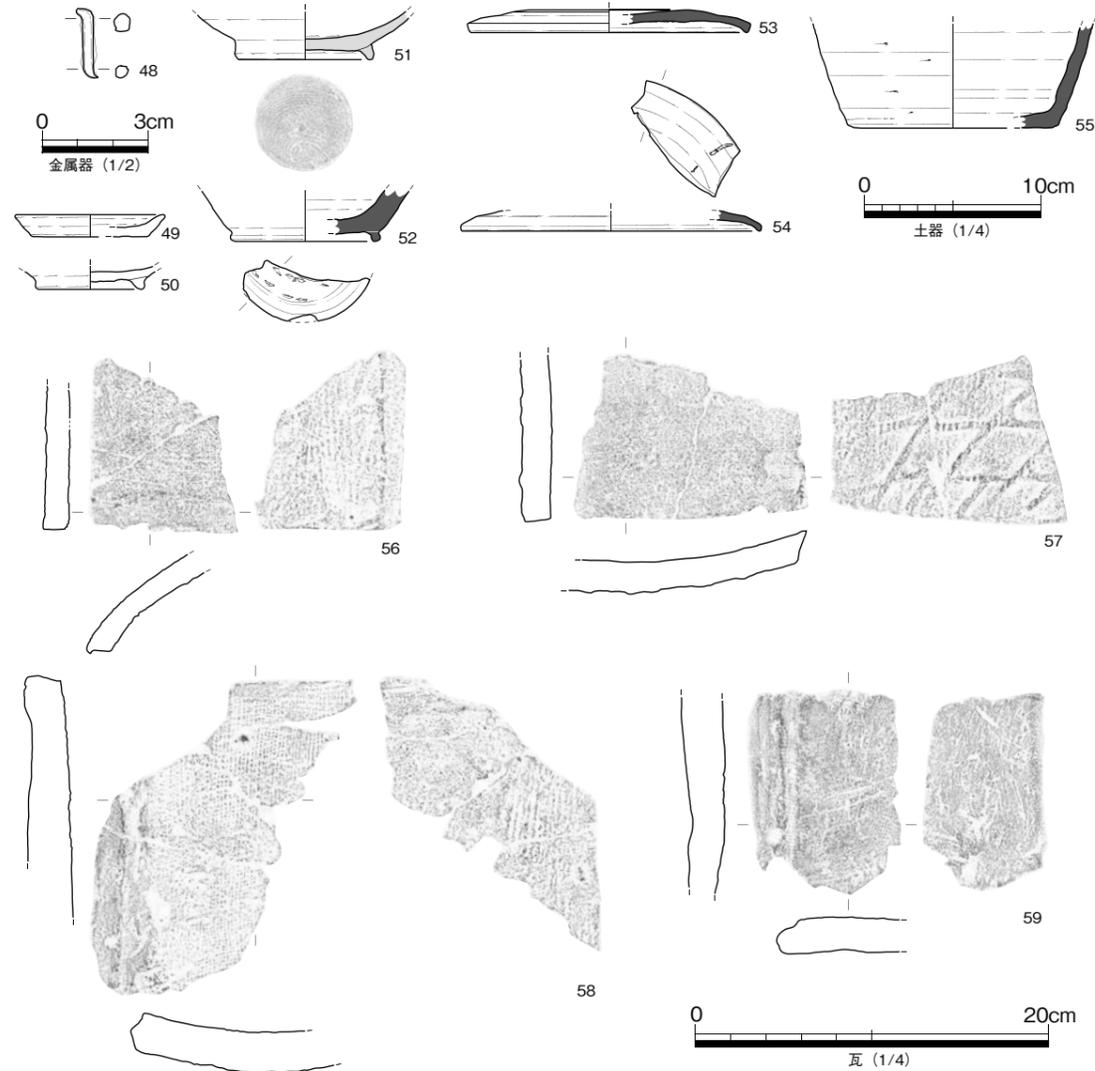


図19 36-5区 褐灰色シルト層出土遺物

て置かれた可能性が高い。

また、SP5004は調査区内の平坦面のより斜面側にある。そのため、傾斜地に柱穴を設ける際に南側に盛土を行った痕跡(灰白シルト層)が確認された(図22)。

盛土中から遺物が出土しており、SP5004と整地に伴う灰白シルト層出土遺物を図23に示した。

63は土師質土器皿である。調整が判然とし

ないが、底部はヘラ切りで切り離している。口縁部まではやや内湾気味に外方へ開く。端部は丸く収め、底部内面にはナデにより段差が生じている。64は須恵器壺である。口縁部のみ残存しており、外反する口縁部の端部を上方に拡張し面を作る。小型の壺の口縁部の可能性が高い。65は須恵器蓋である。口縁部のみ残存しており、口縁端部は下方に少し拡張し、端面にナデにより面を持たせる。外面調整は回転ナデのみが確認されている。66~68は須恵器杯である。66は口縁部が直線的に外方へ立ち上

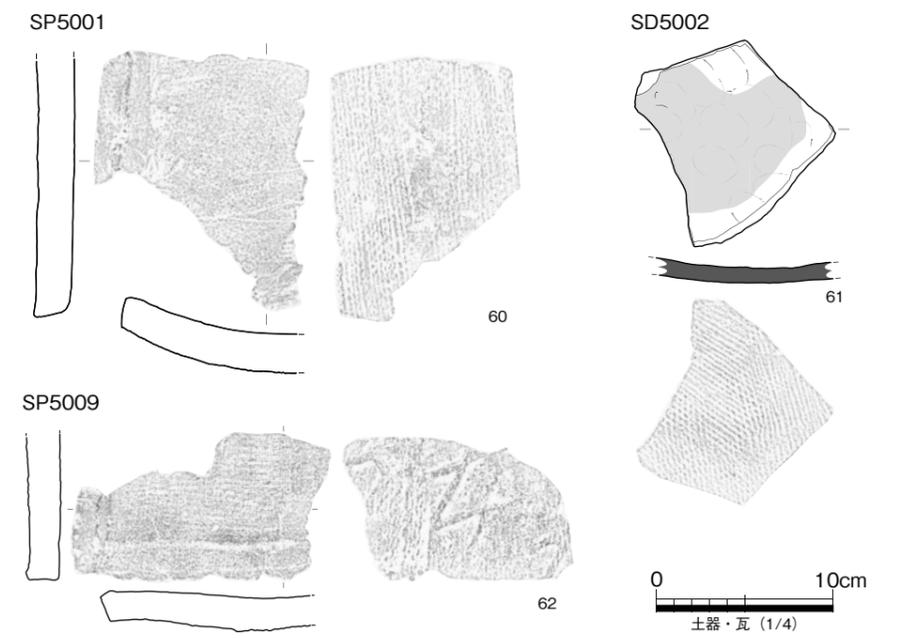


図20 36-5区 遺構出土遺物

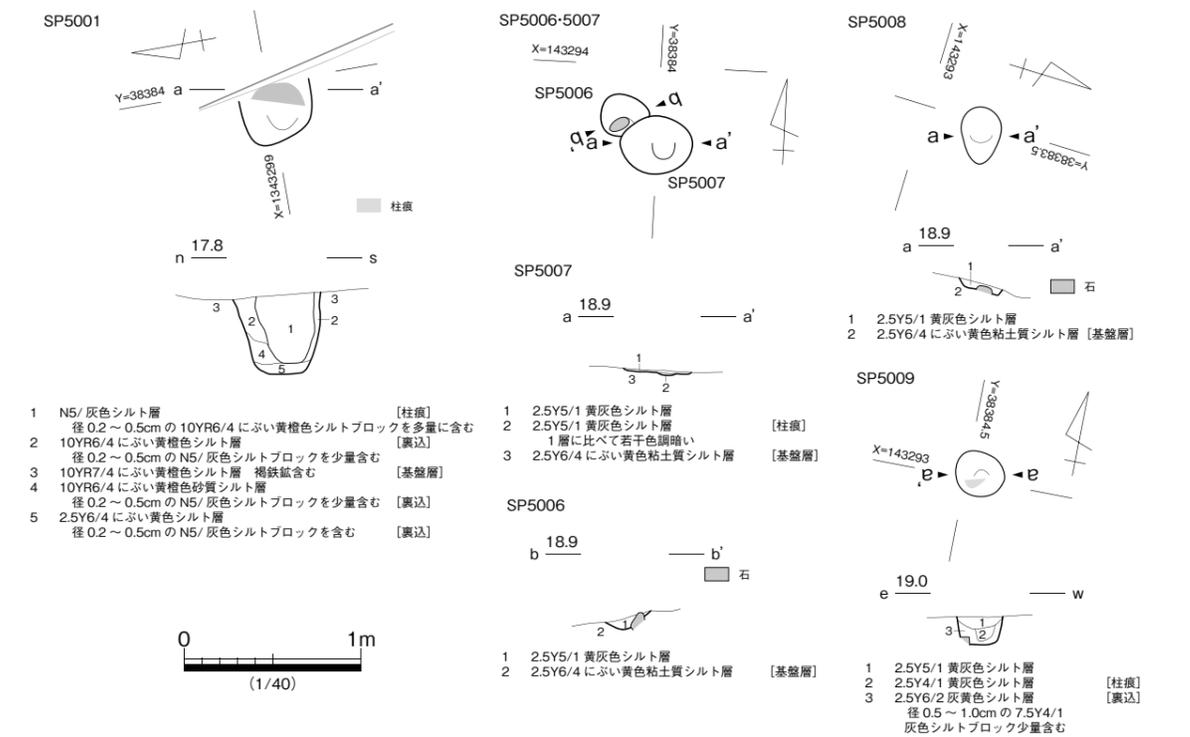


図21 36-5区 遺構平・断面図

がる。口縁端部は丸く収め、内面、外面ともに細かな単位でナデが確認される。67は口縁部が直線的に外方へ広がり、端部は丸く収める。外面には細かな単位で回転ナデが確認できる。68は底部のみが残存しており、底部はヘラ切りによって切り離す。外面には細かい単位で回転ナデが施されている。69、70は平瓦である。69は凸面に格子叩きを確認される。凹面には布目が残る部分もあるが、削りにより調整を施されている部分もある。70は焼成がやや不良である。凸面に格子叩きを確認され、凹面には布目が残るが、端面の付近にはナデを施す。

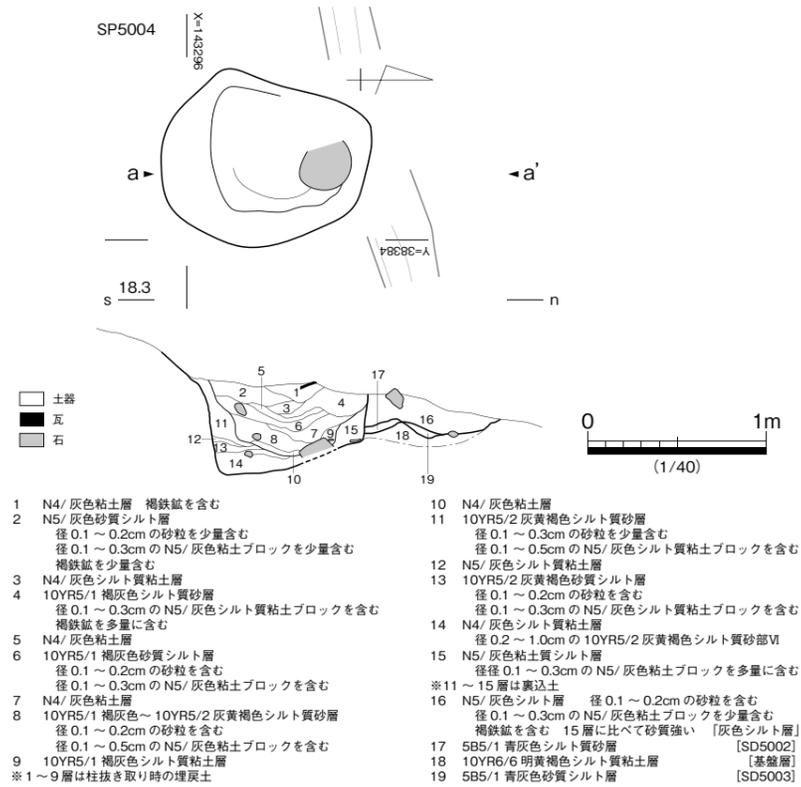


図22 36-5区 SP5004 平・断面図

出土遺物のうち、瓦類に関しては格子叩きの使用等から、古代でも古相の特徴を示す。しかし、63のような土師質土器皿が含まれ、これは佐藤編年VI期以降に相当するため、11世紀前半を埋没の下限とし、柱穴についてはそれ以前に機能したものと考えられる。

灰白シルト層出土遺物 (図23)

71、72は須恵器杯である。71は底部付近に強めの回転ナデを施し、さらに上部は直線的に外方に開く口縁部を持つ。底部はヘラ切りによって切り離している。72は底部からやや急に口縁部まで直線的に立ち上がる形態を呈している。底部はヘラ切りによって切り離し、内外面共に回転ナデによって成形する。73は平瓦である。凹面には布目を確認できる。側面にはケズリが確認でき、端面についても同様にケズリによって面取りを行う。凸面には叩きが施されるが、その後にナデによって一部を消されている。全体に胎土に大きめの砂粒を含むことが特徴である。

須恵器杯が佐藤編年IV期中相に位置づけられ、10世紀中頃を下限とする。

灰白シルト層はSP5004の上限年代を示し、SP5004は10世紀後半~11世紀のものであると考えられる。なお、灰白色シルトの設置年代は、下位で検出されるSD5003の下限年代も示す。

SD5005 (図11)

調査区中央で検出された溝である、長楕円形の土坑が並ぶような平面形を呈する。出土遺物は僅少であり、年代の決定の根拠となる資料は認められないが、周囲の小柱穴と近い時期である可能性が高い。

SP5006・5007 (図21)

調査区中央の緩斜面上で検出された。2基の柱穴が切り合っており、いずれも残存状況が非常に悪い。

SP5006は底面に石材が置かれており、根石として置かれた可能性がある。年代を示す遺物は出土していない。柱穴の形態や、より南側で検出されることから、SP5004より後出するものと考えられる。

SP5008 (図11・21)

調査区中央の緩斜面上で検出された。長楕円形の柱穴であり、深度は0.1m程である。底面には石材が置かれている。図化し得るものや、年代を示す遺物は出土していない。

SP5009 (図11・20・21)

調査区中央の緩斜面上で検出された。直径0.3mの平面円形の柱穴である。深度は0.2mを測り、柱痕が認められる。出土遺物については、図化できたものを図20に示している。

62は平瓦である。凸面は縄叩きの後に、格子叩きを施している。側面及び端面にはケズリの痕跡が確認できる。凹面には布目が残る。

出土遺物からの年代の特定は難しいが、その規模や柱穴の位置から、SP5006やSP5007同様、11世紀以降の年代が考えられる。

(3) 36-6区の調査成果

調査区南部では、耕作土直下で基盤層が確認され、調査区北側は同様に緩斜面地が確認される。斜面の埋没に伴う層位は、36-4、5区と対応するE層、F層と類似する層は確認されない。一方でさらに下位の、斜面下の平坦面の直上に堆積している層は、他の調査区ではみられず、異なる段階の造成が行われている。これらの層からは、図化可能な遺物が出土しておらず、土師質土器の小片が確認されるのみであり詳細な年代特定は難しい。平坦面の遺構の存続時期が36-4、5区と共通するのであれば、この層(K層)の堆積の上限年代を11世紀後半に比定することが可能である。

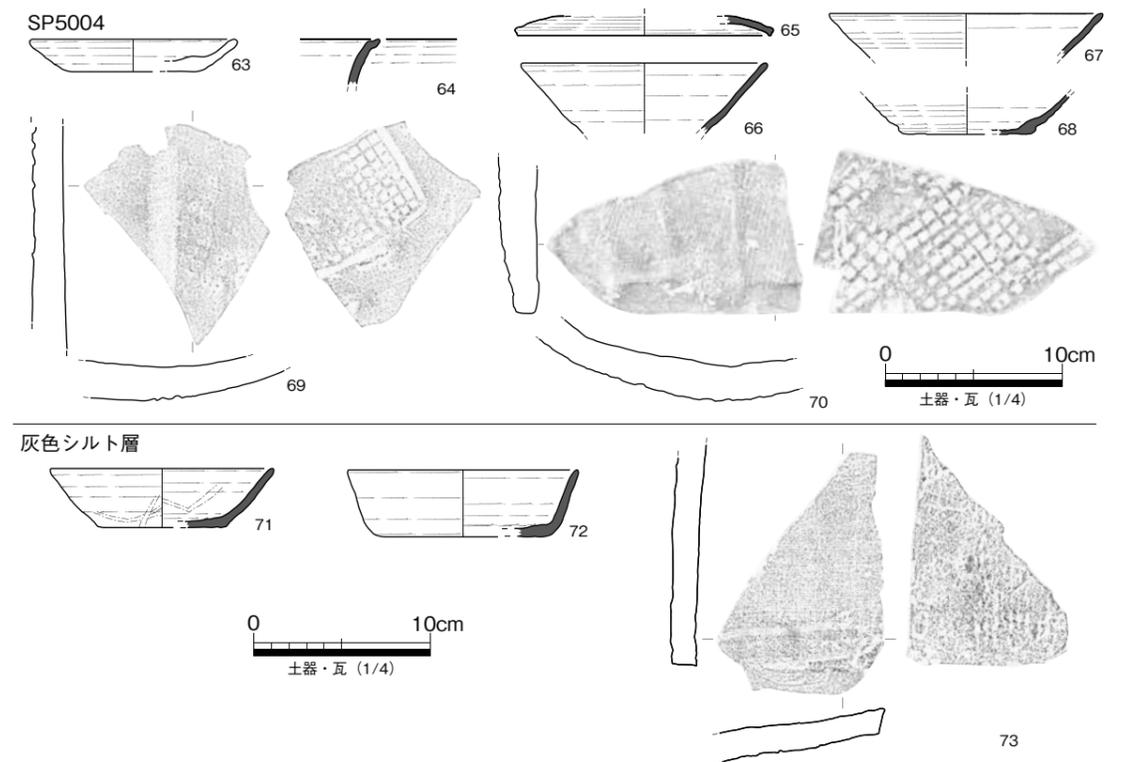


図23 36-5区 SP5004 出土遺物及び灰色シルト層出土遺物

(4) 遺構外出土遺物 (図24)

36-4~6区の遺構外出土遺物については、図24に挙げる。

74は須恵器杯である。外方にやや踏ん張る形状を呈する高台を持つ。体部は直線的に伸びる。高台に他の個体の溶着が認められる。75は石槍、76は石核、77は剥片である。石材はサヌカイトであり、いずれも人為的な加工の痕跡が残されるが、他の出土資料との接合関係が認められる個体はなく、集中的な出土も見られない。

これらの石器は古代以降の堆積層から出土することから、二次的な移動を受けた可能性が高い。しかし、他にも今回調査で石器やサヌカイト剥片が他にも一定量認められることから、近隣に縄文時代、あるいは旧石器時代の遺跡が所在していた可能性が高い。

(5) 開法寺池南地区における調査の所見

36-4・5区で検出された平坦面や柱穴・溝の形成は、開法寺跡を含めた讃岐国府跡が継続する期間内に当たり、讃岐国府跡に関連する施設を構成するものと考えられる。古代の柱穴や溝の存在は、調査地点の北方の開法寺池南半や西方に広がる施設が展開することを示唆する。

36-6区でも調査区北端で平坦面を確認しているが、その上位に堆積するK層は4・5区の盛土と土質が異なり、性格の特定が難しい。出土した土師質土器小片から現時点ではK層を11世紀後半~12世紀前半としており、平坦面はそれ以前の形成となると考えられる。

36-6区の平坦面形成については、その時期決定の根拠に乏しい状況であるが、36-4・5区の状況から、8世紀までさかのぼる可能性がある。

8世紀後半~11世紀前半は、讃岐国府跡東方地区の時期区分では第4期に当たり(香川県教育委員会2019)、遺構の内容がもっとも充実する。開法寺池南地区も連動するといえる。開法寺東方地区の充実に伴い、36次調査地点の周辺まで開発が行われた可能性を考えることができる。

また、過去に調査された池ノ山丘陵上の南谷遺跡でも、古代から中世にかけての溝や遺物が確認されており、丘陵部も関連する施設が所在した可能性が考えられる。

3. 小結

36次調査では、讃岐国府跡継続期間と同時期の遺物が出土し、開法寺池南地区では柱穴や溝といった9~11世紀の遺構を検出したほか、それらに伴う地形改変の状況についても明らかとなった。

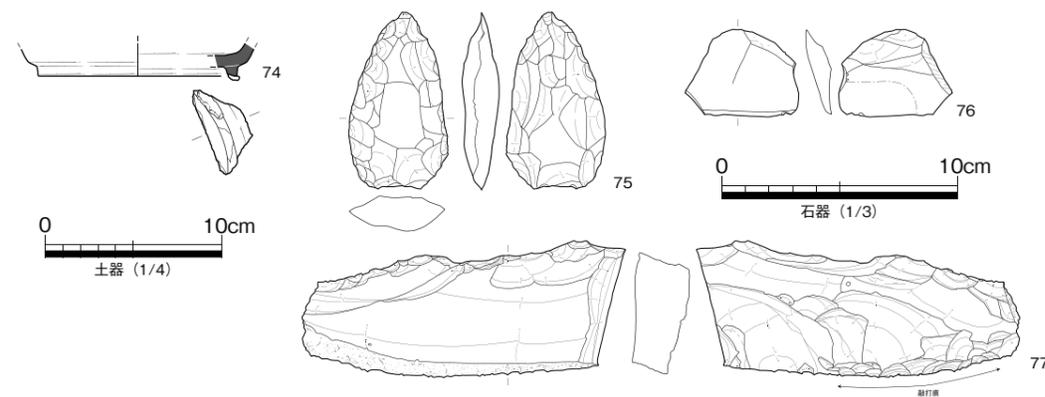


図24 36-4~6区 遺構外出土遺物

開法寺池北地区も、人為的な地形改変を示唆する材料を得たほか、従来想定されていた低地帯(低地帯2)の位置についての地形的な情報についても得ることができた。

なお、現在の開法寺池は、発掘調査は実施されていないものの、堤体付近において鴟尾等の瓦類が採集されている。開法寺池北地区、開法寺池南地区、開法寺池を含めた範囲は、さらに西方も含め讃岐国府跡に関連する時期の遺構・遺物が展開する可能性が高い範囲である。

第3節 第37次調査の成果

第37次調査は、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地「讃岐国府跡」のほぼ中央と、北縁より北側の2地点について、前者を地点1、後者を地点2として行った。調査区は計5か所設定しており、それぞれの地点名に関わらず、調査着手の順に応じて、37-1~5区の名称を与えている(図25・56)。

発掘調査地点はいずれも水田で、令和元年11月から令和2年3月までの期間で調査を行った。

以下では、地点1(37-1~3・5区)、地点2(37-4区)に分けて報告を行う。

1. 地点1の調査

地点1は、第7次調査等で検出されていた区画施設の延長を確認するための調査区を設定した。調査対象地は、現状でも東の筆との間に標高差が認められ、施設の東辺が推定される。また、馬差し大貫とよばれる南北道(木下1977)が東接して復元される等、注目すべき要素も多い。

37-1、2区は区画の東辺を、37-3区は区画の北辺を確認するために設定した。37-5区は37-3区で確認された建物の構造・規模を確認するために設定した。

(1) 基本層序

地点1は多少の差はあるが基本的に層序関係は共通するため前後の層位も含めた遺構面の関係について整理する。

まず遺構面は、床土から基盤層までの間に複数の包含層が確認され、それらの間で遺構面は、最大3面確認できる。

図26の大別層位4層とした層の上面を1面とする。4層中からは中世後半の遺物が確認され、1面の遺構が中世後半を主体にし、近世初頭まで下りうることから考えても、4層の堆積年代は中世後半であると考えられる。大別層位5層下位に、黒褐色系の粗砂混りシルト層である6層が確認された。これは調査範囲の中でほぼ水平に堆積している。6層は上下の層と大きく異なり、多量に遺物を含み、最も新しいものは13世紀後半に比定できる。類似する層は近隣の6次調査等でも確認されており(香川県教育委員会2016)、対応する層位の可能性がある。

6層下位で2面が検出される。遺構の上限年代や、7層中に含まれる遺物から10世紀後半~11世紀前半の堆積が想定される。2面では11世紀後半~13世紀の遺構が確認され、37-3区と37-5区では7層が確認できない。7層が低い範囲にむかうにつれて厚く堆積する状況からは、2面の遺構形成に伴う部分的な整地層である可能性も指摘できる。

7層の下位で基盤層(3面)が確認された。基盤層は粗砂混りのシルトであり、検出された遺構は7世紀~10世紀を主体とする。縄文時代晩期の土器や石器が地点1含め、周囲で確認されることから、

基盤層は縄文時代晩期の堆積土か、あるいは3面で該期の遺構が周囲に存在する可能性が考えられる。

なお、今回調査地点の一部は低地帯3の推定範囲と重複する。低地帯3は、従来施設の範囲を推定する根拠の一つとなっていた。37-3区は、低地帯推定域に直交する形で設定されているが、基盤層の標高を見ても、北側へと下がる地形や、明確な低地帯の埋土は確認できない。しかし、わずかではあるが北側へ傾斜する状況や、37-3区北端では基盤層がより粒径の粗い土が主体となる（37-3区10層）ことから、地形の凹凸は想定できる。地点1の北側で行われた6次調査の成果を見ても、基盤層の標高は、概ね37-3区と同じであるが、37-3区に近づくと、わずかであるが下がっていることは想定されるが、施設を区画するほどの規模ではない可能性が高い。

以上のことから、低地帯3は、丘陵由来の微高地に挟まれた谷筋に位置するが、古代の遺構形成時には、埋没がかなり進行しており、それらが施設を画するような状況になかった可能性が高い。このことは、後述するが低地帯にかかるように建物が見られる点とも整合する。

ただし、更に北側の地点2や、南側の開法寺東方地区の例をみると、他の低地帯については、讃岐国府の施設配置に影響している場合もある。

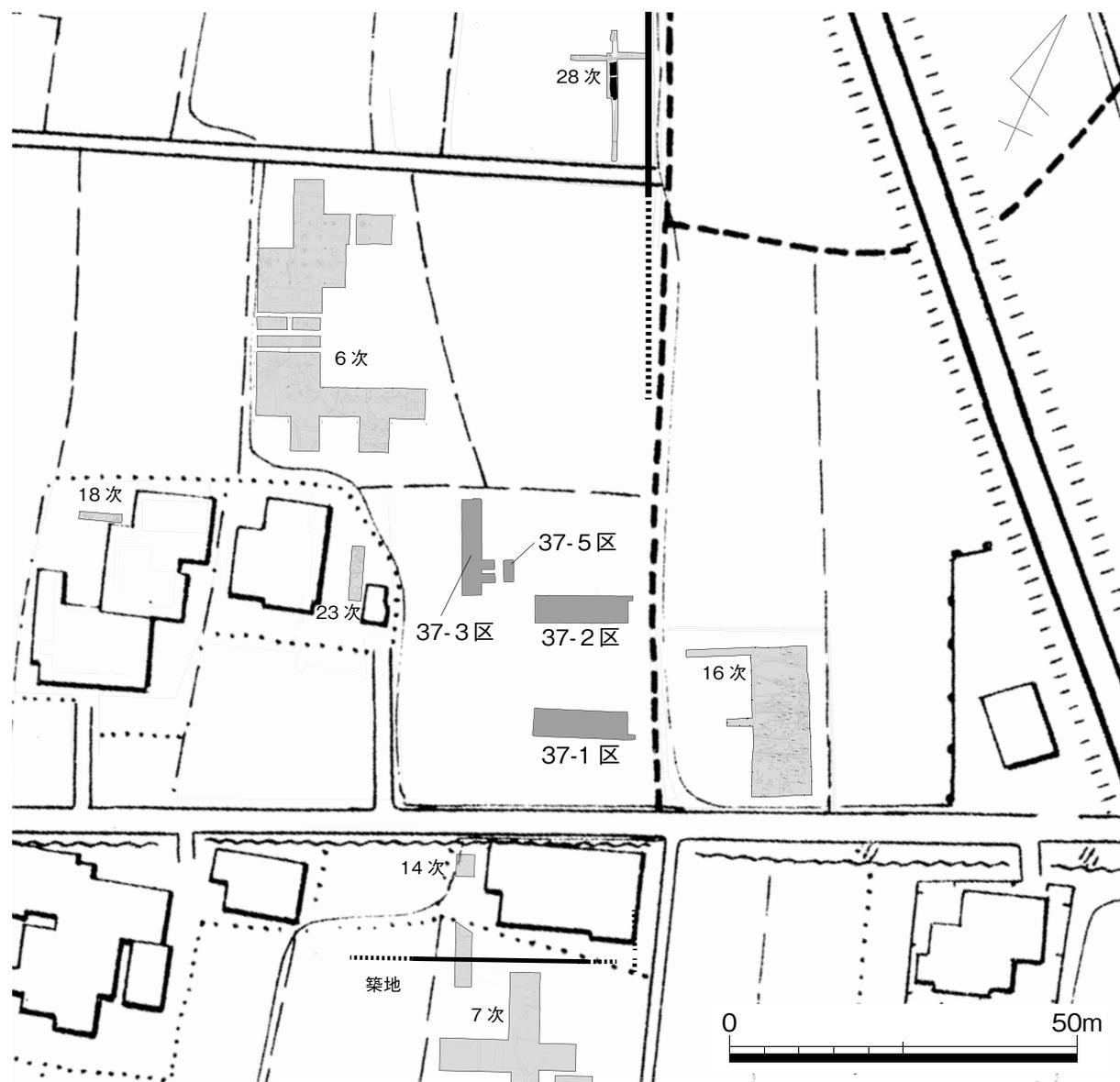


図 25 37次調査調査地点

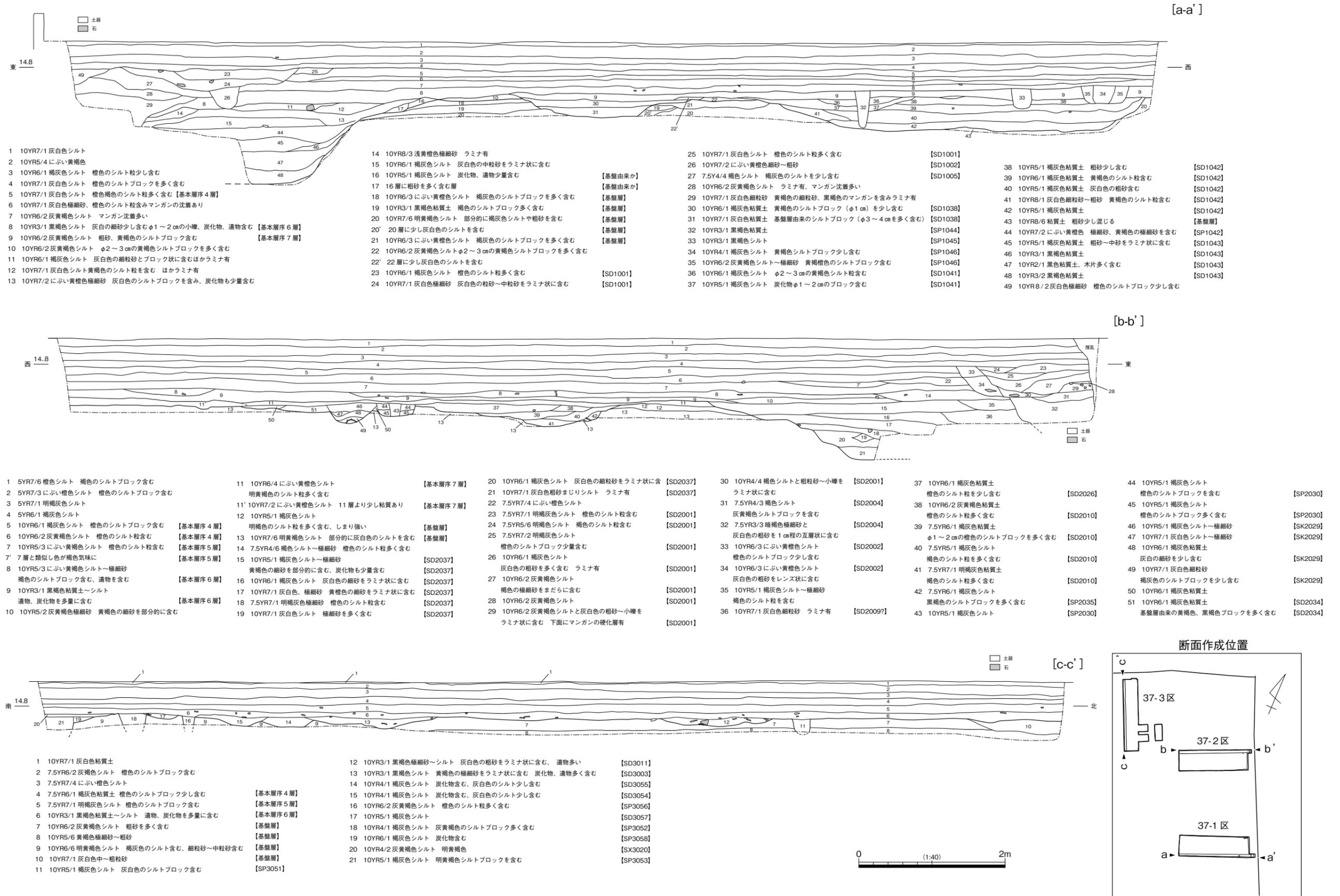


図26 37-1~3区 調査区壁面断面

(2) 37 - 1 区の調査成果

3面の遺構面が確認された、各遺構面の遺構の概要を述べた上で、主要な遺構について報告を行う。

① 1面の遺構 (図 27)

中世後半以降の遺構が検出された。主な遺構は調査区の東端において確認された溝 (SD1001 ~ 1005) である。溝はいずれも地割に沿う形で南北方向に延びる。遺構名は異なるが、37 - 2区においても同様の溝の延長が確認できる。埋土には流水痕跡が確認でき、埋没と再掘削が数度にわたって行われている。現在も隣接して用水路が所在することから、耕地に伴う水路か地境の溝と考えられる。

出土遺物は、溝の埋没時期に近いものと、古代の遺物で特徴的なものを図示した。

SD1001 出土遺物 (図 28)

78、79は土師質土器足釜である。78は口縁端部がやや内側へ延び、突帯がやや上方へ向く。79は脚部片である。

SD1002 出土遺物 (図 28)

80は土師質土器皿である。底部から口縁部まで大きく開き、端部は丸くおさめる。81は白磁椀である。口縁端部が玉縁状に肥厚する。82、84は土師質土器鍋である。82は口縁部が内湾し、口縁端部に突帯を巡らせる。84は口縁部が屈曲し外方に開く。83は土師質土器足釜である。脚部であり胴部についても一部残存している。85は軒丸瓦である。瓦当面のみ残存しており、四葉文で、中房の周囲及び外周には圏線と珠文を持つ。焼成は全体的に不良であり、調整等の痕跡も明瞭に確認できない。讃岐国府跡ではこれまで確認されていない型式であり、同型式のものは、十瓶山窯跡群で採集されたもの (香川県 1987) と、屋島寺出土 (高松市 2007) のものが挙げられ、10世紀後半～11世紀の年代が考えられる。

SD1005 出土遺物 (図 28)

86は土師質土器足釜である。脚部の破片であり、屈曲部分のみ残る。

以上の遺構は、出土遺物に古代のものを含む一方で中世後半以降の遺物を含み、その時期が遺構の上限年代と考えられる。

② 2面の遺構 (図 29)

柱穴・溝が確認された。溝はいずれも条里地割に合致する方向で開削され、南北方向のもの (SD1009、SD1010、SD1023、SD1035、SD1037) と、東西方向のもの (SD1007、SD1008、SD1011、SD1025、SD1031、SD1039) が確認された。いずれも検出幅 0.3 m 程度、深度 0.2 m 以内のものが多い。

柱穴は直径 0.3 m 以内の小規模柱穴が多い。柱穴の配置から、建物が1棟復元された。SB1001は調査区内で2間×2間以上の規模が想定できるが、南辺が確認されていない。方位は条里地割の方向から少し東に振れる。柱穴間の距離は 1.8 ~ 2.1 m であり、東西方向で柱穴間距離が広い。このほかの柱穴についても復元を試みたが、柱穴列等は復元できない。

2面の遺構出土遺物は、図 32 ~ 33 に示した。

SD1007 出土遺物 (図 32)

87は土師質土器皿である。底部から口縁部へやや外反しながら伸び、端部には面を持たせる。88は土師質土器杯である。底部からやや大きく口縁部まで広がり、口縁端部は丸くおさめる。89は和泉型瓦器椀である。外面下半にはユビオサエが確認され、内面は斜め方向にミガキを施す。ミガキの密度

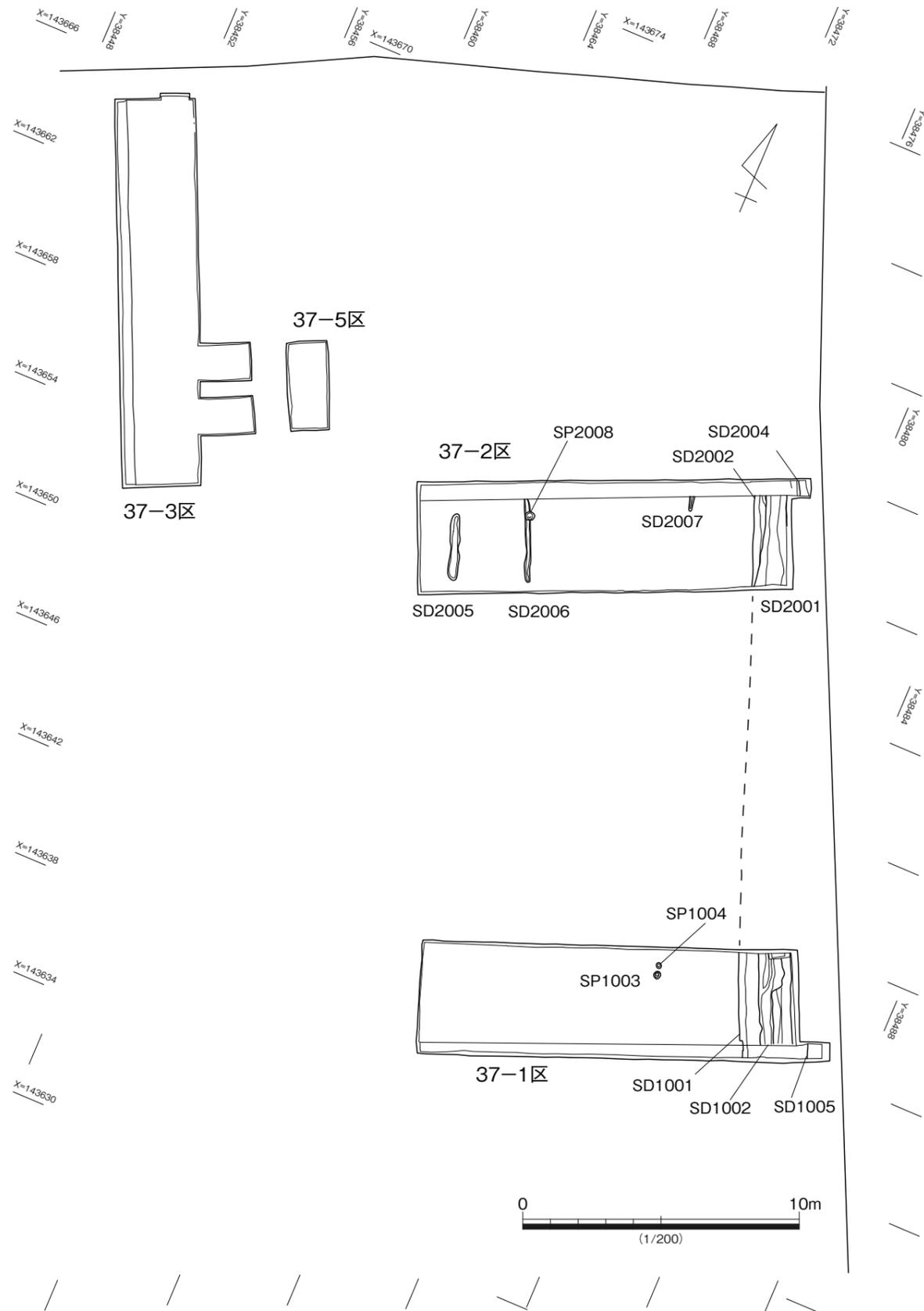


図 27 37-1～3区 1面遺構平面図

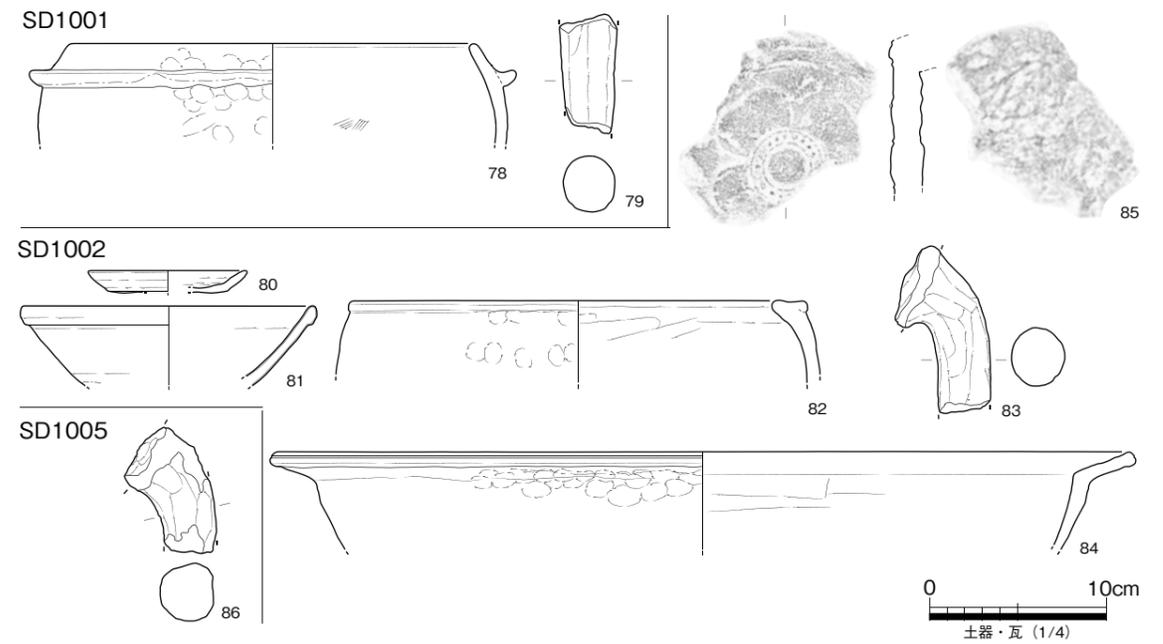


図 28 37-1区 1面遺構出土遺物

は粗い。90は土師質土器碗である。断面方形の高台がとりつき、底部外面にはヘラ切りの痕跡を残す。体部は直線的に伸びる。内面にナデ以外の調整は確認できない。胎土や製作技法上の特徴から、吉備系の土師質土器碗であると判断できる。91は白磁皿である。口縁端部がやや屈曲する形態を呈し、太宰府分類皿V2に分類できる。92は鉄滓である。

91の白磁等はやや古い様相を示すものの、89の瓦器碗の年代等から12世紀後半を下限とする。

SD1008 出土遺物 (図 32)

93は白磁碗である。口縁端部を肥厚させるタイプのもので、太宰府分類碗IV類にあたる。

SD1008は遺物出土量が少ないが、93の年代から、12世紀代の埋没が想定される。

SD1011 出土遺物 (図 32)

94は土師質土器皿である。口縁部がやや内湾し、端部は丸くおさめる。95は和泉型瓦器碗である。底部のみ残存しており断面逆三角形の高台が取り付く。内面には斜め方向のミガキを施す。96、97は土師質土器杯である。96は底部のみ残存しており、ほぼ直線的に外方に開く体部を持つ。97は口縁端部まで残存しており、口縁端部まで大きく開く形態を呈する。98は黒色土器碗である。高台は残存しておらず、口縁端部まで残存している。内面のみ黒化しており、口縁端部のみ外反する。

土師質土器による年代比定は難しいが、瓦器碗の年代からは12世紀後半を下限とする。

SD1010 出土遺物 (図 32)

99は黒色土器碗である。断面方形の高台を持ち、やや外方に開く。内面のみ黒化しており、ミガキが確認できる。100は和泉型瓦器碗である。低い高台を持ち、外面にはユビオサエが確認される。内面には横方向のミガキが確認される。12世紀後半に比定される。101は土師質土器碗である。断面三角形の高台が付く。底部には高台の外側までヘラ切りが及ぶ。胎土の特徴や製作技法から、吉備系の土師質土器碗であると判断した。102は須恵器壺である。底部付近には横方向のケズリを施し、その上部にはタタキの痕跡が認められる。佐藤編年の壺Cに相当し、詳細な型式比定は難しいが、IV-2～3段階に

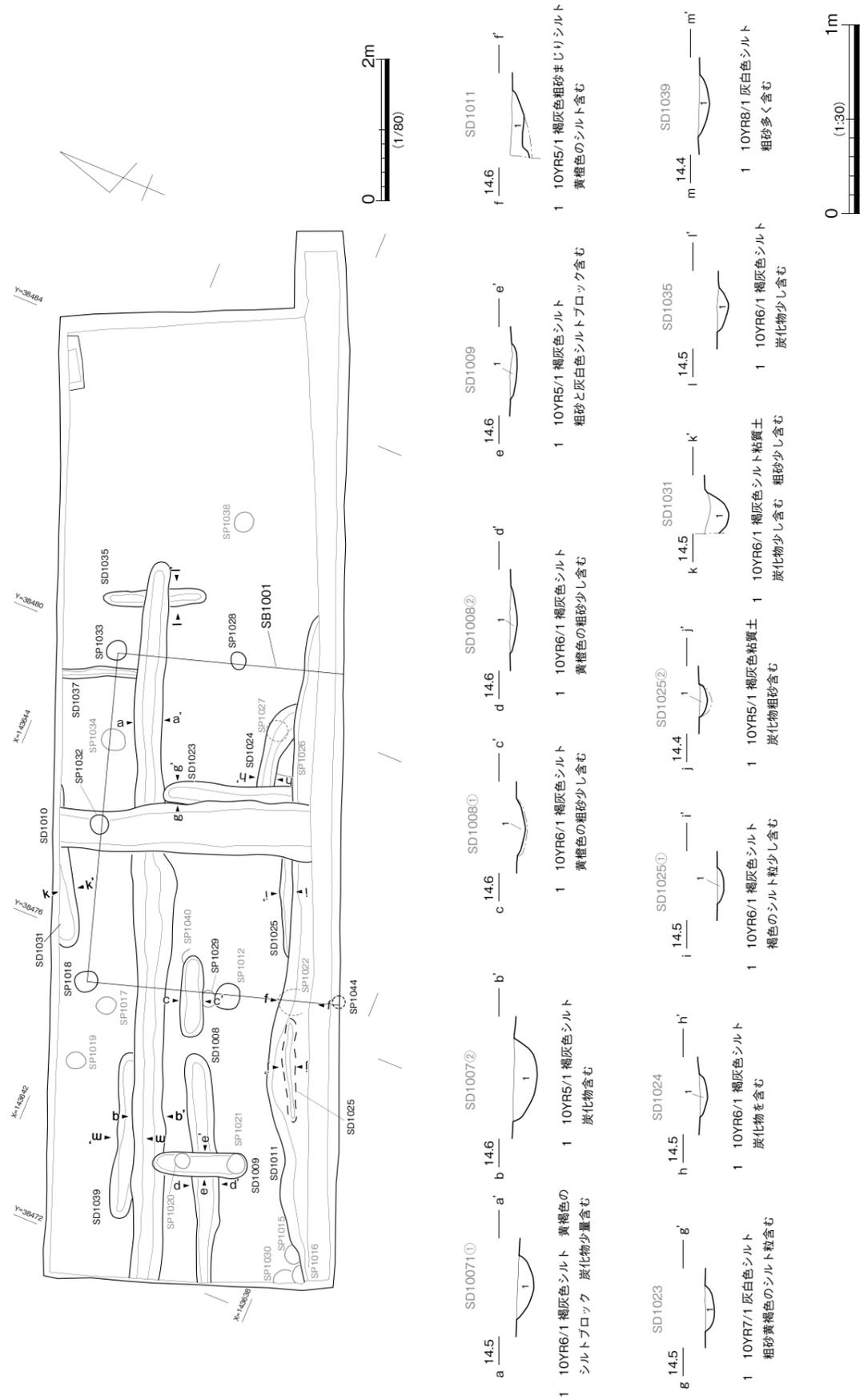


図 29 37-1区 2面遺構平面図及びSD断面図

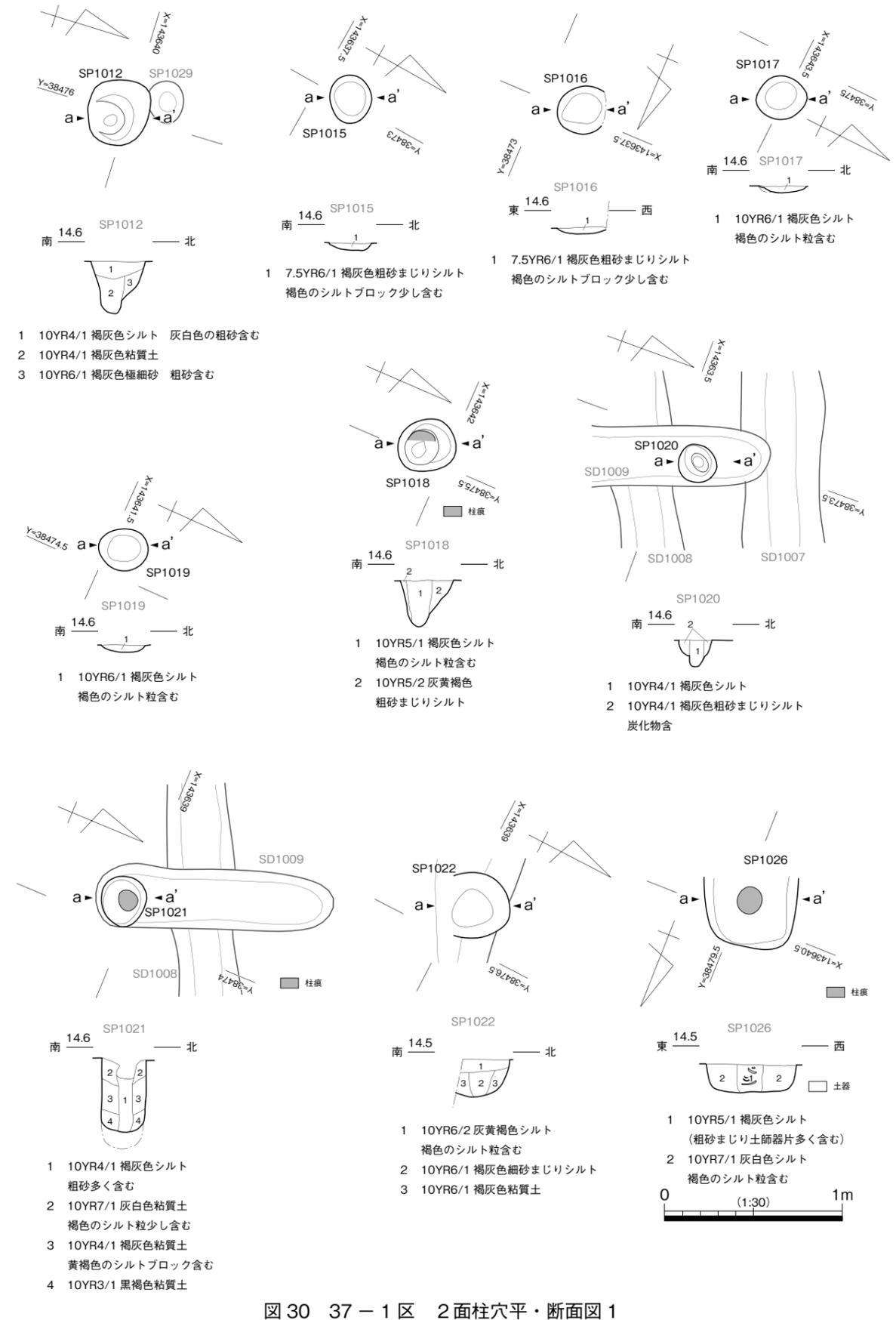


図 30 37-1区 2面柱穴平・断面図 1

比定され、12世紀代を中心とした年代が想定される。

瓦器碗や土師質土器碗の年代等とも併せ12世紀代を主体とした年代が考えられる。

SD1023 出土遺物 (図 32)

103は土師質土器碗である。口縁端部まで直線的に開き、底部との境界付近において明確な稜を持つ。底部はヘラ切りによって切り離す。胎土や形態から、吉備系の土師質土器碗であると考えられる。

出土遺物が少なく、詳細な年代を特定することが難しいが、遺構の切り合いから、13世紀まで下る可能性は低い。

SD1024 出土遺物 (図 32)

104は土師質土器皿である。底部から内湾気味に口縁部まで伸び、端部はやや尖る。105は土師質土器碗である。体部は内湾し、端部は丸くおさめる。

出土遺物から年代を特定することは難しいが、他の遺構との切り合いから、12世紀前半を中心とした年代を考えたい。

SD1025 出土遺物 (図 32)

106は黒色土器碗である。高台付近のみが残存している。内面のみ黒化しており、内面にはミガキの

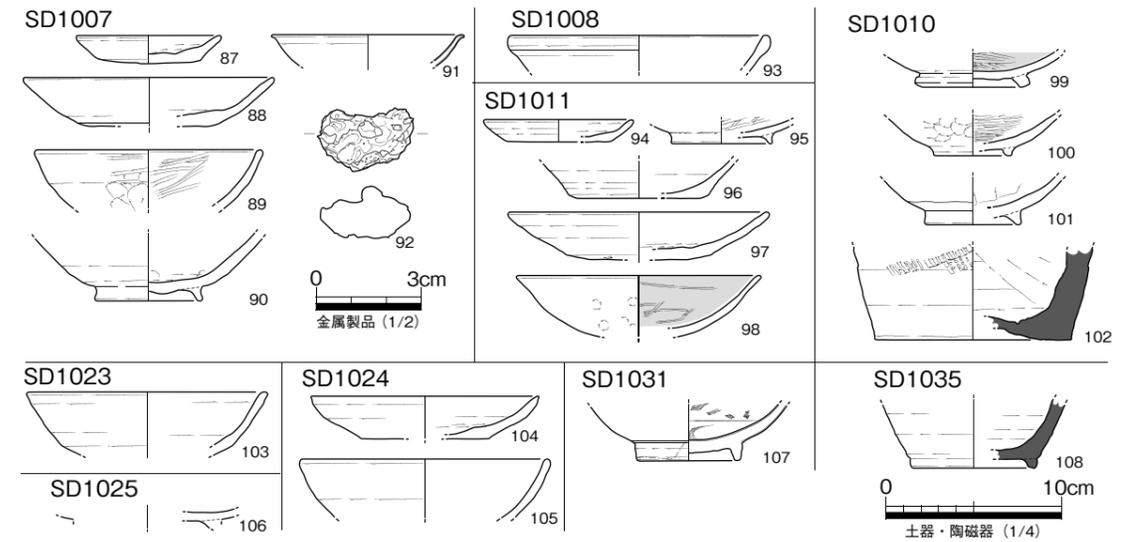


図 32 37-1区 2面溝出土遺物

痕跡が確認できる。

SD1031 出土遺物 (図 32)

107は白磁碗である。口縁部が残存していない。高台は細長く、部分的に施釉される部分も見られるが、多くは露胎である。外面は無文で、内面は櫛目文が施される。太宰府分類碗V 4b類に比定できる。

年代を比定できる資料が少ないが、出土白磁の年代から12世紀後半の年代が想定できる。

SD1035 出土遺物 (図 32)

108は須恵器壺である。底部より上部が残存していないが、小形の長頸壺の可能性はある。低平な高台を持ち、明確な稜を持たずに底部から体部に至る特徴から、9世紀から10世紀に比定される。

出土遺物からその年代を特定することは難しい。SD1007に先行しており、下限は12世紀後半となるが、10～11世紀代の遺構となる可能性がある。

SP1012 (SB1001) 出土遺物 (図 33)

109は土師質土器皿である。底部から大きく開き直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。110は瓦器碗である。口縁端部にナデを施し凹線状にし、外面にはミガキを施す。和泉型瓦器碗で、12世紀前半の年代が考えられる。111は須恵器碗である。高い高台を持ち、内面にミガキが確認される。佐藤分類碗A II類であり、形態や技法の特徴から、中世II-1期に比定でき、12世紀中葉～後葉の年代が考えられる。

出土遺物からは、12世紀代中葉～後葉の遺構であると考えられる。

SP1018 (SB1001) 出土遺物 (図 33)

112は須恵器蓋である。残存状況は良好ではないが、内面には全面に硯としての使用に伴う摩滅痕跡が確認できる転用硯である。

SP1019 出土遺物 (図 33)

113は土師質土器杯である。口縁端部にはナデにより面を持たせ、体部下半にはナデを施す。

SP1020 出土遺物 (図 33)

114は須恵器碗である。口縁部のみ残存しているが、口縁部の開きや形態から碗と判断した。

SP1021 出土遺物 (図 33)

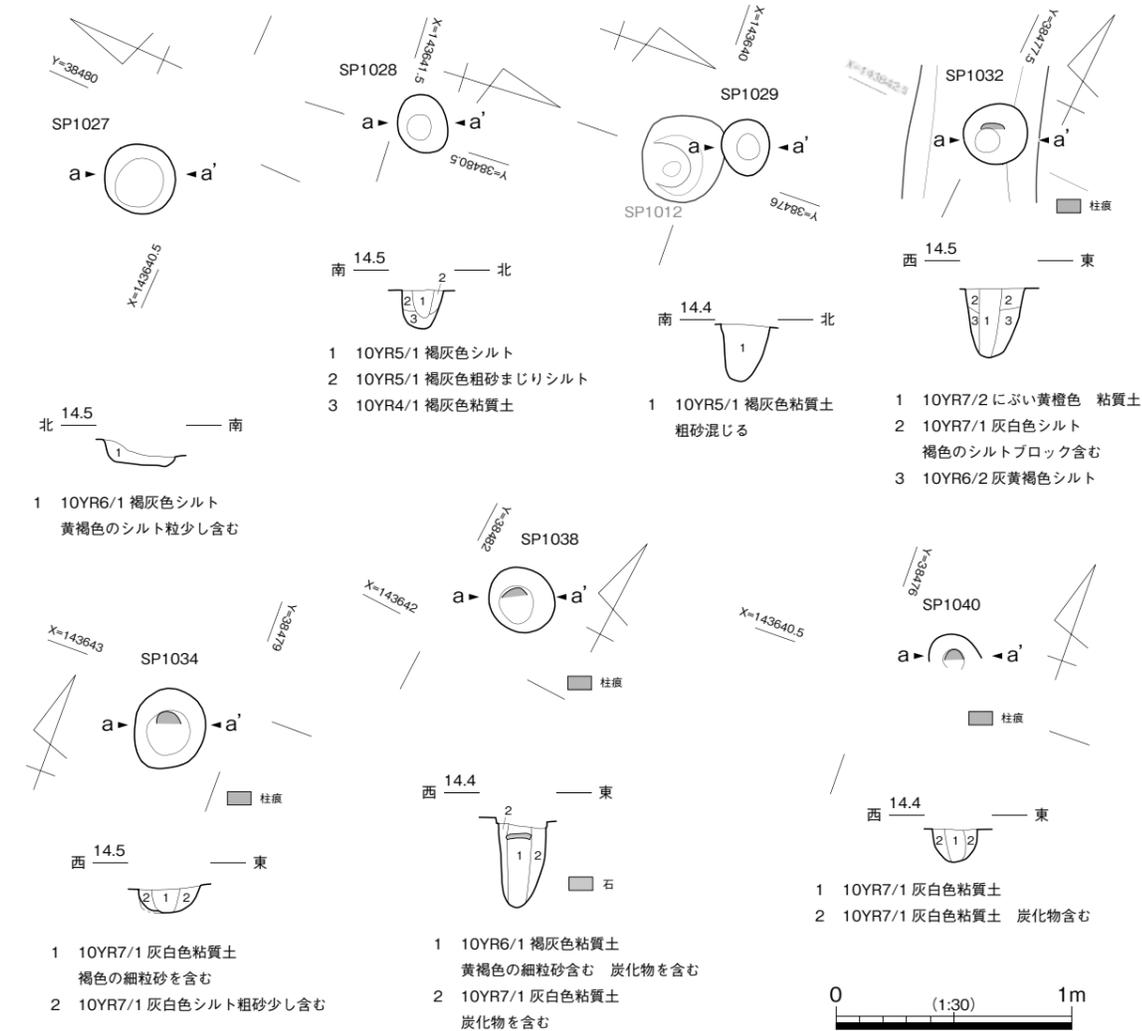


図 31 37-1区 2面柱穴平・断面図2

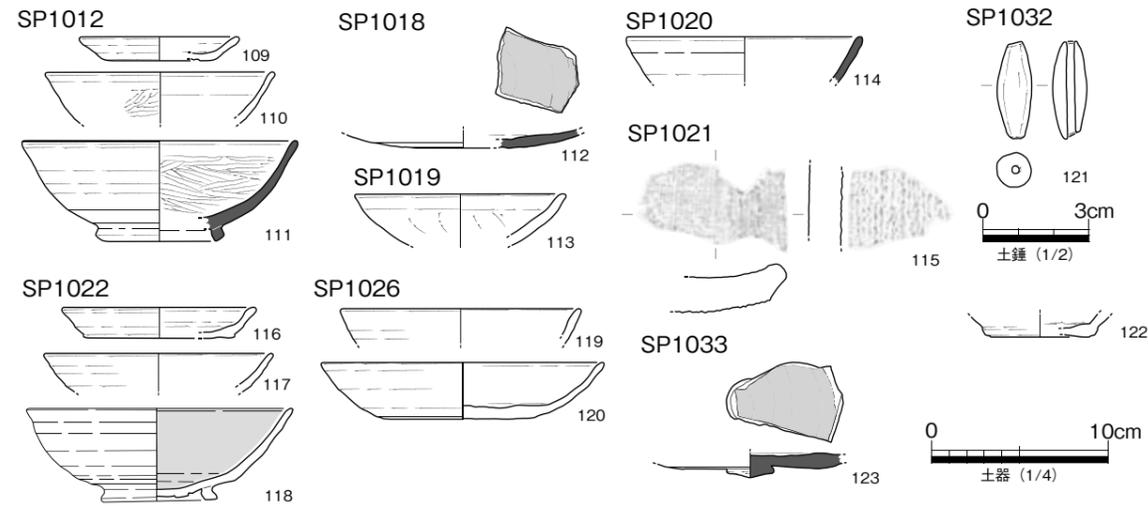


図 33 37-1区 2面柱穴出土遺物

115は平瓦である。凸面には縄タタキを施し、凹面には布目を残す。側面のみ残存しており、側面はケズリにより面取りを行う。

SP1022 (SB1001) 出土遺物 (図 33)

116は土師質土器皿である。底部から急に立ち上がり、口縁端部付近はやや肥厚する。117は土師質土器碗である。口縁部のみ残存しており、外面には回転ナデを施す。118は黒色土器碗である。外方に踏ん張る形態を呈する高台を持ち、体部はやや内湾しながら口縁部至り、口縁端部は屈曲する。内面のみ黒化している。外面にはナデを細かい単位で施している。

SP1026 出土遺物 (図 33)

119は土師質土器碗である。口縁部のみ残存しており、口縁端部はやや先細り状に仕上げる。120は土師質土器杯である。底部から明確に稜を持たずに体部に至り、口縁部までやや内湾する。

SP1032 (SB1001) 出土遺物 (図 33)

121は土錘である。122は土師質土器杯である。底部のみ残存しており、底部の少し上で体部へと至る稜線が見られる。

SP1033 出土遺物 (図 33)

123は須恵器蓋である。宝珠型の扁平なつまみを持ち、天井部外面にはヘラケズリを施す。内面には、転用硯としての使用に伴う摩滅痕跡を残す。

柱穴は出土遺物が限定的であり、個々の詳細な年代決定は難しい。ただし、SB1001を構成する柱穴は、出土遺物から12世紀前半を下限と考えることができる。SB3001の範囲と溝の範囲が重複し、これらは先後関係があるが、遺構同士の直接的な切り合い関係はない。しかし遺物の年代観からは、建物が溝群の多くに先行する可能性が高いといえる。

③ 3面の遺構

溝を主体として遺構が確認された。いずれも条里地割に合致し、南北方向に流下する。SD1043は溝としているが、地形の落ちの肩に相当する。これらの東側の状況は調査区内では確認できず、16次調査で落ちより東側に遺構が認められることや、遺構面の標高点からみても、地形の落ちは本調査区から

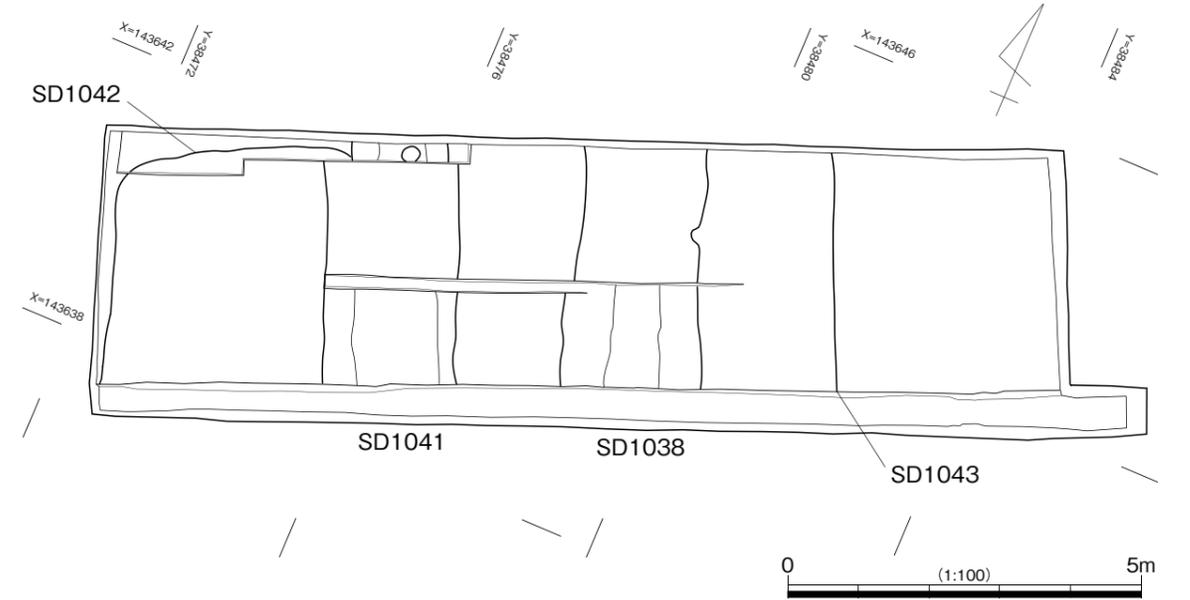


図 34 37-1区 3面平面図

東側では平坦に続く。以下、個々の遺構について報告を行う。

SD1038 出土遺物 (図 34・35)

調査区中央付近で検出された南北方向に伸びる溝である。検出幅は約2.0m、深度は0.2mを測る。埋土は複数層に分層できるが、土質に大きな差はない。底面はほぼ平坦であり、流水の痕跡は確認できず、埋土にブロック土を含む。出土遺物については図 35 に示した。

124は須恵器蓋である。天井部付近のみ残存しており、ヘラ削りの範囲は狭く、天井部外面は平坦となる。125は須恵器杯である。底部の破片であり、緩やかに底部から体部へと屈曲する。127,128は平瓦である。127は凸面に縄タタキを施す。布目の方向からはタタキ目が斜め方向に残されている。128は、凹面に布目を削りで消した痕跡を残し、凸面には縄タタキを施す。瓦の方向に平行するものと斜行するものが認められる。

出土遺物から時期を特定できるものは少ない。須恵器の年代はやや古いですが、平瓦に斜行する縄タタキを施す特徴を含めて、9世紀あるいは10世紀以降の埋没が想定される。

SD1041 出土遺物 (図 34・36)

SD1038より西側で検出された溝である。検出幅や方向については、SD1038と類似する。深度はSD1038より少し浅い。平面形態や深度や断面形態といった特徴には類似する点が多く、同時併存していた、あるいは近い時期のものである可能性が高い。出土遺物は図 36 に示した。

129,130は土師質土器質土器杯である。いずれも口縁部が欠損している。129は底部との境界が明瞭で、直線的に外方に開くが、130はやや内湾気味に立ち上がる。131は土師質土器碗である。底部のみ残存しており、断面方形の高台を取り付ける。132は須恵器蓋である。外面の天井部よりも下位に至るまでヘラケズリの痕跡が確認できる。133は須恵器杯である。底部から明確に屈曲し、やや立ち上がりの強い体部を持つ。134は須恵器壺である。口縁部が欠損しているため詳細な器種は不明であるが、底部に断面方形の高台を持ち、直線的に体部が開く。

135～138は瓦である。135は丸瓦である、凸面は最終調整のナデにより、それ以前の調整が消され

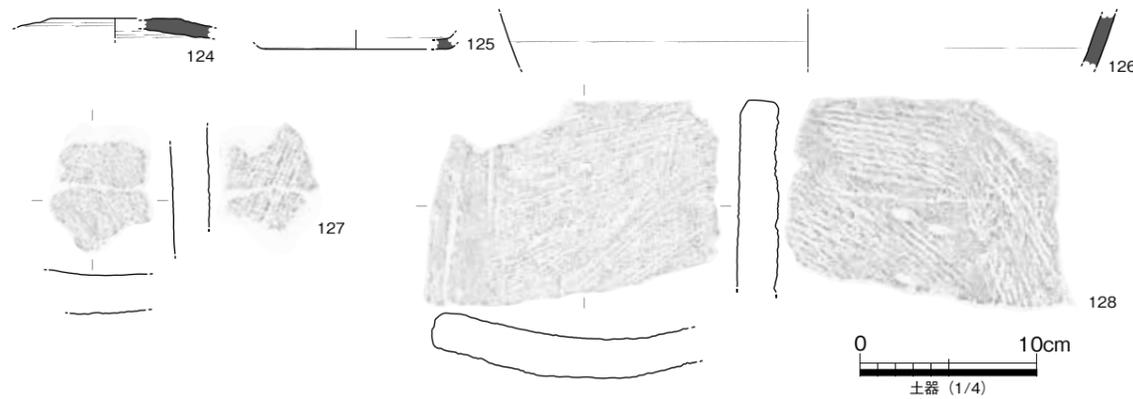


図 35 37-1区 SD1038 出土遺物

ている。136は軒平瓦である。調整は判然とせず、文様も珠文が一ヶ所確認できるのみであり、型式は不明である。137、138は平瓦である。137は凸面の調整がナデ消されているが、凹面には布目が確認できる。138は凸面に斜行する縄タタキが確認できる。

SD1041は、出土遺物から埋没の最終段階が10世紀後半に比定される。

SD1042 出土遺物 (図 34・37)

SD1042は調査区西端で検出された土坑状の溝である。平面形は隅丸方形を呈しており、東西幅で4.2m程を測り、南北幅は南辺が調査区外に伸びるため正確には不明であるが、4m以上はある。断面形状は皿状で、埋土は大別3層に分層できる。出土遺物は図37に示した。

(1層出土遺物) 139～141は土師質土器杯である。139は碗の可能性もあるが、底部が明瞭に稜線を持ち、底部内面も明瞭に屈曲する。佐藤編年碗BI類に相当する。140は底部から体部が大きく外方に直線的に伸びる形態を呈する。141はやや内湾気味に口縁部に立ち上がる。142は須恵器杯である。佐藤編年AI'に分類される。143は須恵器高杯である。144、145は須恵器蓋である。いずれも外面上部が平坦になる。146は須恵器皿である。口縁部と底部が欠損しているものの、内面には火襷が残る。147は丸瓦である。凸面には明瞭に調整痕跡が残らないが、凹面には布目の後にケズリを施す。

(2層出土遺物) 148は土師質土器碗である。直立する高い高台に、屈曲の強い底部を持つ。149は須恵器杯である。直線的に外方に開く体部を持つ。149は丸瓦である。側面についてはケズリにより面取りを行う。凸面の調整は判然とせず、凹面には布目が残る。151、152は平瓦である。151は凸面の調整が不明であり、凹面には布目が残る。152は凸面に平行縄タタキを施す。

(3層出土遺物) 153は土師質土器碗である。断面方形の低い高台が取り付け。154、155は土師質土器

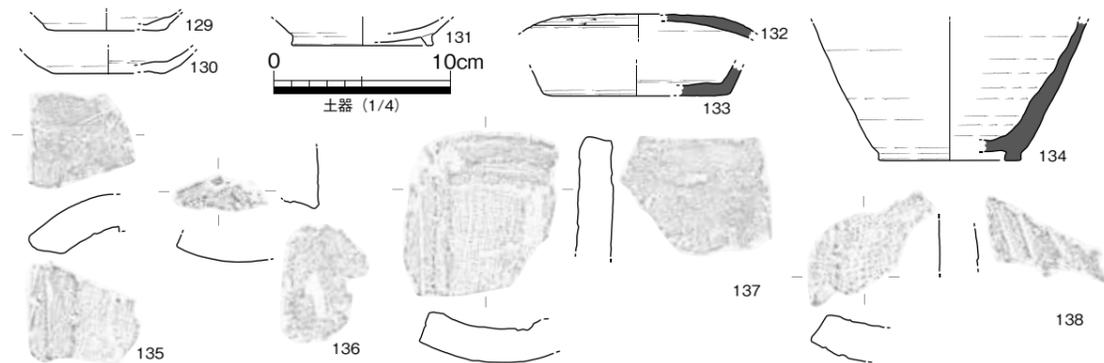


図 36 37-1区 SD1041 出土遺物

杯である。いずれも体部から口縁部へ外反する形態を呈する。156は須恵器碗である。円面碗であり、透孔の痕跡は確認できないが、交差する沈線文を施す。157は須恵器蓋である。口縁端部は強く屈曲しており、比較的扁平なつまみを持つ。内面には、中心部付近を中心に硯としての転用の痕跡が確認できる。外面にも、径11cm程の線状の擦痕が確認できる。158は須恵器杯である。直線的に外方に広がる口縁部が確認できる。159は須恵器壺である。断面が外方に開く高台を持つ。160は須恵器鉢である。口縁部が直線的に急に立ち上がり、口縁端部はナデにより面を持たせる。161は丸瓦である。凸面の調整は不明であるが、凹面は布目が確認できるほか、模骨の痕跡も確認できる。

162～166は、出土層位が不明なものである。162は土師質土器杯である。底部から丸みを持って屈曲し、内湾気味に立ち上がる。163は須恵器皿である、口縁部のみ残存しており、外方に大きく開く。164は平瓦である。凸面には平行縄タタキを施し、凹面には布目の上からケズリを施す。165、166は石鏃である。いずれも法量は異なるが形態は類似する。遺構の年代に近いものではなく、縄文時代後期～晩期の遺物である可能性が高い。

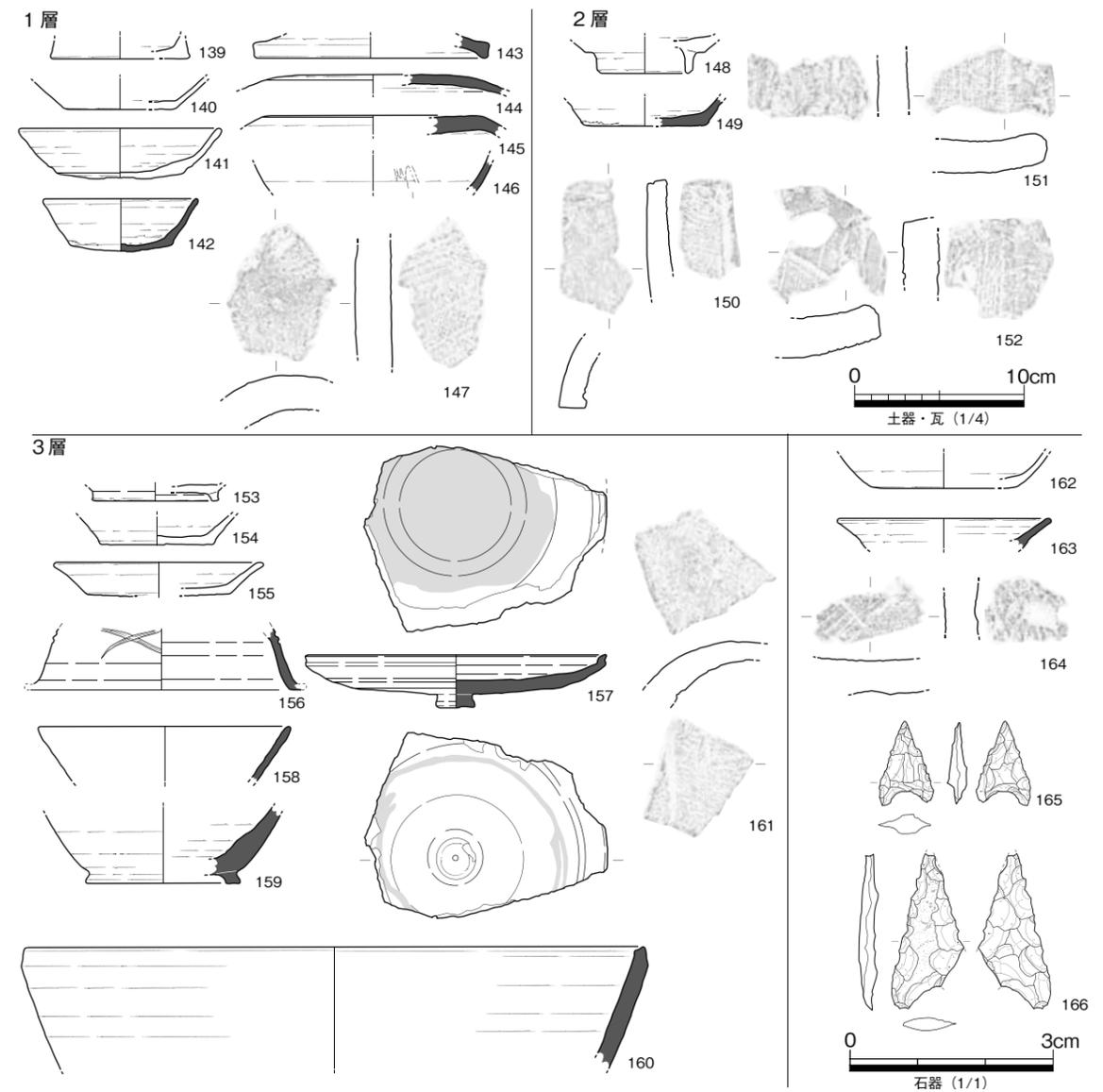


図 37 37-1区 SD1042 出土遺物

出土遺物では、153～155といった土師質土器の年代から、10世紀前葉(佐藤編年Ⅳ期中相)を埋没の時期とする。1層は、10世紀後葉(V期古相)に下る可能性があるが、1層出土の遺物については、混入の可能性もあり、さらに堆積年代が遡る可能性もある。

SD1043 (図 34)

調査区東側で確認された落ち込みである。平面形は条里型地割の方向に合致し直線的である。掘削は部分的な範囲に留まるが、検出面より1.0 m程下位で平坦面が確認された。この平坦面の標高は、調査地点の東側で行われた16次調査での遺構面の標高と類似することから、地点1より東側の遺構面に平坦面がつながる可能性が高い。西側の斜面は傾斜が急であり、地形的な落ちを人為的に改変した可能性が想定できる。落ち込み内の埋土から出土する遺物が僅少であることから、埋没年代の特定は難しい。ただし、古代の瓦を含むことや、土師質土器片が出土すること、輸入陶磁器や瓦器の出土が認められないことや基本層序の7層に被覆されることから、10世紀あるいは11世紀前半を埋没の下限とする。

包含層出土遺物 (図 38)

多量の遺物が出土しているが、古代の特徴的な遺物のみ提示している。

167、168は鉄鏃である。167は先端部が欠損しているが、方頭鏃等の型式が考えられる。168は先端部が欠損しているが、菱形の関部が確認できる。169、170は鉄釘である。先端部が屈曲し、頭部はやや大きい。断面は方形である。171、172は鉄滓である。173は土師質土器杯である。底部から緩く屈曲し、外反する形態を呈する。内面には煤の痕跡が認められ、燈明具としての使用が考えられる。174～176は須恵器硯である。174、175は円面硯である。いずれも沈線により文様を表現している。176は風字硯である。硯の側縁部のみ残存しており、外面にはナデの痕跡を残す。

(2) 37-2区の調査成果

① 1面の遺構 (図 27)

37-1区と同様、調査区東端の溝と、数条の鋤溝が確認される。SD2001とSD2002は同位置で再掘削された溝であり、SD2004まではいずれも近接した位置にある地境付近の溝と考えられる。

SD2001 出土遺物 (図 27・39)

177は土師質土器足釜である。口縁部付近の鐙部のみ残存し、口縁部が直立し、鐙部も水平に伸びる。178は軒平瓦である。KF201型式であり、凸面の調整は不明である。凹面には布目が確認される。

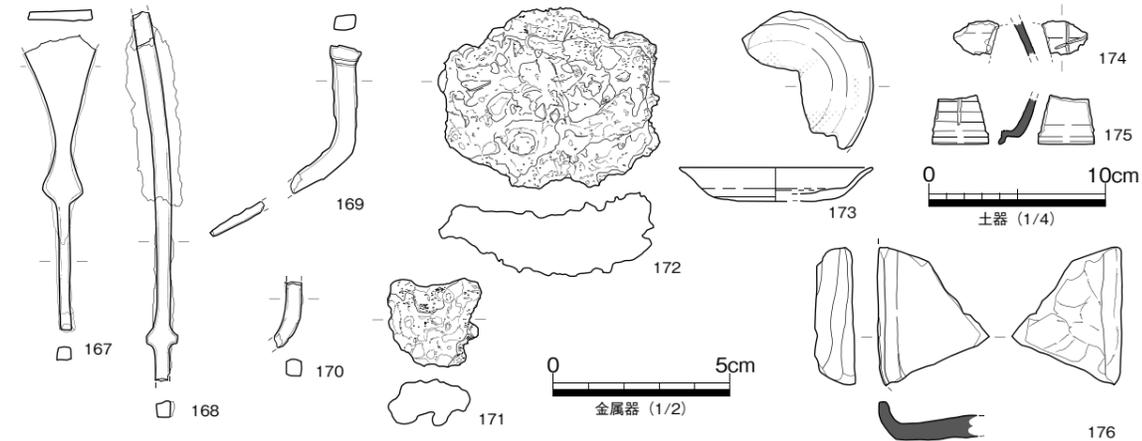


図 38 37-1区 包含層出土遺物

SD2002 出土遺物 (図 27・39)

179は土師質土器鍋であり把手部を持つ。180は土師質土器すり鉢である。口縁部が屈曲し、端面は丸くおさめる。181、182は足釜の脚部である。

出土遺物の年代から中世後半の埋没が想定され、同位置にあるSD2001～2004も近い時期に当たる。

SD2009 出土遺物 (図 26・39)

断面でのみ確認された溝である。SD2001やSD2002に先行する。

出土遺物は183の土師質土器杯や、184の土師質土器椀がある。出土遺物は中世前半に比定されるが、検出面は1面であり、1面の遺構は中世後半以降であることから中世後半の遺構であると考えられる。

② 2面の遺構 (図 40)

溝、柱穴、土坑が確認された。溝はいずれも条里地割に合致する方向に開削されており、東西方向のものが目立つが、南北方向(SD2011)も存在する。SD2018のように、幅1.2m程のものが確認されるが、そのほかはいずれも幅0.3m程の小規模な溝が多い。

柱穴は、6基確認されたが、柱穴列や建物を構成するものはなく、深度も非常に浅い。

2面の遺構出土遺物は、図42に示した。以下で各遺構の詳細と出土遺物について報告する。

SD2011 (図 40・42)

調査区西南部で検出された南北方向の溝である。出土遺物は185の土師質土器皿や186の黒色土器椀がある。185は器高の低い小皿であり、口縁部はやや外方に開く。186は体部の下位ではヘラケズリを施す。内面には、横方向のミガキが施されるほか、全面が黒化している。

185の小皿が佐藤分類皿BⅡ-3型式に比定でき、13世紀前半の年代が考えられる。

SD2015 (図 40・42)

調査区西部で検出された東西方向の溝である。出土遺物は188の緑釉陶器椀や、189の黒色土器椀がある。188は、高台のみが残存しているが、高台内側が有段となる特徴から、近江産の緑釉陶器である可能性が高い。189は、口縁部がやや外反し、口縁部付近のみ、外面に横方向のミガキを施す。内面には前面に横方向のミガキを施し、黒化させる。189は、佐藤編年の椀AⅡ-4型式に当たり、底部のヘラケズリが明瞭でないといった特徴から、佐藤編年中世Ⅰ-3期に当たり、12世紀前半の年代が考えられる。

SD2018 (図 40・42)

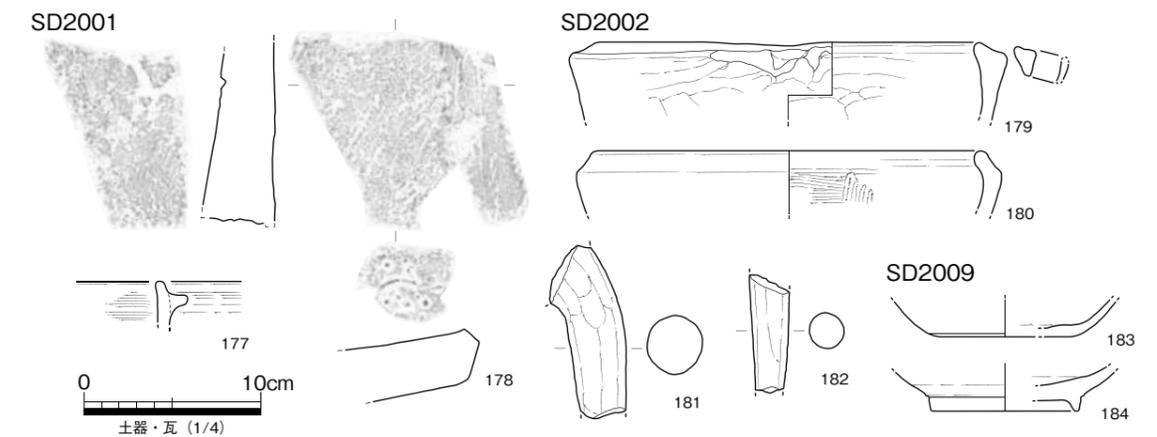


図 39 37-2区 1面遺構出土遺物

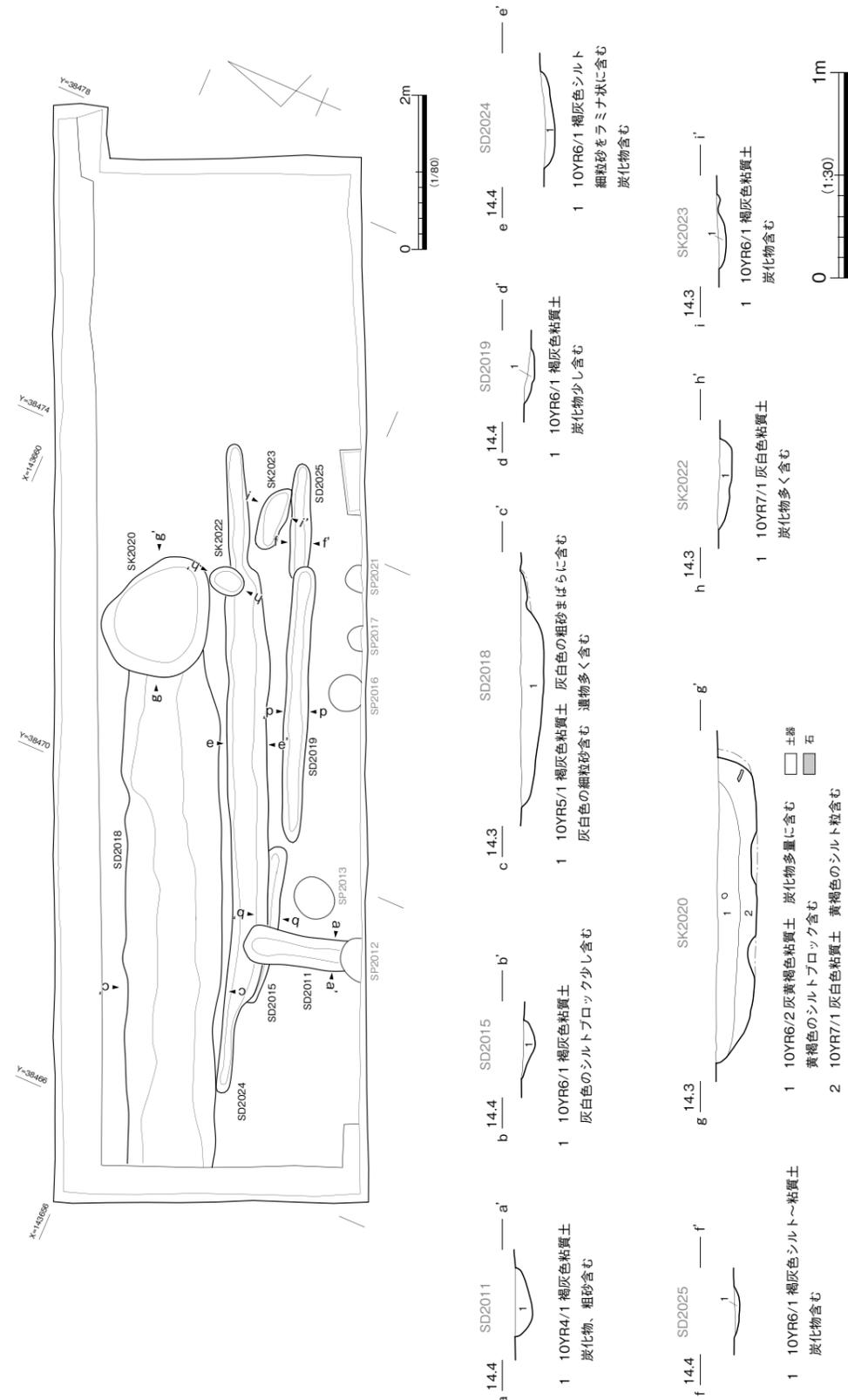


図 40 37-2 区 2 面平面図 溝・土坑断面図

調査区を横断する東西方向の溝である。幅は1 mを超え、最も大きい地点では1.2 mを測る。深度は0.3 m程であり、埋土の状況から、流水の痕跡等は確認できない。

出土遺物は、190～193の土師質土器皿や、194の白磁皿、196の瓦器椀や197の土師質土器椀、198の須恵器壺のほか、195の須恵器蓋といった古代の遺物が認められる。皿は、いずれも口径が8cm前後であり、やや外方に開く口縁部を持つ。佐藤編年のBⅡ-2型式に相当する。194は、口縁部がやや内湾気味に開き、内面には段を持つ。太宰府分類Ⅵ類であり、12世紀前半を下限とする。196は和泉型瓦器椀である。見込みに格子状にミガキを施す。197は高台のやや外側までへら切りの痕跡が確認される。内外面共に、横方向のミガキを施す。胎土や製作技法の特徴から、吉備系の土師質土器椀であり、内外面にやや粗に磨きを施す特徴から、山本編年Ⅰ期からⅡ期に相当する。195は須恵器蓋であるが、内面に硯としての転用の痕跡を残す。外面のつまみ部周囲に圏線が確認できる。圏線は一重しか確認できないが、さらに外側に存在する可能性がある。

白磁や吉備系土師質土器椀、土師質土器皿の年代から12世紀～13世紀の埋没年代が比定できる。

SD2019 (図 40・42)

調査区中央で検出された。東西方向の溝であり、非常に深度は浅い。出土遺物は199の土師質土器小皿である。口縁部が外方に強く開き、口径は8cm程である。佐藤編年皿BⅢ-2・3に分類でき、13世紀前半のものと考えられる。

出土遺物の年代から、埋没時期は13世紀前半と考えられる。

SD2024 (図 40・42)

調査区中央で確認された。東西方向に伸び、埋土には部分的に粒径の粗い砂をラミナ状に含む。出土遺物は200、201の土師質土器杯や、202の黒色土器、203の須恵器鉢がある。200や201は、底部と体部の境界が丸みをおび明瞭でなく、外方に開く口縁部の特徴から、杯DⅡ-1型式に比定される。202は断面方形の高台を持ち、内面には右下がりのミガキを施す。佐藤編年椀AⅡ-4型式に相当する。203は口縁部がやや内湾し、端部は丸くおさめる。

出土遺物の年代観から、12世紀前半を下限とし、切り合い関係にあるSD2011とも整合する。

SK2020 (図 40・42)

調査区中央で確認された円形の土坑である。深度は0.3 m程であり、埋土には炭化物を多く含む。その形態から井戸等の可能性は低い。出土遺物は204の土師質土器小皿や205・207の土師質土器杯、206、208、209の土師質土器椀といった中世の遺物のほか、210の瓦といった古代の遺物も認められる。204は佐藤編年皿BⅡ-3型式に比定される。208、209は土師質土器椀であり、底部のみ残存しているが、胎土や製作技法の特徴から、吉備系の土師質土器椀である。内外面ともに磨きは明確に認められない。山本編年Ⅲ期に相当し、13世紀前半を下限とする。211はふいごの羽口である。先端付近の破片であり、一部にガラス質の付着が見られる。

出土遺物から、13世紀を埋没年代とする。これは切り合い関係にあるSD2019とも整合的である。

SK2022 (図 40・42)

調査区中央で確認された楕円形の土坑である。出土遺物は213の土師質土器杯や214の須恵器椀がある。214は佐藤編年椀AⅡ-8・9型式に相当する。

出土遺物からは埋没年代を13世紀中葉とし、遺構の切り合い関係の上でも整合する。

SK2023 (図 40・42)

東西方向に長い楕円形の土坑である。底面に起伏があり、深度は浅い。出土遺物は215の土師質土器碗や216の白磁碗がある。215は胎土や製作技法から吉備系の土師質土器碗である。内外面ともにミガキは確認できず、内面には板ナデの痕跡が確認でき、高台の縮小が見られる。216は細分は難しいものの、太宰府分類碗Ⅱ類に比定できる。

出土遺物から12世紀前半の年代が考えられるが、215の特徴から、さらに時期が下る可能性もある。

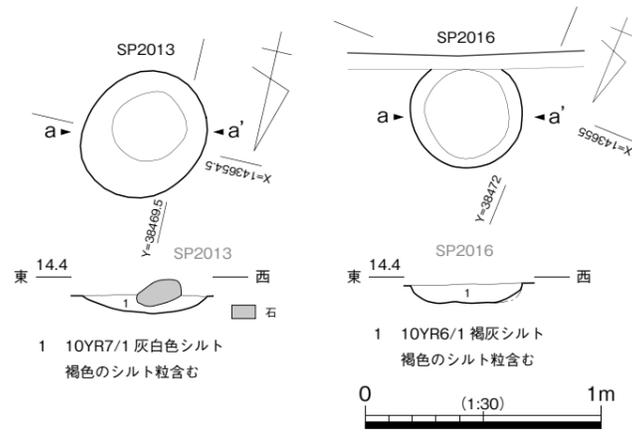


図41 37-2区 2面 柱穴平・断面

SP2012 (図40・42)

調査区南壁沿いで確認された。遺構の北半部のみ検出している。出土遺物は217の土師質土器杯や218、219の黒色土器、須恵器碗がある。218は佐藤編年碗AⅡ-4型式、219はAⅡ-6型式に比定できる。13世紀初頭を下限とする年代が考えられる。

SP2013 (図41・42)

SP2012に近接して検出された。深度は浅く柱痕等は確認できなかったが、埋土に大ぶりの石材を含む。出土遺物は僅少であり、遺構の時期を示すような遺物は出土しておらず、220の平瓦が認められる。220は凸面に平行縄タタキを施す。

SP2016 (図41・42)

調査区南壁沿いで検出された。深度は0.2m以下であり、柱痕等の痕跡は確認できなかった。出土遺物は古代の遺物である221の須恵器蓋や、222の黒色土器碗がある。221は遺構の年代を示すものではないが、内面に硯としての転用の痕跡がある。222は高い高台を持ち、調整が摩滅によって確認できないため、詳細な型式比定は難しい。

出土遺物からは11世紀後半～12世紀の遺構であると考えられる。

③3面の遺構 (図43)

遺構面を検出した標高が低く、遺構の残存状況は良好でない。検出遺構の多くは溝であり、37-1区と同様の傾向を示し、つながるものも多い。3面の遺構は、掘削したものを中心に報告する。

SD2010 (図43・44)

調査区中央で確認された溝である。検出幅は狭く、遺構面からの深度は非常に浅いが、その検出位置や、底面の幅、標高から、SD1038と連続する可能性が高い。

出土遺物は223の土師質土器皿や224の須恵器蓋、225の丸瓦がある。223は口径が小さく、器高も低いいため、中世の土師質土器皿となる可能性もある。SD1038や、2面の遺構の年代から、混入である可能性が高い。224は口縁端部まで直線的に伸び、端部は屈曲する。天井部は平坦であり、回転ヘラケズリ調整が施される。佐藤編年Ⅲ期古相に当たり、9世紀前半のものと考えられる。224は玉縁が残存している。凸面の調整は判然としない。凹面には布目が残る。

出土遺物には9世紀代のものが含まれるが、SD1038の年代観から、埋没は10世紀代としておく。

SD2027 (図43・44)

SD2010の西肩付近で検出された。深度は浅いが、推定で1.5m程の幅を持つ。条里方向に合致し、南北に伸びる。出土遺物は226の土師質土器皿や227の須恵器蓋、228の土師質土器鍋や229の平瓦がある。227は底部のみが残存しており型式は不明であるが、法量から小型の皿である可能性が高い。

227は佐藤編年Ⅱ期に相当し、8世紀後半の年代を示す。出土遺物からは年代を決定することが難しい、遺構の重複関係からは、10世紀～11世紀前半の埋没が想定される。37-1区には延長が確認できず、直線的に長く伸びる溝にはならない可能性が高い。

SD2034 (図43・44)

調査区西側で検出された。条里方向に合致し南北方向に伸びる。直線的な溝であり、SD2010より浅い。位置関係からは、37-1区のSD1041につながる可能性がある。検出で留めているために、出土遺物は検出時のわずかなもののみである。230は土師質土器皿である。口縁部が直線的に外方に開く。

出土遺物での年代特定は難しいが、SD1041の年代と対応させると、10世紀代の埋没が与えられる。

SD2037 (図43・44)

37-1区で検出されたSD1043とつながる地形の落ちである。出土遺物は231の土師質土器皿や232

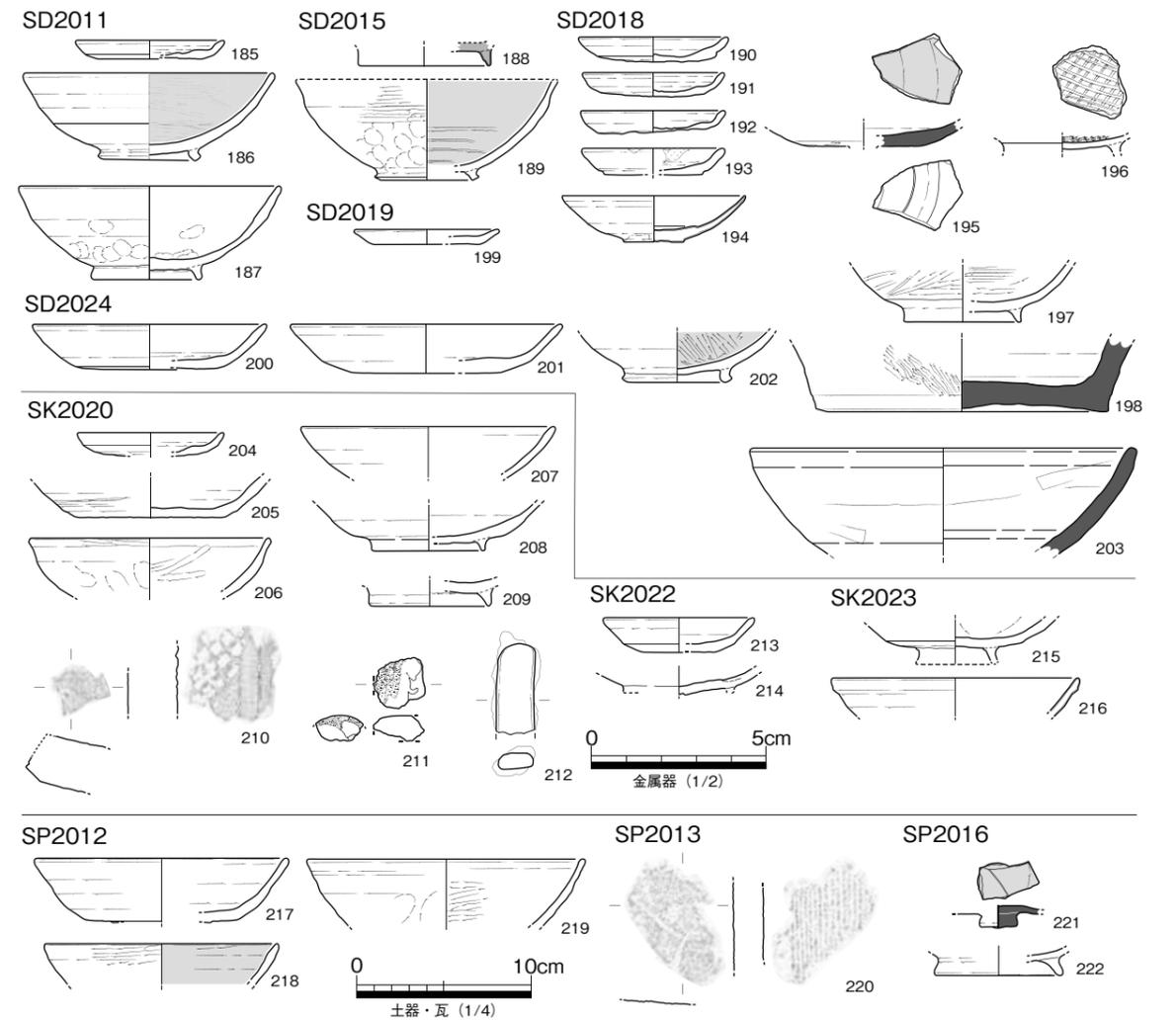


図42 37-2区 2面遺構出土遺物

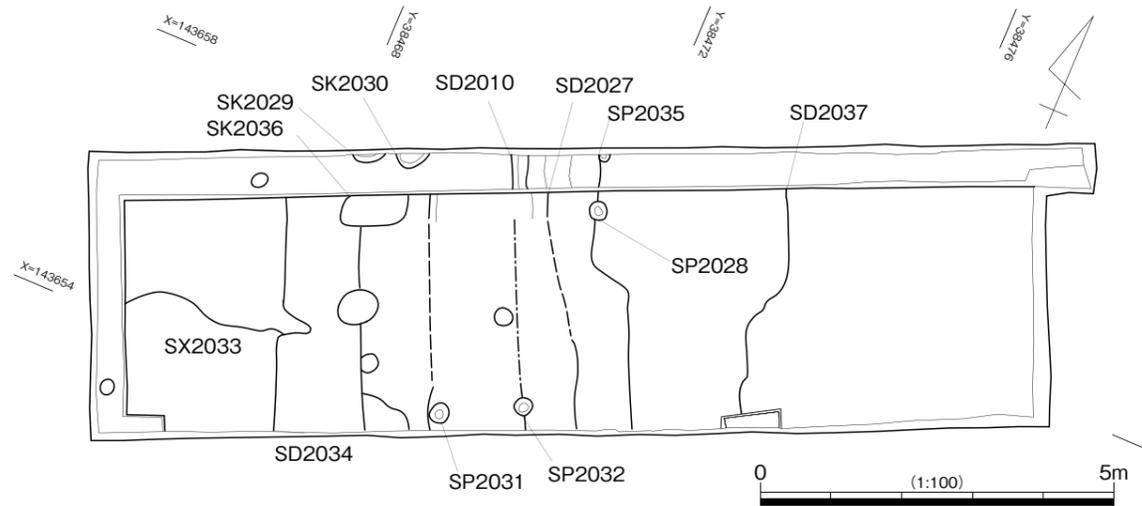


図43 37-2区 3面平面図

の土師質土器碗がある。231は外方に大きく開く。278は断面三角形の高台を持つ。佐藤編年VI期に相当し、11世紀を下限とする。ただし、側溝内の限られた範囲の掘削であり、層位ごとの取り上げが行えていない。埋土が複数段階に分かれることから、埋没の段階は、さらに細分化できる可能性がある。

SK2029 (図43・44)

調査区北壁沿いで検出された円形の土坑である。出土遺物は233の黒色土器のみである。深手の黒色土器碗であり、佐藤編年碗AⅡ-3型式であり、VI期に相当することから、11世紀末葉を下限とする。SK2030とともに3面の下限に近い遺構である。

SK2030 (図43・44)

調査区北壁沿いで検出された楕円形の土坑である。出土遺物は234の須恵器杯と235の黒色土器碗がある。235はAⅡ-4形式で12世紀前半の所産である。

SX2033 (図43・44)

調査区西端で検出された不整形な遺構であり、灰白色の埋土を持つ。検出で留めており掘削を行っていない。出土遺物は236、237の瓦類が出土している。236は丸瓦で、凸面に平行縄タタキを施し、凹面には布目を残す。237は平瓦で、凸面の調整は不明であり、凹面には布目を残す。

年代を絞り込むことは難しいが、遺構の切り合いからは、10世紀以前の遺構であると考えられる。

遺構外出土遺物 (図45)

238～248は6層出土の遺物である。238～240は須恵器硯である。238は円面硯の脚部であり、脚部裾付近には突帯が巡り、透孔の痕跡が2ヶ所確認できる。239は須恵器蓋の転用硯である。内面に転用の痕跡が残る。240は風字硯である。外面にはケズリの痕跡が残る。241は不明土製品である。中央に穿孔がある棒状の製品であり、灯明具の可能性が高い。242は鉄製農具である。鋤や鍬の刃先の可能性が高いが、錆のため詳細な形状は不明である。243は鉄製釘である。断面方形で、先端部や頭部は欠損している。244は不明鉄製品である。半月状の鉄板であり、明確に刃部等は認められない。穿孔が1ヶ所認められる。245～247は鉄滓である。248は砥石である。全体に使用痕が顕著にみられ、部分的に敲打痕跡が残る。

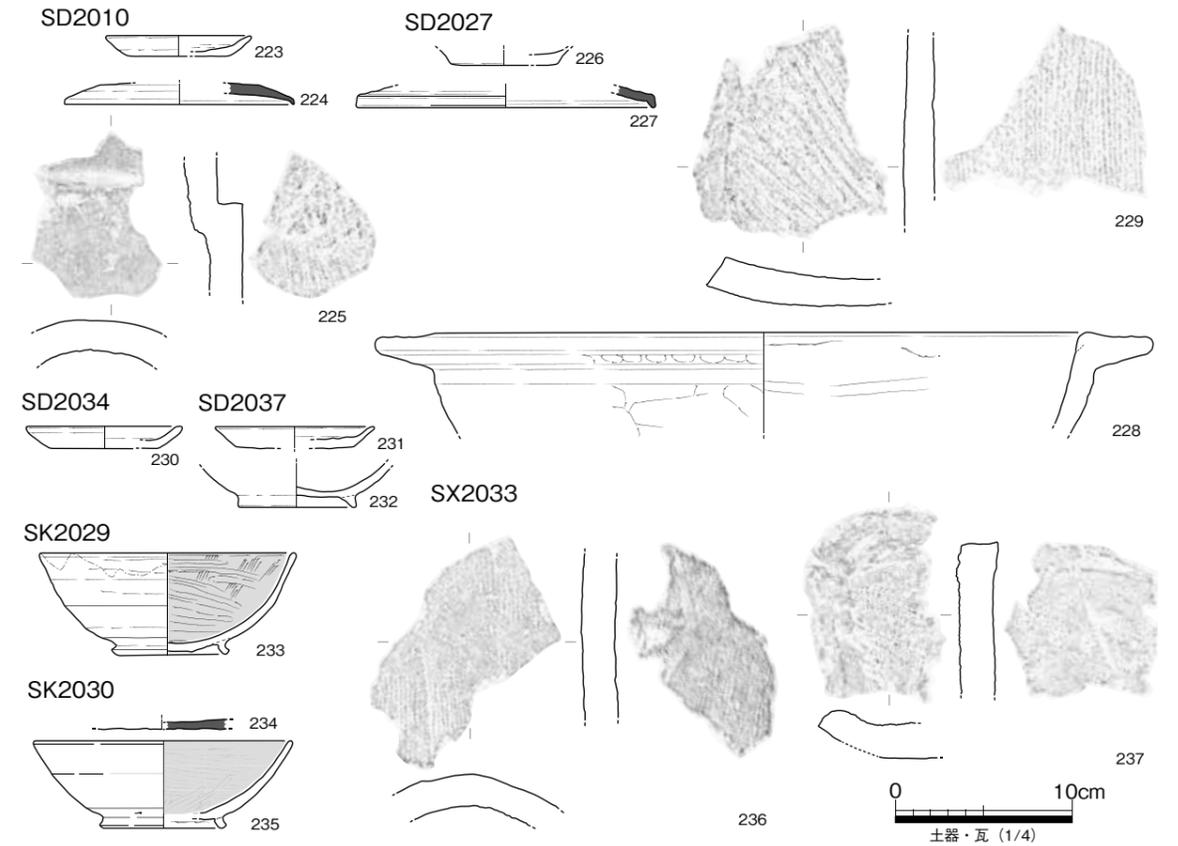


図44 37-2区 3面遺構出土遺物

249～253は7層出土遺物である。249は須恵器蓋である。内面に部分的に硯としての転用の痕跡が残る。250は須恵器杯である。杯Bの底部であり、低平な高台と直立気味に立ち上がる体部の特徴から、佐藤編年Ⅲ期古相～中相に比定できる。251は須恵器蓋である。内面に墨書の痕跡が認められる。残存部分から判読はできない。252は銅鋳である。頭部は見込みで六角形であり、各頂点から中央に向かって線が入る。253は不明鉄製品である。断面方形の棒状鉄製品で、鉄鏃あるいは釘の破片である。

(3) 37-3, 5区の調査成果

37-3区は、地点1の中で最も北側に位置する。低地帯3が想定されていた範囲に当たり、37-1、2区で検出されたような施設の区画の北辺を確認するために調査区を設定した。37-3区では、1面の遺構は確認されず、2、3面を隔てる7層が確認できないことから、同一面で調査を行った。そのため2・3面は、遺物や遺構の切り合いから分別している。

また、37-3区で建物が検出されたため、その規模や範囲を確認するため、調査区東側に37-5区を設定し調査を行った。

① 2面の遺構 (図46)

溝、柱穴、土坑がある。遺構の密度は低く、特に柱穴は少ない。隣接する37-5区でも当該期の遺構は確認されないため、地点1においては、北半部は2面の遺構密度が低い。以下で検出遺構と出土遺物について報告する。

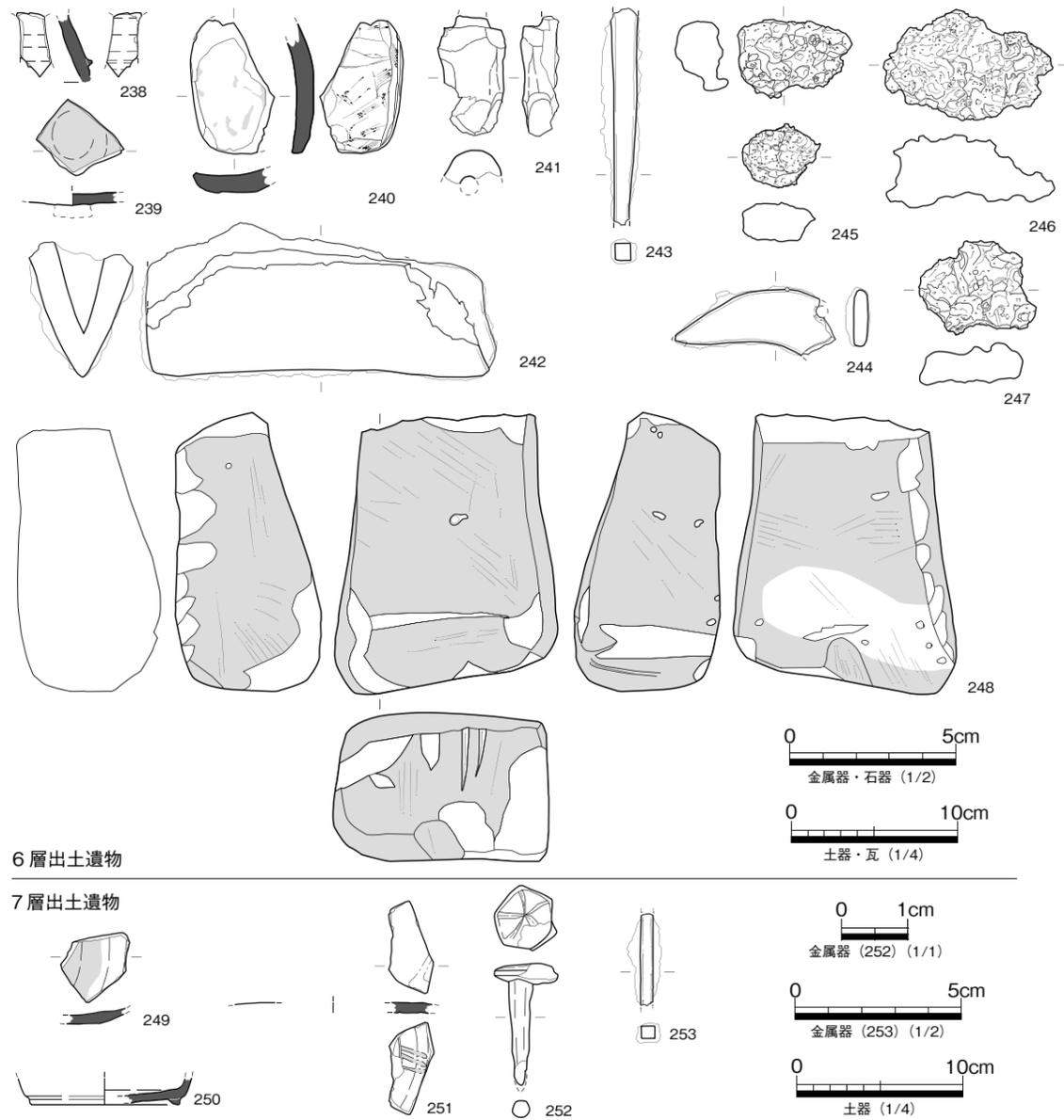


図45 37-2区 遺構外出土遺物

SD3003 (図46・47)

調査区を縦断する溝である。方向は条里型地割に合致せず正方位を指向する。幅は0.4m、深度は0.1m程と浅い。埋土に砂礫を多く含み、部分的にラミナ状となる。出土遺物は255、256のような土師質土器皿や257の白磁椀、258の和泉型瓦器椀、259の土師質土器椀、260の須恵器鉢、261の土師質土器鍋がある。257は口縁部が残存していないが、削り出し高台の特徴から太宰府分類椀Ⅳ類に相当する。258は外面下半に指オサエが顕著に残り、内面と口縁部外面にはヘラミガキがやや粗く施される。259は胎土等の特徴から、吉備系の土師質土器椀と考えられる。内外面共に、ヘラミガキは認められない。260は口縁部の特徴から佐藤編年D-4型式に比定でき、261は中讃地域に分布の中心があるタイプと考えられる。

出土遺物からは、13世紀前半を下限とする年代が考えられる。

SD3011 (図46・47)

調査区西部で確認された南北方向の溝である。SD3003に切れ、条里型地割に合致している。出土遺物は262、263の土師質土器皿と264の白磁椀がある。土師質土器皿はいずれも口径8~9cmを測り、口縁部は直線的に開く。264は口縁端部が玉縁状に肥厚する形状から太宰府分類の白磁椀Ⅳ類に相当する。

出土遺物のうち、皿が佐藤編年BⅢ-2型式に相当することから、年代は12世紀後半に比定できる。

SK3009 (図46・47)

調査区中央で確認された楕円形の小規模な土坑であり、SD3003に切られる。出土遺物は254の土師質土器椀がある。胎土や製作技法の特徴から、吉備系の土師質土器椀と考えられる。高台は断面台形であり、外面下半にヘラ切り痕が確認できる。内外面共にヘラミガキの痕跡は確認できない。

出土遺物からは、12世紀後半~13世紀前半の遺構であると考えられる。

SP3001 (図46・47)

調査区南側で確認された直径0.4m程の柱穴である。出土遺物は265の土師質土器皿と、266の須恵器鉢である。265は佐藤編年ⅢBⅠ-II型式、266は十瓶山窯跡系製品には同様の例が認められず、産地は不明である。出土遺物からは、12世紀後半が遺構の年代として考えられる。

②3面の遺構

溝、柱穴、不明遺構が確認された。柱穴の大半は柱痕の検出に留め掘削を行っていない。溝も必要なもの限り掘削を行った。不明遺構は、土器溜まり状に多くの土器を含む浅い遺構であり、その下位から柱穴等が確認されているため、柱穴の廃絶後に堆積したものと考えられる。柱穴の配置から、複数の建物を復元することができ、それらの建物を新たにSB3001~3003としている。

以上の遺構のうち、掘削を行ったものや、建物をして復元ができたものを中心に報告を行う。

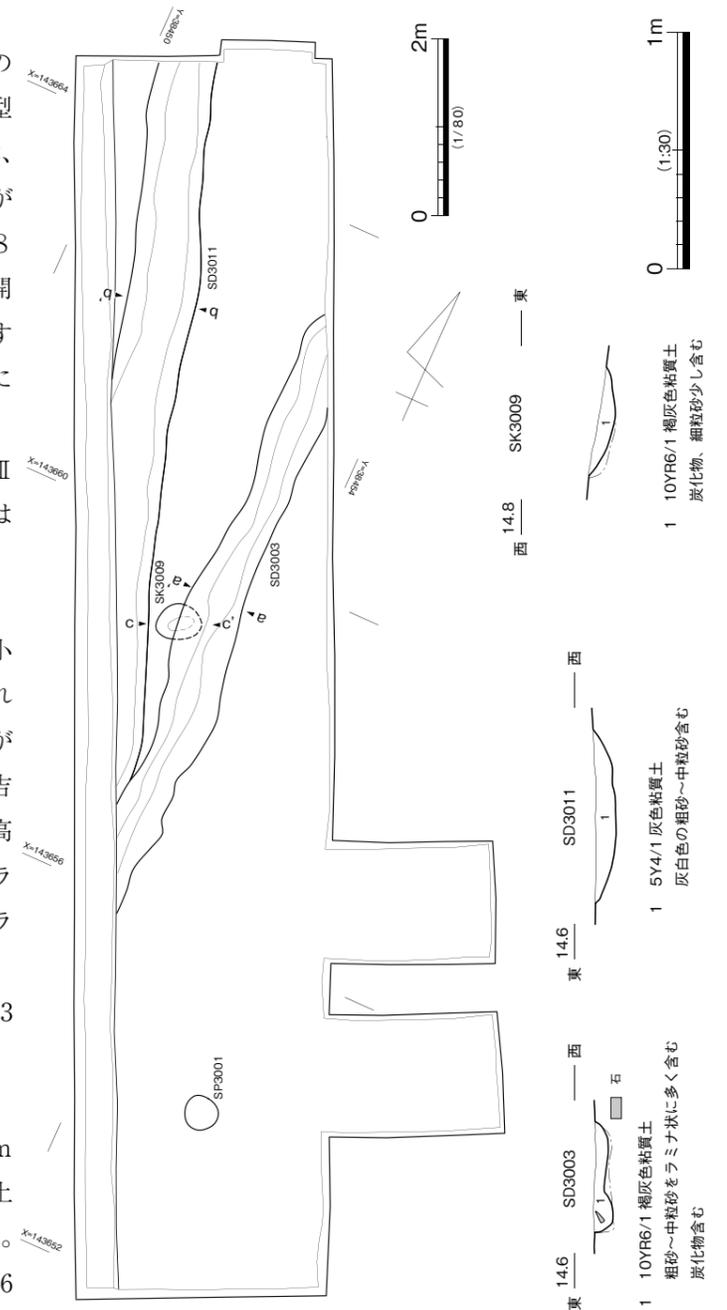


図46 37-3区 2面平面図・遺構断面図

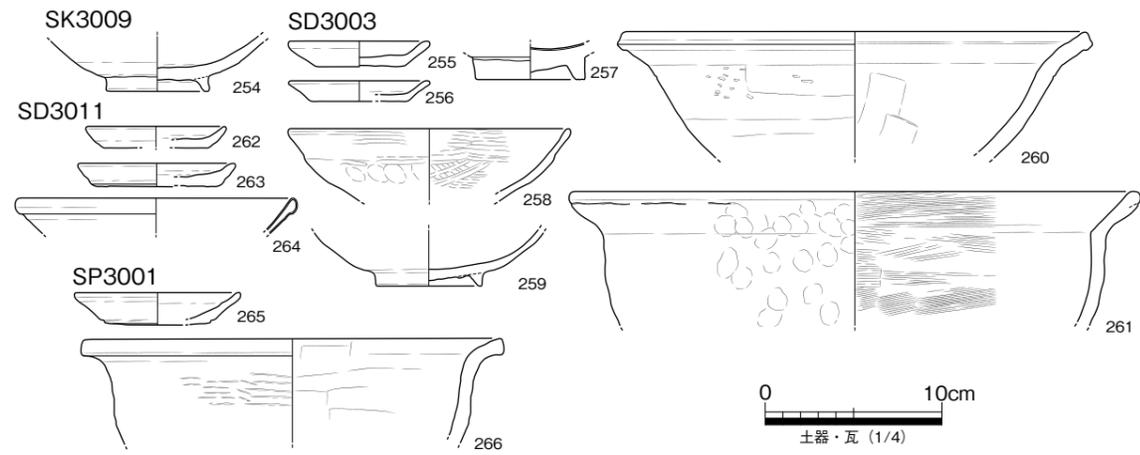


図 47 37-3区 2面遺構出土遺物

SB3001 (図 48・49・51)

調査区内の広い範囲で確認された建物である。側柱の柱穴はいずれも平面隅丸方形であり、黒褐色の埋土を持つ。柱穴は SP3030 と SD3017 により削平を受けていた SP3047 を除くすべての柱穴で抜き取りの痕跡が確認された。抜き取りは浅く、下位には柱痕が確認されている。SP3030 のみ掘削を行っているが、掘方埋土は複数の層に分層でき、いずれもブロック土を含む。柱穴の深度は 0.5 m 程である。当初南北方向に 7 穴が確認され、建物か柵列かの判断をつけるため 37-3 区を拡張し、SP3038, SP3040 を検出した。しかし、SP3038 の規模が周囲と比べ小規模であり、建物の規模が定まらない状況であったため 37-5 区を設定した。その結果 SP5002, SP5003 といった隅丸方形の柱穴を検出した。SP5002, SP5003 は 37-3 区のものと同規模であり、37-3 区も併せ、SB3001 の側柱を構成する可能性があり、SP3038 については、柱穴の検出時の平面形や規模が異なるが、柱通りは他の柱穴と揃うため SB3001 の束柱となる可能性がある。したがって南北 6 間以上、東西 2 間の建物に復元することが可能であるが、後述する建物を囲む溝も含めた 37-5 区以東の確認が不十分であり、東西方向もさらに間数が増加する可能性がある。

SB3001 の周囲には SD3021 が巡る。西辺、南辺ともに確認でき、側柱と西側が 1.5 m、南辺は 1.8 m 離れる。溝の深度は 0.1 m 程である。

SB3001 に関係する遺構出土遺物については図 51 に示した。267, 268 は SD3021 出土須恵器蓋である。いずれも天井部付近が残存しており、傘部の器高が高い形態に復元できる。また天井部には丁寧へラケズリを施す。佐藤編年Ⅱ期古相～中相に相当すると考えられる。269 は須恵器杯である。奈文研分類杯 A の底部であり、直線的に外方に開く。270 は SP3032 出土土師質土器甕である。底部の破片であり、やや平底気味となる。271, 272 は SP3004 出土遺物である。いずれも掘方から出土しており、271 は杯の底部、272 は高杯脚部である。271 は高台が外方に開き、踏ん張るような形態を呈する。高台は貼り付けで、貼り付け前の底部はへラ切りの痕跡を残すが、仕上げは比較的雑である。内面は全面に硯としての転用痕が残る。272 は裾部が強く外反し、端部は下方に拡張する。271 の特徴からは、佐藤編年Ⅱ期古相に位置づけられる。273, 274 は SP3028 土師質土器杯である。外方に開く口縁部を持つ。形態からは佐藤編年Ⅳ期に比定できるが、遺構検出時の資料で、遺構の上位には 10 世紀以降の遺物を多く含む SX3018 や SX3020, SD3010 が存在するため混入資料の可能性が高い。275, 276 は鉄滓である。

出土遺物には 7 世紀末を上限とし、8 世紀前半を中心とした資料が目立つ。SD3021 はやや時期が下

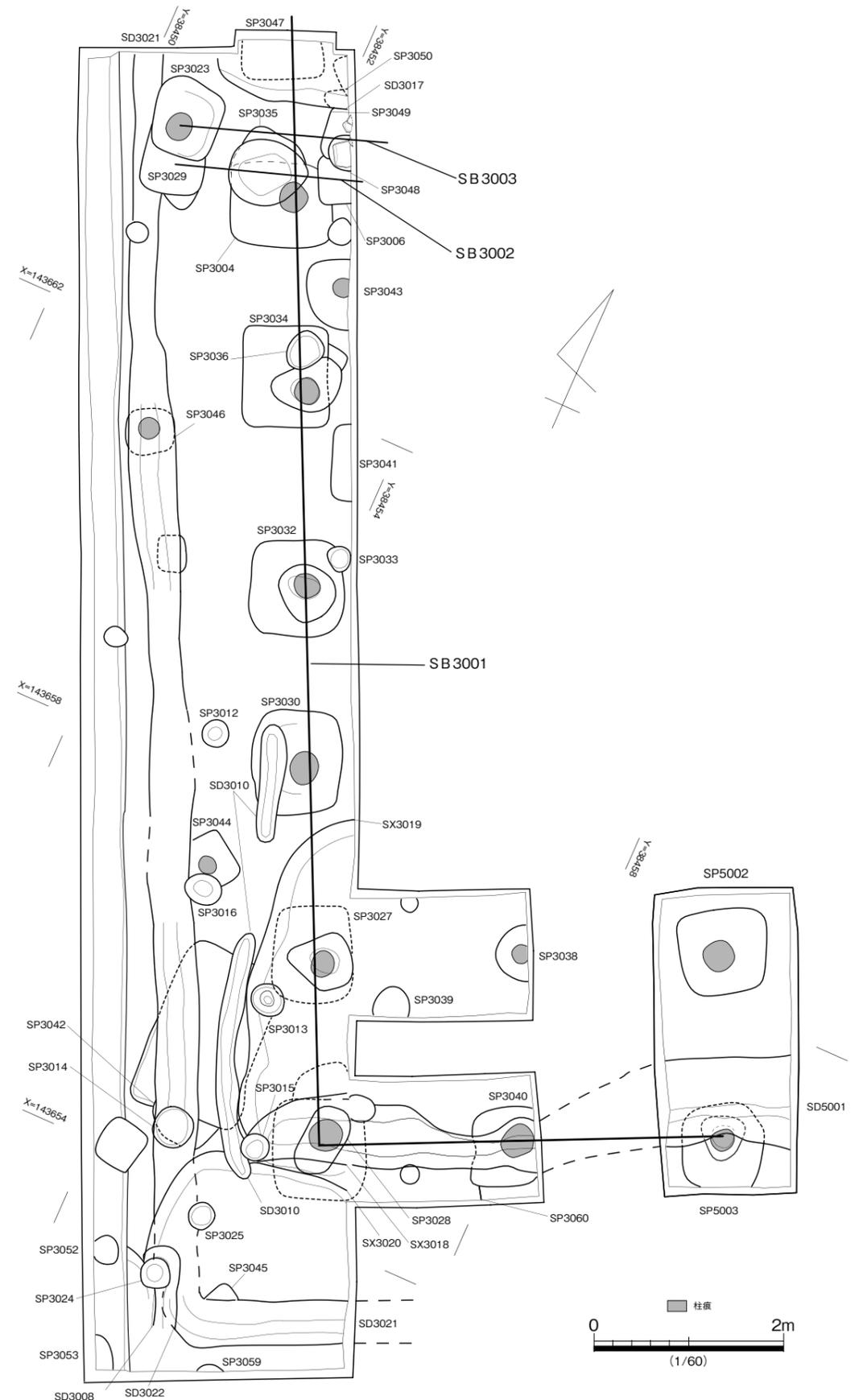


図 48 37-3、5区 平面図

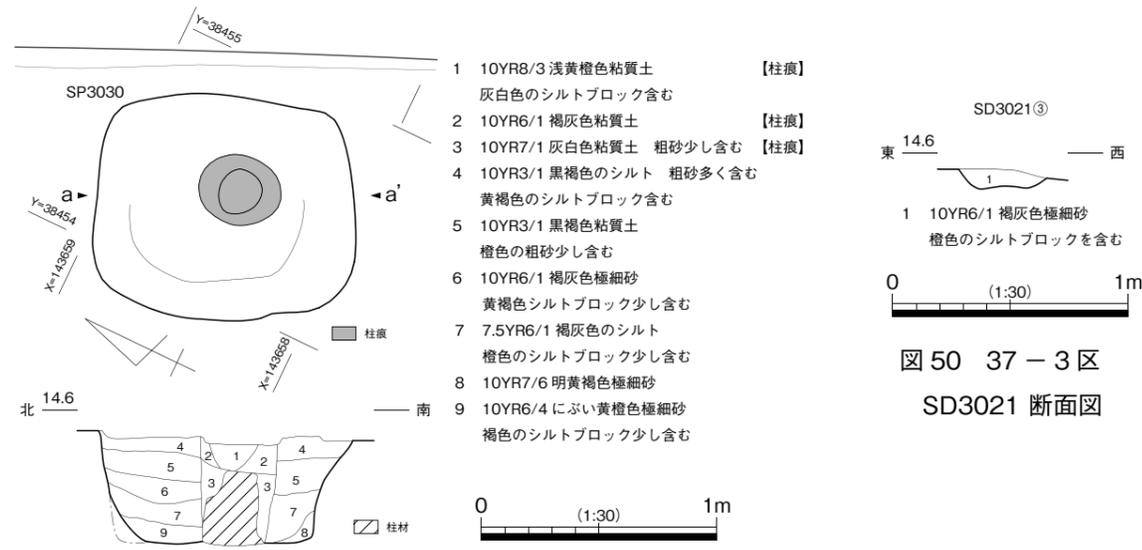


図49 37-3区 SP3030 平・断面図

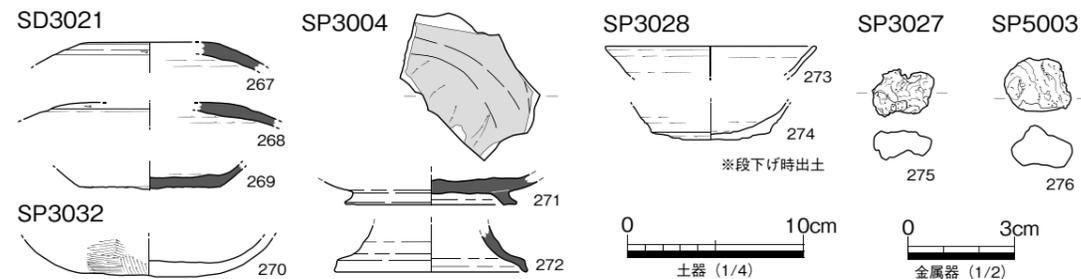


図51 37-3、5区 SB1001 出土遺物

る遺物を含むが、柱穴の掘方出土遺物と、附属する溝の埋没年代の差を反映しているものと考えたい。SB3002,3003 (図48・52・53)

調査区北側で検出された。いずれも東西方向に2穴の柱穴が確認されるのみである。南側の広がりはいずれも確認できないが、北と東西方向の広がり不明である。同位置で柱穴が切り合っており、同位置での建て直しがなされた可能性が考えられる。古い段階のものをSB3002(SP3029-SP3006)、新しい段階のものをSB3003(SP3023-SP3049)とした。さらに、SP3049を切る形で、SP3048が検出された。上面で石材が平坦面を上にして残されており、礎石とそれに伴う据え付けの痕跡である可能性がある。

以上のうち、掘削を行ったSP3023について報告する。平面形態は隅丸方形であるが、やや南北に長い長方形である。柱穴の埋土は灰白色の粘質土を主体としておりSB3001と異なる。柱穴の深度は0.8m程である。柱痕部分に抜き取りを受けず柱材が残された状況であった。柱穴の底面は平坦ではなく、やや北側に向かって下がる傾斜のある底面であった。柱材の底面も同様に平坦ではなく、柱の接地面は斜めになる。

出土遺物は図53に示した。283は須恵器蓋、284は須恵器杯である。283は口縁端部を下方に屈曲させ、端部にはナデにより、面を持たせている。天井部との境界付近は欠損しており不明瞭である。284は杯Aの底部であり、底部からやや内湾気味に外方に開く体部を持つ。蓋の存在と杯の形態から、佐藤編年Ⅲ期古相～中相を下限とし、9世紀前半の年代が考えられる。この年代は285の出土柱材の年代測定結果(第4章)とも概ね整合する。

SP3012 (図48・53)

調査区中央で検出された平面円形の小規模な柱穴である。出土遺物は277、278の土師質土器杯である。277は口縁部が少し内方に屈曲する。中世前半に比定しうる資料であり、遺構の年代が2面に相当する可能性がある。

SP3014 (図48・53)

調査区南側で検出された平面円形の柱穴である。SD3021を切る形で検出された。出土遺物は279～280の土師質土器杯である。法量にばらつきはあるものの、底部から直線的に口縁部まで外方に開く形態を呈する。

SP3016 (図48・53)

調査区中央付近で検出された、平面円形の小規模な柱穴である。出土遺物は281,282の土師質土器杯であり、口縁端部が外方に少し肥厚する。

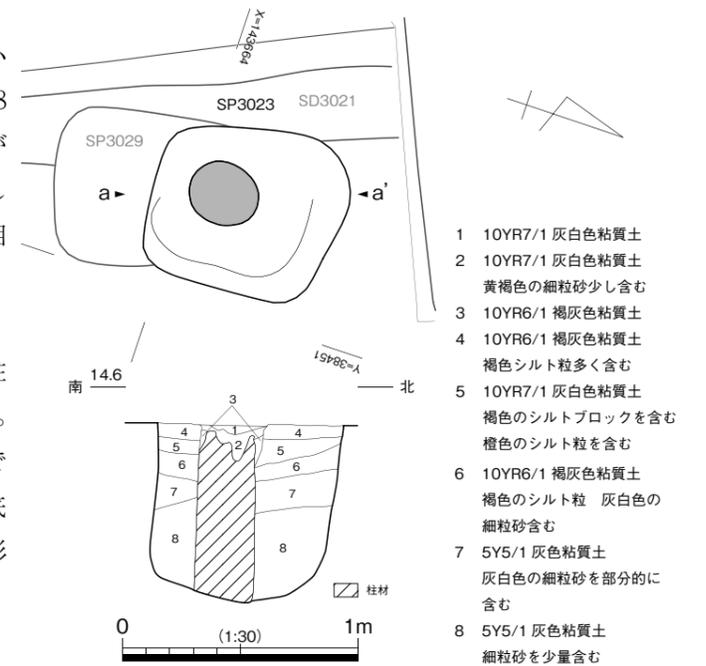


図52 37-3区 SP3023 平・断面図

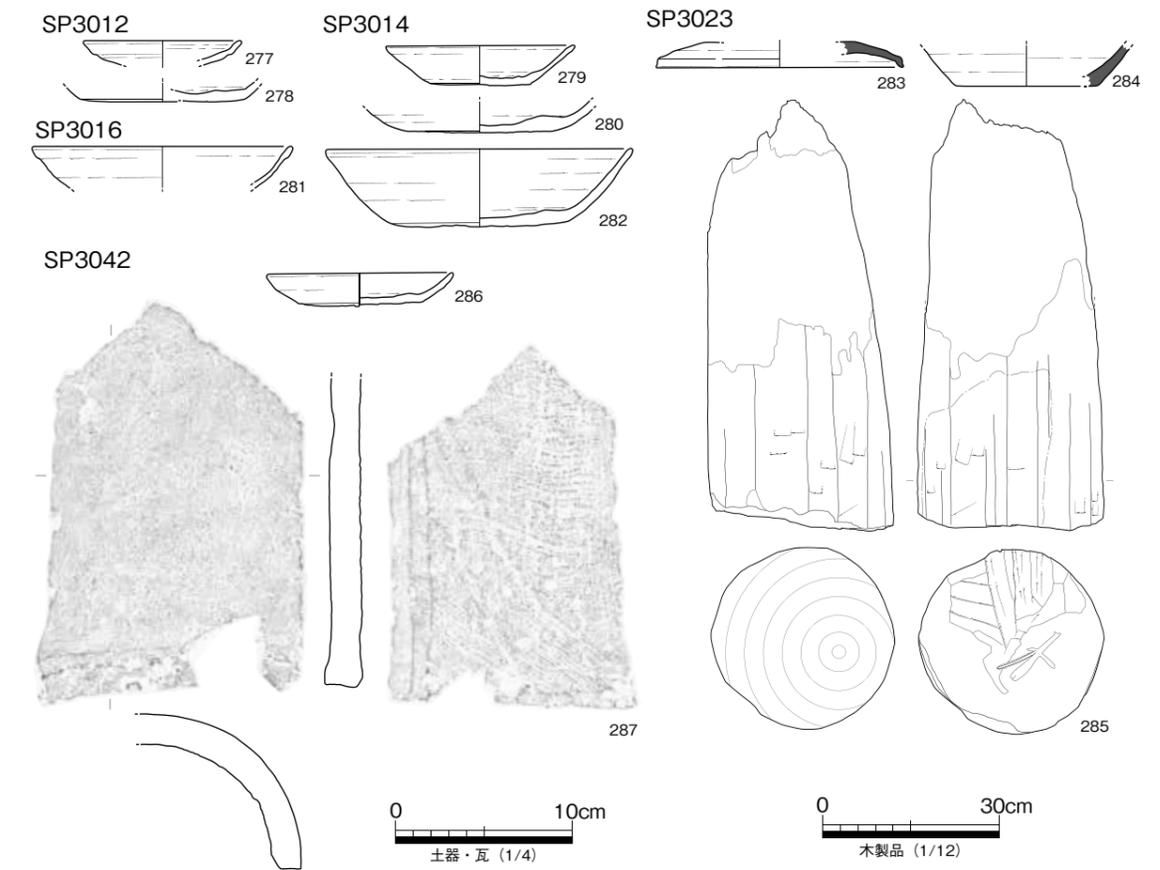


図53 37-3区 3面柱穴出土遺物

以上の3基の柱穴については、遺物の年代から佐藤編年Ⅳ期の範疇に比定できる。これらは、SB3001～3003に後出する時期のものである。

SP3042 (図48・53)

SD3021の掘削後検出された。平面形態は隅丸方形の柱穴であり、このほかSP3014とも位置が重複している。方位は正方位を指向し、遺構の切り合いからみても、最も古い段階に位置する。東、北側に対応する柱穴は確認できない。出土遺物は286の土師質土器杯と287の丸瓦である。286は底部からやや内湾気味に外方に開く。287は凸面の調整はナデ消されているが、凹面については布目の上にケズリの痕跡が確認される。287は、10世紀以降の遺物となり、SD3021と矛盾が生じる。近辺に10世紀以降の遺構が多く存在し、SP3042もそれらによって削平されているため、混入である可能性を考える。

SD3010 (図48・54)

調査区中央で検出された条里型地割に合致する南北方向の溝である。溝の幅は浅いものの、その埋没の最終段階に、溝を覆うように土器溜りを形成しており、それらもSD3010の遺物として取り上げを行った。321の平瓦が出土しているが、出土遺物の大半は土師質土器杯である(288～320)。土師質土器杯全体の傾向としては、まず法量としては口径9cm～16cmに及ぶものまで多岐にわたる。口径に比して器高が低い浅手の佐藤分類杯CⅡがある(288～309)。杯CⅡは底部から明瞭に屈曲し外方に開く形態と、明瞭に屈曲を持たず丸みを帯びて体部に至るものが存在し、口縁端部の形状も複数のパターンが存在する。深手のものは杯AⅠ類に類似するものがあり、その中でも体部が直線的に伸びない316～320がある。佐藤編年Ⅴ期古相～中相に比定でき、11世紀前半の年代が考えられる。2面の遺構の上限及び3面の遺構の下限に近い土器群である。

遺構外出土遺物 (図55)

遺構外の出土遺物の中で、古代を中心とした特徴的なものを示す。

3面の遺構検出時に、322、323の須恵器蓋転用硯がある。322は宝珠型つまみを持つ。323は口縁

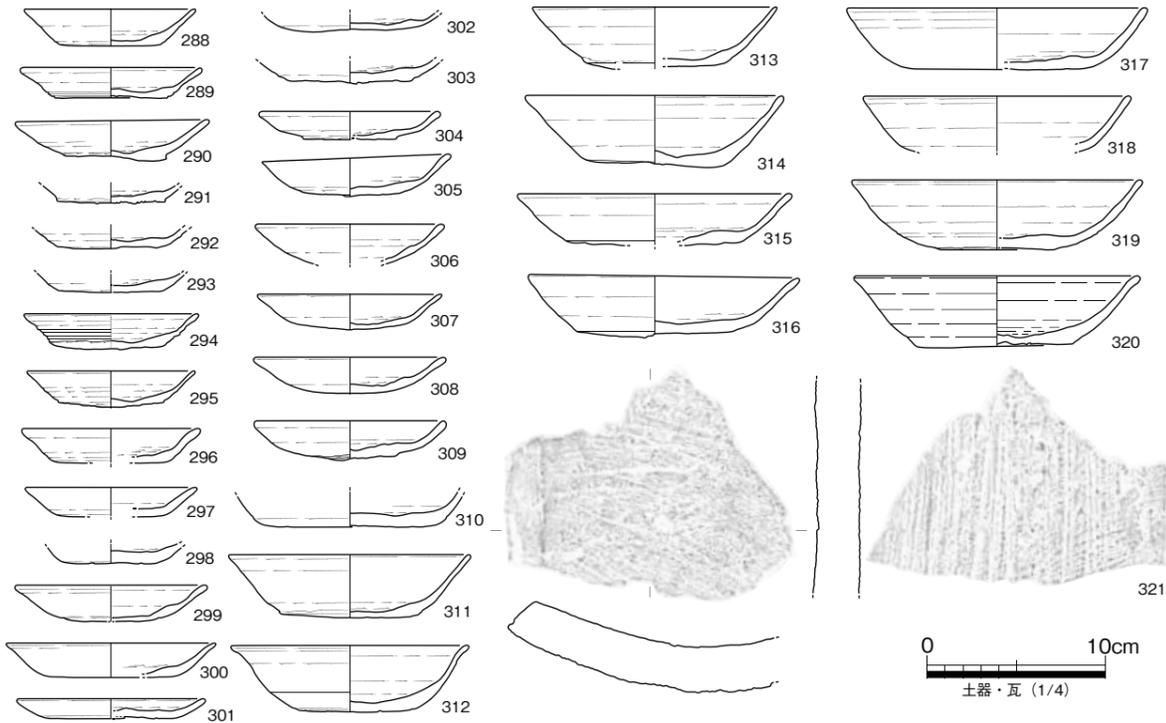


図54 37-3区 3面SD3010出土遺物

端部が屈曲し面を持つ。外面天井部には、二重の圈線を持つ。同様の特徴は小谷窯跡で確認され(香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会 2002) 遺物の年代も3面の建物群の上限年代に近い。

6層出土遺物は、324の緑釉陶器や325のミニチュア煮沸具、326の獣脚、327～330の陶硯類、331の軒平瓦等、官衙的な特徴を示す遺物が多く出土する。331はいわゆる讃岐国府式(KF201型式)と呼ばれる型式のものである。このほか332～334の埴塙や、336～339の鉄滓等生産にかかる遺物も出土している。さらに、335の銅製飾り金具や340の不明石製品等の特徴的な遺物も出土している。6層は2面の廃絶及び直後の整地や耕地化に伴う層であると考えられるが、それらが近い位置にある37-3区周辺の施設の機能時の遺物も巻き上げる形で形成されたと考えられ、これらの遺物も建物群に関連する可能性が高い。

2. 地点2の調査成果

周知の埋蔵文化財包蔵地「讃岐国府跡」の範囲よりさらに北側にあたる。当地点の周辺ではこれまで、第9次調査で古代の遺物が多く出土しており、その中には墨書土器、施釉陶器が高率で含まれている(香川県教育委員会 2016)。第9次調査では古代の遺構は溝以外に確認されておらず。それらの遺物の由来となる遺構の実態が明らかではなかった。今回の調査は、近接する微高地上で調査を行い、遺構・遺物の包蔵状況を確認した。

(1) 37-4区の調査成果 (図56・57)

37-4区は、現在の地割に合致する方向に、幅1.5m、長さ約10mで設定した。

床土から下位は、0.4m程の包含層の堆積が確認される。図57に平面図及び断面図を掲載したが、1

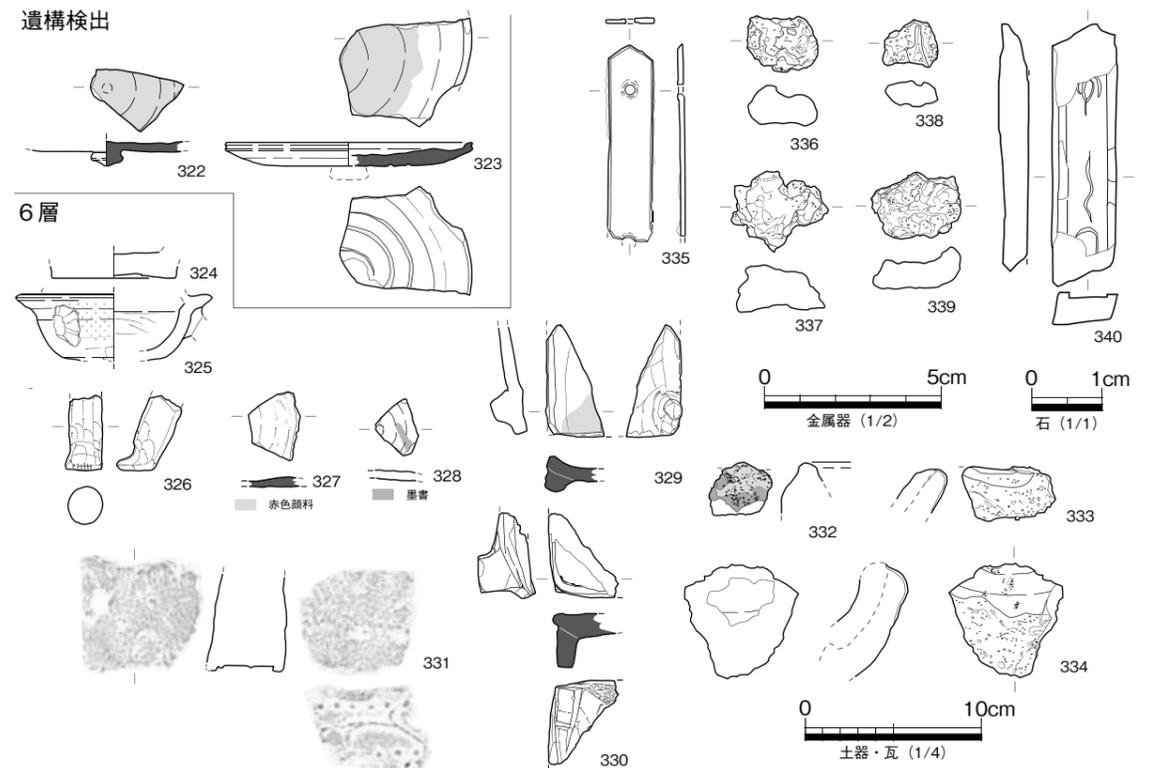


図55 37-3、5区 遺構外出土遺物



図 56 地点2 37-4区位置図

～2層の床土の下位に3層が存在し、堆積状況や土質から、耕作に伴う造成土であると考えられる。明確に時期を示す資料が層中から出土していないが、これまでの讃岐国府跡の調査成果を参考に、中世後半以降の年代を想定しておきたい。さらに下位に包含層が確認されるが、これらは調査区内の南側に向かって堆積しており調査区北端では確認されない。遺構面は、基盤層上に1面確認されるが、調査区南端にSR4010が確認でき、これらの埋没以前と以後で遺構面が部分的に分かれる可能性がある。SR4010の出土遺物は図59に示した。

347は須恵器蓋である。天井部のみ残存しており、外面はヘラケズリによって平坦となっており、口縁部まで残存していないが、器高は低いものであったと考えられる。348は須恵器杯である。杯身であり、内傾する受部が付き、底部付近においてヘラケズリを施す。349は須恵器壺である。胴部の破片であり、明確な屈曲を持つ。SX4012出土の長頸壺と同一個体となる可能性もあるが、明確な接点はなく、別個のものとして掲載している。

出土遺物からは、8世紀代でも早い段階での埋没を想定することができる。

遺構の多くは検出に留めているため、掘削を行ったものや、重要なものについて報告する。

SD4001 (図 57・59)

調査区北端で検出された。調査区内を東西方向に伸びる小規模な溝である。柱穴列を構成する遺構に後出する。出土遺物は図59に示した。

341はふいごの羽口である。342は須恵器甕である。胴部片であるが、外面にカキ目を残すことから、7～8世紀の特徴を持つ。出土遺物や遺構の方位からは、8世紀代の遺構である可能性が高い。

SD4002 (図 57・59)

条里方向に伸びる溝である。調査区外に東肩は伸びるため規模は不明であるが、深さは非常に浅い。

- | | | |
|--|--|----------|
| 1 10YR7/1 灰白色シルト 明黄褐色のシルトブロック多く含む | 19 10YR7/1 灰白色シルト 炭化物少し含む | [SD4001] |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 灰白色のシルトブロック含む | 20 10YR7/1 灰白色シルト 黄褐色の粘質土ブロック (φ1～2cm) を少し含む | [SD4001] |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂 φ3～4cmの礫、灰白色のシルトブロック含む | 21 10YR4/1 褐灰色粘質土 | [SP4006] |
| 4 10YR6/1 褐灰色シルト 灰白色の極細砂を少し含む | 22 10YR4/1 褐灰色粘質土 | [SP4006] |
| 5 10YR6/1 褐灰色シルト 褐色の細粒砂を少し含む | 23 10YR8/6 黄褐色シルト 黄褐色の粘質土ブロック (φ2～3cm) を少量含む | [SP4006] |
| 6 10YR7/1 灰白色シルト 極細砂をラミナ状に含む | 24 10YR6/6 明黄褐色シルト 黄褐色のシルトブロックを多く含み弱い | [SD4013] |
| 7 10YR6/2 灰黄褐色シルト 極細砂をラミナ状に含む | | [装飾層] |
| 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまり非常に強い、黄褐色の粘質土ブロックを含む | | |
| 9 10YR6/1 褐灰色シルト | | |

□ 土器
■ 石

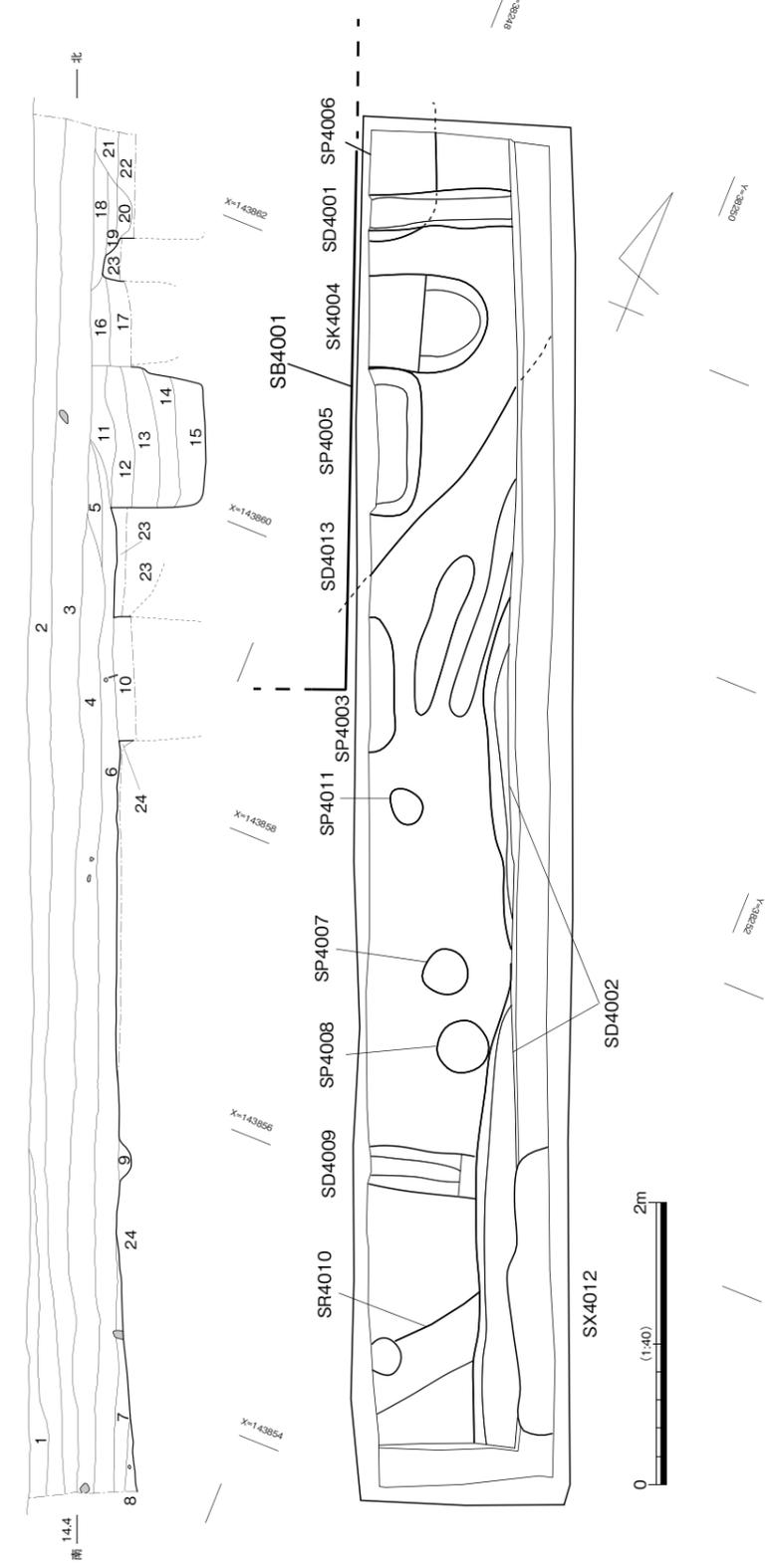


図 57 37-4区 平面図・西壁断面図

343は土師質土器杯である。底部から口縁端部まで直線的に伸びる。口径は14.0cm、器高は34cmである。口径が比較的大きく、直線的に開く土師質土器杯であり、佐藤編年Ⅳ期古相～中相に相当し、9世紀後葉～10世紀前葉に比定できる。344は丸瓦である。凹面には布目が確認できる。

出土遺物からは、10世紀以降の埋没が想定される。

SB4001 (SP4003、SP4005、SP4006) (図57・59)

調査区北側で検出された。3基の柱穴が南北方向に並び、柱穴の芯々間の距離は、およそ1.8mである。柱穴列が東・南側に展開しないことは確実であるが、北・西側の展開については不明である。平面隅丸方形であり、一辺約1.0m

を測る。深度0.8m程で、掘方埋土はブロック土を多く含む。

出土遺物は図59に示した。

345は須恵器高杯である。脚端部のみ残存している。端部は丸くおさめ、面や屈曲は認められない。346は須恵器鉢である。口縁部までやや内湾気味に立ち上がり、端部にはナデにより面を持たせる。把手が確認できる。横長の把手であり、形態は欠損しており不明である。形態や胎土の特徴から在地産の須恵器ではない可能性が高く、志方窯跡群の志方編年C期に相当する。実年代としては8世紀後半から9世紀初頭の年代が想定される(兵庫県教育委員会2001)。この年代を参考にすると、SP4005は8世紀後半から9世紀初頭の年代が比定でき、これをSB4001の時期と考えることができる。

SK4004 (図57)

調査区北側で検出した。長楕円形状の土坑であり、主軸を条里方向にとる。深度は0.5m程で、最大

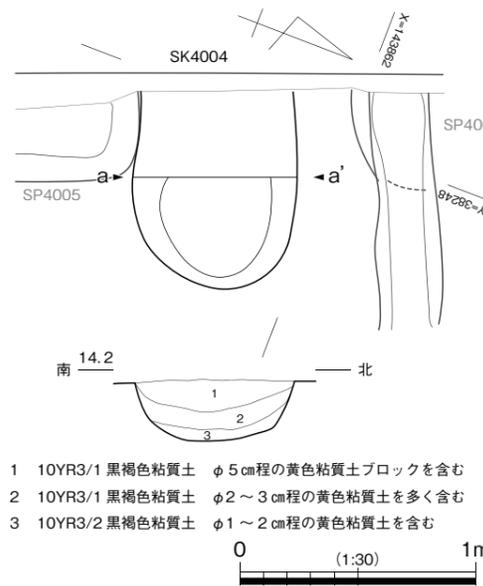


図58 37-4区 SK4004 平・断面図

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土 φ5cm程の黄色粘質土ブロックを含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土 φ2～3cm程の黄色粘質土を多く含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土 φ1～2cm程の黄色粘質土を含む

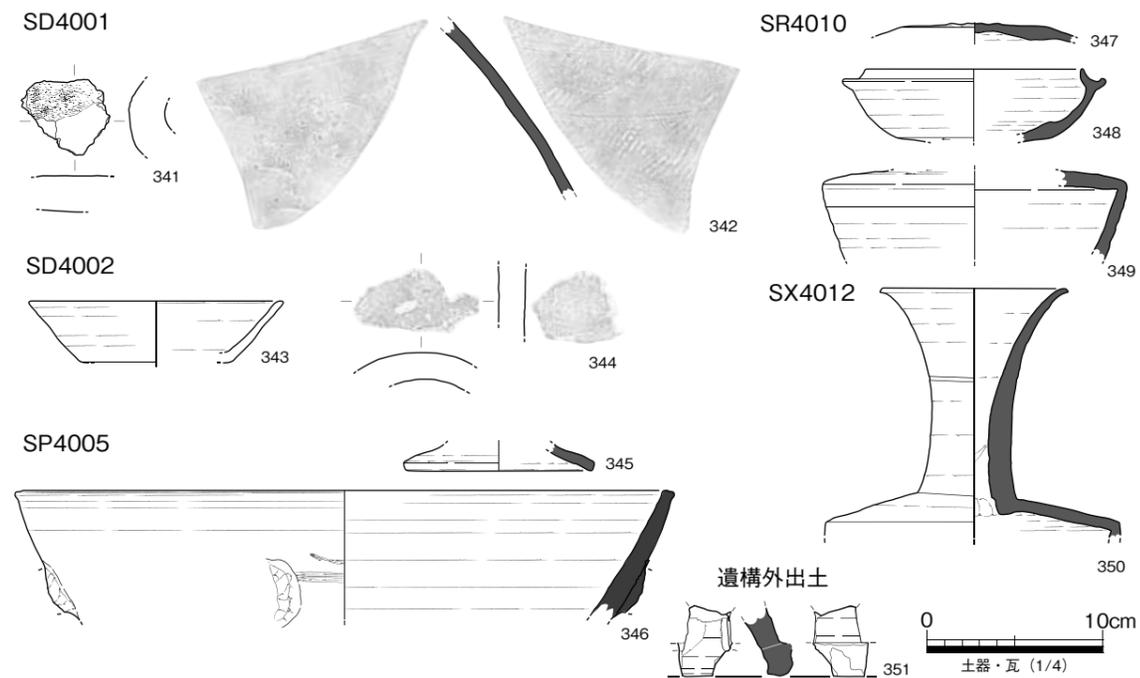


図59 37-4区出土遺物

幅は0.7mを測る。図化可能な遺物は出土していないが、須恵器・土師質土器片を含む。SB4001に先行することと、遺構の主軸が条里に合致することから、8世紀代の遺構と想定しておきたい。

SD4009 (図57)

調査区南側で検出された幅0.3m、深度0.1m程の小規模な溝である。やや傾きながらも、条里方向に合致している。水路としての機能は想定しがたいが、地形の落ち付近に配置されている。

SX4012 (図57・59)

調査区南東部で検出された不整形な遺構である。出土遺物は図59に示した。

350は須恵器壺である。長頸壺であり、外反する口縁部と、肩が張り、明瞭に稜を持つ。

出土遺物は7～8世紀代であるが、遺構の切り合いや下位のSR4010の年代観から時期はさらに下り、SD4002に後出することから、10世紀以降の年代が想定される。

遺構外出土遺物

351は須恵器碗である。円面碗の脚部であり、端部を肥厚させ、方形あるいは三角形の透かし孔の痕跡が残る。法量の復元は困難であるが、形態や器厚から、比較的大型の製品である可能性が高い。

3. 小結

(1) 地点1 (37-1～3、5区)

37-1・2区では、条里型地割に合致する地形の落ちと、落ちの方向と合致する数条の溝が確認された。溝はいずれも幅1m以上で、調査区間で対応する溝は底面の標高も類似する。周囲の状況とも合わせ、地形の落ちの西側に設置された区画施設と考えることができる。

37-3、5区では、区画の西側にあたる箇所でも複数の建物を確認した。SB3001は大型の南北棟に復元できる可能性が高く、それ以降の建物も、同等の規模を持つ可能性がある。8世紀前半を下限とする建物を端緒として複数の建物が続く状況は、讃岐国府跡でこれまで状況が判明している開法寺東方地区とは少し異なる。また、地点1の周囲でこれまで確認されていた6次調査の大型建物(香川県教育委員会2016)や18次調査で検出された大型柱穴(坂出市教育委員会1995)の時期とSB3001は近い時期にある。

古代の遺構面の上には、11世紀～13世紀を中心とした2面が存在し、それらの埋没後に調査地周辺の耕作地化が進められた中世後半以降の状況(1面)も確認された。

(2) 地点2 (37-4区)

古代の遺構が主に確認された。8世紀後半～9世紀の建物(SB4001)やそれに後出する溝や柱穴が確認されている。従来周知の讃岐国府跡の埋蔵文化財包蔵地外であったが、さらに北側の微高地にも施設が展開する可能性が高いことが判明した。また、調査区の南側で検出された地形の落ちは、従来讃岐国府跡の中で想定されていた低地帯(低地帯6)の一端を捉えている可能性が高い。今回の調査地点選定のきっかけとなった9次調査出土の遺物の由来については、9次調査で出土した特徴的な遺物の年代が9世紀以降であるのに対し、当該期の遺物の出土量もさほど目立たない。

以上の事から、従来想定されていた国府のエリアの北限に相当する低地帯よりも北側に、さらに国府に関連する施設が展開する可能性が高い。施釉陶器等を多量に使用したと想定される施設は、従来の想定(香川県教育委員会2016)通り、地点2の南西部の微高地に想定できる。

第3節 第38次調査の成果

第38次調査は、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地の中央よりやや西側に位置する。

第37次調査の成果から、国府の施設の内容の一端が判明し、低地帯によって隔てられると考えられていた施設が一体的なものとなる可能性が高くなった。6次調査、18次調査といった既往の調査で検出されていた建物の年代と37-1区SB3001の年代が類似する事もこれを補強した。これらの施設の広がりを変更して検討する必要がある、これを考えるうえで、18次調査地点より西側に、現地形でも1m近い高低差がある地点が存在する。この段差の上下において、遺構面の標高が大きく変わる状況が周辺の調査でも確認されており、こういった状況から、38次調査地点付近に、西辺が推定された。この西辺を確認することを目的として調査を行った。

調査区は計2ヶ所設定し、いずれも地形の傾斜方向である東西方向に長い調査区を設定した。北側から38-1区、38-2区として調査を行った(図60)。

1. 基本層序

図62に各調査区の断面図を掲載する。耕作土及び床土直下では、耕作地化に伴う造成の痕跡が確認できる。造成土は1~2層に分けられるが、明確にそれらの年代を特定することは難しい。検出遺構の下限年代から、近世以降に形成されたものであると考えられる。造成土の下位で遺構面となる基盤層が確認される。基盤層は粗砂混じりのシルト層であり、38-2区のある南側の調査区においては0.2m程標高が高くなるが、各調査区内ではほぼ平坦となっている。この平坦な遺構面については、その削平状



図60 38次調査地点

況からも、旧地形を反映したものではなく、人為的な削平による平坦化が想定される。

なお、削平の時期は、最終的には包含層の堆積直前である近世にあたる。しかし、今回調査で確認された遺構の深度が時期ごとで異なっており、調査区内で同時期の遺構の深度に差がないことから、特に中世以降には、削平等の造成が複数回行われていた能性が高い。

2. 38-1区の調査成果

38-1区は、東西方向に長い調査区である。遺構面は1面確認され、古代~中世の遺構が確認される。遺構の配置は図61に示した。

調査区内では、多くの小規模柱穴及び、鋤溝等の溝が確認されている。建物も複数復元でき、SB1001は東西3間以上、南北2間以上は伸びる。このほか、周辺にSB1002、1003が検出されている。このうち、SB1003については、南北方向に並ぶ2穴の柱穴のみが確認されているが、柱穴の平面形が隅丸方形となり、一辺0.4~0.5mを測る等、0.3mに満たない周辺の小柱穴とは異なる特徴を持つ。

SB1001 (図61)

調査区中央付近で確認された。いずれも直径0.3m以内の小規模な柱穴によって構成されており、東西3間以上、南北2間以上確認される。柱穴間の距離は1.8~2.1mであり、梁行、桁行共に大きな差異は見られない。柱穴深度は、調査区北壁にて検出されたSP1040でも0.4mであり、そのほかの柱穴も概ねそれらに一致する。SB1001の柱通りの近辺には、柱穴が近い位置に複数検出されており、近い位置で建物がさらに復元できる可能性も考えられる。

出土遺物は、土師質土器の小片が認められる程度である。出土遺物から年代を特定することは難しいが、中世の遺構群の中でも切り合い関係から古い段階のものであることから、概ね中世前半に比定することが可能である。ただし、これらを切るSP1019出土は、柱穴深度がSB1001の倍近くあり、出土遺物には乗岡編年近世1期(中世末~近世初頭)(乗岡2002)に比定される備前焼等が確認されることから、その年代を下限とする。

SB1002 (図61)

SB1001の南側で検出された。東西方向の3穴の柱穴列のみが確認されている。南側、東側以外への広がり確認できず、規模は明らかではない。柱穴はいずれも直径0.2m程で、深度はSB1001よりもさらに浅い。出土遺物も土師質土器の小片が認められる程度であり、年代の特定は難しいが、中世前半に比定できる。

SB1003 (図61)

調査区東端で検出された。2基の東西方向に並ぶ柱穴が確認でき(SP1031、SP1032)柱穴はいずれも平面形が隅丸方形を呈する。柱穴は一辺0.5m程で、柱穴の深度は、SP1031で、0.2m程であり、漸上状況は非常に悪い。西側に対応する柱穴は確認されないため、東側に広がる建物の西側列、あるいは南北方向の柱列であると考えられる。

出土遺物は土器の小片のみで時期の特定は難しい。讃岐国府跡の既往の調査で検出される11世紀後半以降の柱穴の多くが平面円形を呈することから、より遡る古代のものであると考えられる。

その他の柱穴 (図61)

以上の建物を構成する以外にも、多数の柱穴が確認された。遺物を伴わないものも存在したが、出土遺物から見ると、中世の範疇で収まる可能性が高い。柱穴の分布は、調査区西端付近まで確認されるが、

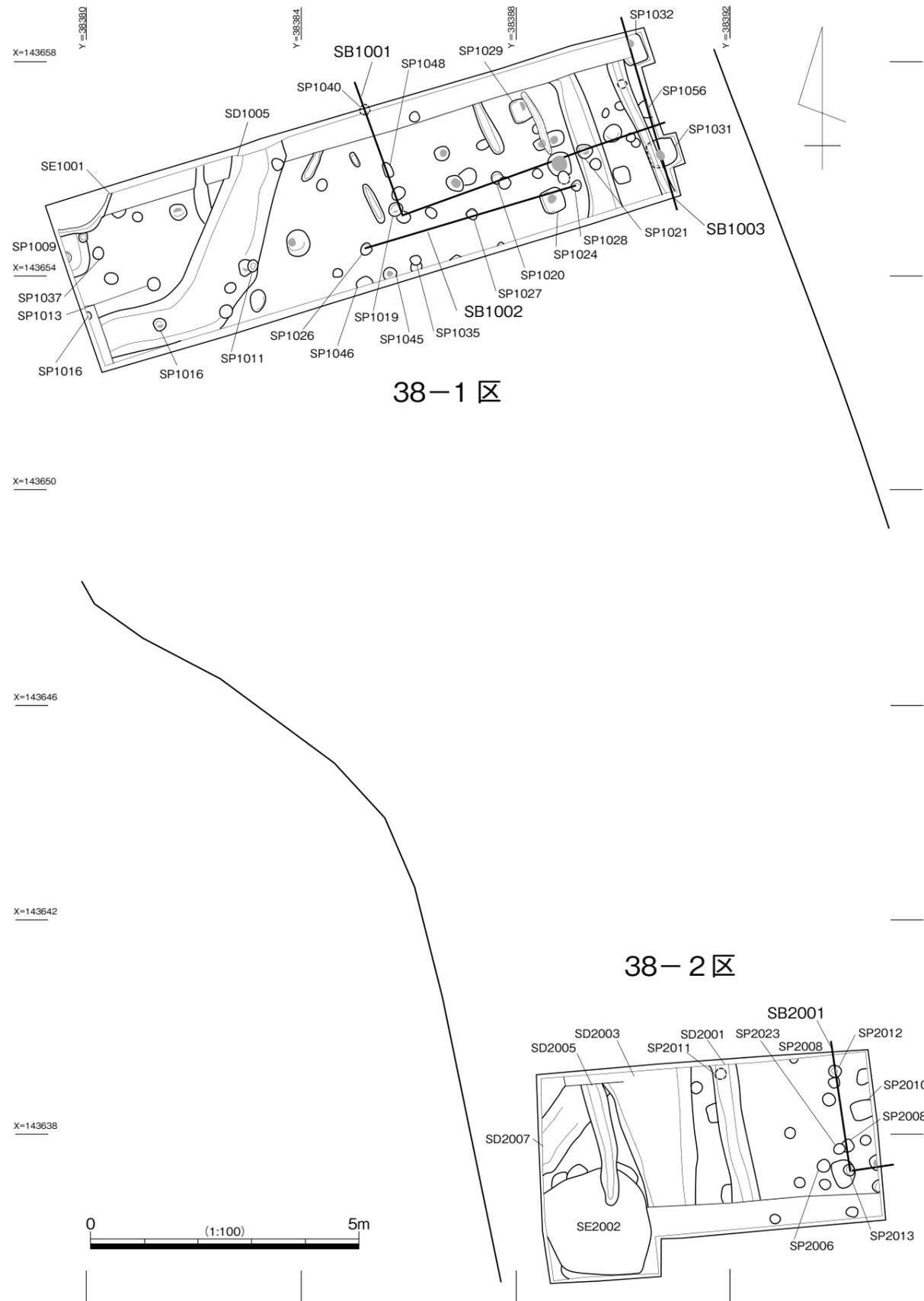


図 61 第 38 次調査平面図

西側に向かうにつれ、その密度が下がる。

また、これらの柱穴については、深度にかなりのばらつきが見られる。概ね SB1001 のように 0.4 m 以内のものが認められるが、SB1003 のような浅いもの、SP1019 のように深いものといったように差が大きい。これらは、遺構の切り合いや出土遺物から考えられる年代差に概ね対応しており、より時期が下る柱穴の深度が深い傾向にある。複数回の削平により、各期の遺構の掘込面の標高が異なっていたことが遺構深度に差に表れていると考えられる。なお、柱穴の形態が異なる SB1003 や SP1024, SP1029 については、出土遺物がほとんど認められないが、柱穴の規模に対して遺構深度がかなり浅いことから、古代に下りうる可能性が高い。

SD1005 (図 61)

調査区西端で検出されたが、その方位が条里型地割や座標北を指向していない。出土遺物が僅少なため、年代の特定は難しいが、古代末～中世前半の可能性が考えられる。SD1005 埋没後に形成される SP1016 は、出土輸入陶磁器の年代から 12 世紀を下限とし、SD1005 の下限も同時期と考えられる。

SE1001 (図 61)

調査区北西隅で検出された、筒状の土坑であり、埋土には礫や木片が含まれる。礫の中には直径 20cm 以上のものも含まれ、完掘していないため深度は不明であるが、石組みを用いた井戸の可能性が高い。出土遺物には、土師質土器鍋や土師質土器足釜が多く認められる。出土遺物の特徴から中世後半を主体とした年代が考えられるが、その下限は近世初頭まで下る可能性がある。

3. 38-2 区の調査成果

38-2 区では、柱穴・溝・井戸が確認された。柱穴は 38-1 区と同様に調査区の東側に集中する。建物として復元が可能なものは SB2001 であるが、その周辺に柱穴が集中することから、周辺に複数の建物が存在する可能性がある。

SB2001 (図 61)

調査区東端で検出された。南北方向に 2 穴の柱穴列が確認されるが、西側以外の展開は不明である。周辺の柱穴も含め、SP2013 から東側に柱穴の分布が見られることから、この付近が南辺となる可能性が高いと考えられる。出土遺物は僅少で、いずれも土師質土器小片である。時期の特定は難しいが、中世前半のものであると考えられる。

SD2001 (図 61)

調査区中央で確認された南北方向の溝である。深度は 0.2 m 程である。38-1 区において延長が確認できないため、北側で屈曲あるいは途切れる可能性がある。

38-2 区においては、SD2001 の近辺を境に、以西には柱穴が確認できず、建物の敷地や建物自身の区画の溝となる可能性が考えられる。

SD2003 (図 61)

条里型地割の方向に合致する溝である、平面形はいびつで、深度も非常に浅い。調査区内では、最も新しい遺構であり、出土遺物には肥前産陶磁器片を含む、陶磁器片は、破片であるが口縁端部内面に染付で圏線を持ち 17 世紀代に比定できる磁器の可能性が高い。近世初頭の埋没が想定され、この遺構の埋没年代が、遺構面を被覆する包含層の上限となる。

SD2005（図 61）

条里型地割に合致する南北方向の溝である。SD2003に切られるが、その埋土は類似しており、SD2005からも肥前産の磁器片が見られるため、17世紀以降まで下る遺構である。

SD2007（図 61）

周囲の地割に合致しない溝である。切り合い関係からみても調査区で最も古く、出土遺物は土器小片やサヌカイト片しか確認されない。SD2007は、調査区西側から伸びてくる丘陵の縁辺部に位置する。これらの状況や、周辺の調査でも縄文時代の土器・石器が確認されたことから、古代以前の遺構である可能性を想定しておきたい。

SE2002（図 61）

調査区南西部で検出された。直径2m程の円形の土坑であり、深度は1.5m以上を測る。埋土は複数層に分かれているが、下位の層位では黒色の粘質土を含む。下位から、円形の石組みの残存が確認されたことから、井戸であると判断した。石組み内部や裏込め土からは、土師質土器足釜や備前焼等が出土している。備前焼については、甕の底部片であり口縁部などの形態は不明であるが、間壁編年Ⅳ期となり、15世紀代のものと考えられる¹⁾。これらの年代から中世後半に機能し、埋没したものであると考えられる。出土遺物の傾向や形態的特徴からは、38-1区SE1001に先行する。石組みは西半部では確認できず、石材が未確認の部分は、東側と比べ土質も異なっており、その埋土中にも石材が多く認められたため、井戸の廃絶時に解体、あるいは抜き取りを行った痕跡の可能性はある。

4. 小結

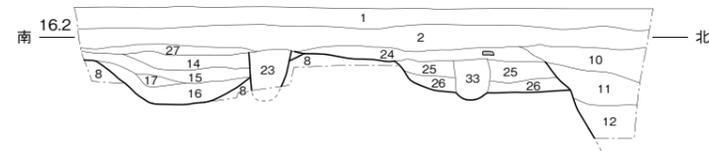
38次調査では、古代～近世の遺構が確認された。この中で、古代の国府の施設の内容や広がりやを直接示す遺構は確認されておらず、38-2区の東側で行われた18次調査で検出されたような、大型の古代の柱穴と関連するな遺構も確認できない。調査区内における柱穴が、中世段階でも東側に集中することや、調査地以西については、中世以降にも積極的に削平によって地形改変が行われていたことから考えても、さらに西側を含めた範囲を、37次調査地点から一連のものとした施設の範囲としてとらえることは難しい。

以上の状況から、8～9世紀の建物群は、38-1区SB1003を西限として、より東側に分布するという見通しが得られた。

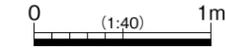
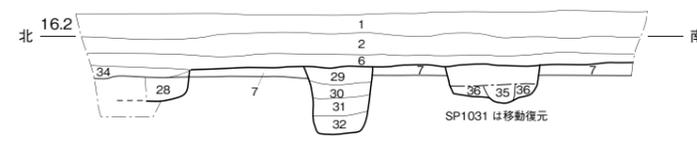
また、中世の遺構は、中世全般にわたり確認されている。各時期において、遺構の残存状況がさまざまであるが、東側での柱穴、西側での溝や井戸といった配置が復元されており、中世段階においても、調査地よりもさらに東を含めた範囲を建物を含む屋敷地とし、その西辺付近の状況が検出されていると考えられる。遺構面の状況と各時期の遺構深度からも、複数回の地形の削平による平坦化を経て、最終的には耕地化としての造成が進むとことが想定され、次第に現在の景観に近い形へと移行していく状況についても明らかとなった。

1) 備前焼の年代については、中世は間壁編年（間壁1990）を用いるが、近世初頭以降は、乗岡編年による年代区分を用いて時期を決定している（乗岡2002）。

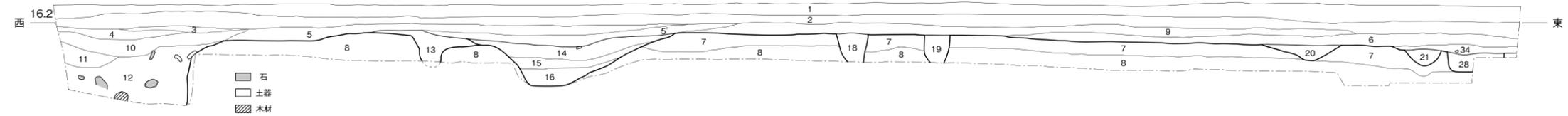
a-a' 38-1tr 調査区西壁



b-b' 38-1tr 調査区東壁

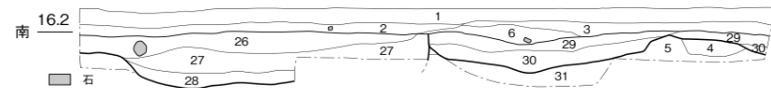


c-c' 38-1tr 調査区北壁

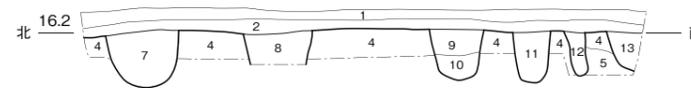


- | | | | | | | |
|--|---------------------------|------------------------|-----------------------|--------------------|--------------------|----------|
| 1 7.5YR7/6 橙色シルト 褐色のシルトブロック含む | 【床土】 | 13 10YR4/1 褐灰色粘質土 | 【SD1017】 | 28 10YR6/1 褐灰粘質シルト | マンガン沈着あり | 【SP1032】 |
| 2 10YR7/1 灰白色シルト 褐色のシルト粒少し含む。φ0.2～0.3cmの粗砂含む | | 14 10YR3/1 黒褐色粘質土 | ベース由来の黄褐色シルトブロック含む | 29 10YR6/2 灰黄褐シルト | マンガン沈着 | 【SP1056】 |
| 3 10YR6/1 褐灰色シルト 粗砂少し混じる | | 15 10YR5/1 褐灰色シルト | φ2～3cmの黄褐色シルトブロック多く含む | 30 10YR3/1 黒褐色シルト | 黄褐色のシルトブロック少し含む | 【SP1056】 |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色シルト 褐色シルトブロック含む | | 16 10YR7/1 灰白色極細砂 | 黄褐色のシルトブロック少し含む | 31 10YR3/1 黒褐色シルト | 黄褐色のシルトブロック多く含む | 【SP1056】 |
| 5 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト | 【SD1002 か】 | 17 10YR7/1 灰白色シルト | | 32 10YR3/1 黒褐色粘質土 | | 【SP1056】 |
| 5 10YR6/1 褐灰色シルト | マンガンの沈着有り。ベース由来の黄褐色シルト粒含む | 18 10YR4/1 褐灰色シルト | 【SP1040】 | 33 10YR6/1 褐灰色シルト | 黄褐色シルトブロック含む | 【SP1009】 |
| | 【SD1002 か】 | 19 10YR4/1 褐灰色シルト | 【SP1041】 | 34 10YR6/1 褐灰色シルト | 黒褐色のシルト粒と橙色のシルト粒含む | |
| 6 10YR6/1 褐灰色シルト | マンガンの沈着有り。ベース由来の黄褐色シルト粒含む | 20 10YR6/2 灰黄褐色シルト | 黄褐色のシルトブロック含む | 35 10YR6/2 灰黄褐シルト | 橙色のシルト粒少し含む | 【SP1031】 |
| 7 10YR8/4 浅黄褐色シルト | 粗砂少し含む。マンガン粒少し含む | 21 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト | 褐色のシルト粒少し含む | 36 10YR5/1 褐灰色シルト | マンガン粒少し含む | 【SP1031】 |
| 8 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり極細砂とシルト | 【基盤層】 | 23 10YR7/1 灰白色粗砂混じりシルト | | | | |
| 9 10YR5/1 褐灰色シルト | 黄褐色のシルト粒少し含む | 24 10YR5/1 褐灰色シルト | 褐色のシルト粒含む | | | |
| 10 10YR5/1 褐灰色シルト | 粗砂混じる。黄褐色のシルトブロック多く含む | 25 10YR5/1 褐灰色シルト | φ3～4cmの黄褐色シルトブロックを含む | | | |
| 11 10YR6/1 褐灰色シルト | 褐色の極細砂も帯状に含む | 26 10YR3/1 黒褐色極細砂 | ベース由来の黄褐色シルトブロック含む | | | |
| 12 10YR3/1 黒褐色粘質土 | 【SE1001】 | 27 10YR6/2 灰黄褐色シルト | | | | |
| | 【SE1001】 | | | | | |

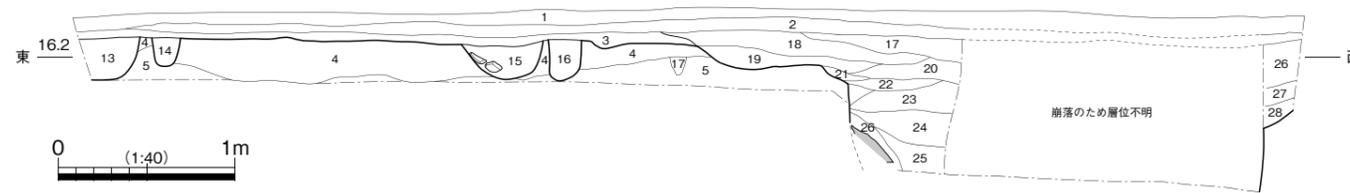
d-d' 38-2tr 調査区西壁



e-e' 38-2tr 調査区東壁



f-f' 38-2tr 調査区南壁



- | | | | | |
|--|-------------------|------------------------|-------------|----------|
| 1 10YR8/3 浅黄褐色シルト 橙色のシルトブロック含む | 【床土】 | 24 10YR3/1 黒褐色粘質土 | 極細砂含む | 【SE2002】 |
| 2 10YR7/1 灰白色シルト 褐色のシルト粒含む。マンガン一部沈着 | 【包含層】 | 25 10YR2/1 黒粘質土 | | 【SE2002】 |
| 3 10YR6/1 褐灰色シルト 褐色のシルトブロック含む | 【包含層】 | 26 10YR3/1 黒褐色粗砂混じりシルト | | 【SE2002】 |
| 4 2.5Y8/6 黄色シルト 部分的にマンガン沈着 | 【基盤層】 | 27 10YR2/1 黒色シルト | 黄色のシルト粒少し含む | 【SE2002】 |
| 5 7.5YR5/6 明褐色粗砂混じりシルト | 【基盤層】 | 28 10YR3/1 黒褐色シルト | | 【SE2002】 |
| 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト | マンガン一部沈着 | 29 10YR2/1 黒色粗砂混じりシルト | | 【SD2007】 |
| 7 10YR6/1 褐灰色シルト 褐色のシルト粒少し含む | 【SP2016】 | 30 10YR3/1 黒褐色粘質土 | | 【SD2007】 |
| 8 10YR5/1 褐灰色シルト 黄褐色のシルトブロックを含む | 【SP2012】 | | | |
| 9 10YR6/1 褐灰色シルト 黄褐色のシルト粒多く含む | 【SP2015】 | | | |
| 10 10YR6/1 褐灰色シルト 黄褐色のシルト粒を含む | 【SP2015】 | | | |
| 11 10YR4/1 褐灰色粘質土 粗砂少し混じる | 【SP2009】 | | | |
| 12 10YR6/1 褐灰色シルト | 【SP か?】 | | | |
| 13 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト | 黄褐色のシルトブロック多く含む | | | |
| 14 10YR5/1 褐灰色シルト 褐色のシルト粒少し含む | 【SP2008】 | | | |
| 15 10YR3/1 黒褐色シルト 黄色のシルトブロックφ10cm程の礫含む | 【SD2001】 | | | |
| 16 10YR7/1 灰白色シルト | 【SP か?】 | | | |
| 17 10YR6/1 褐灰色シルト | 【SD2003】 | | | |
| 18 10YR6/1 褐灰色シルト 褐色のシルト粒少し含む | 【SD2003】 | | | |
| 19 10YR5/1 褐灰色シルト | マンガン粒、褐色のシルト粒少し含む | | | |
| 20 10YR6/1 褐灰色シルト | 【SE2002】 | | | |
| 21 10YR5/1 褐灰色シルト 粗砂少し含む | 【SE2002】 | | | |
| 22 10YR4/1 褐灰粗砂まじりシルト | 【SE2002】 | | | |
| 23 10YR4/1 褐灰色粘質土 | 青灰色の細砂混じり | | | |
| | 【SE2002】 | | | |

断面位置図

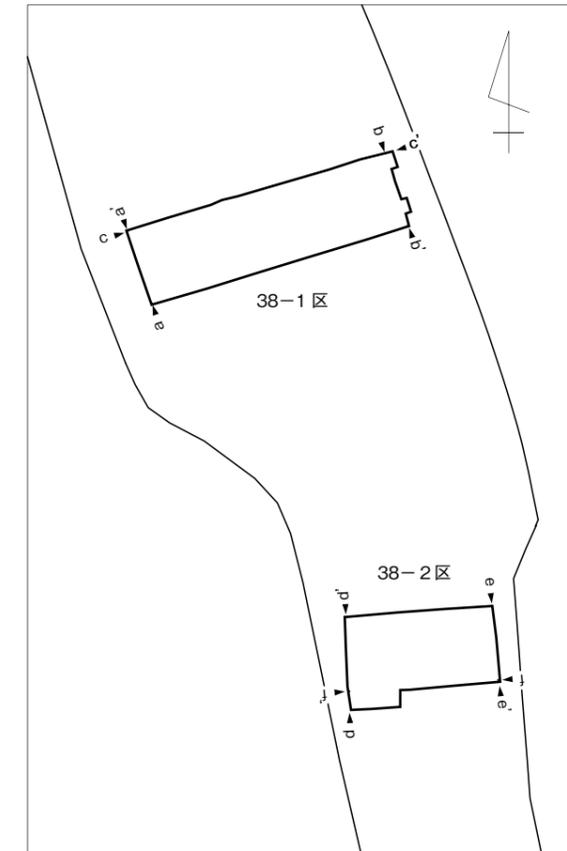


図 62 38 次調査調査区壁面断面図

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 讃岐国府跡 37次調査出土の動物遺存体

広島大学総合博物館 石丸恵利子

1 はじめに

讃岐国府跡は香川県坂出市府中町に所在する、古代から中世の官衙遺跡である。発掘調査は昭和51年度から行われ、国府関連の遺構・遺物が確認されている（信里・佐藤2016、松本ほか2019など）。令和元年度の37次調査において、遺構や包含層から動物骨資料が検出された。資料は、現場で目視によって取り上げられたもののみではあるが、讃岐国府跡ではこれまで動物遺存体が一定量確認されることは少なく、その帰属時期が絞り込める本資料は当地における動物資源利用の実態を明らかにする上で非常に有益なものである。

本報告では、それらの内容を報告するとともに、当時の讃岐国府における動物資源利用の様相について考察する。

2 動物遺存体の種類

確認された資料は破片数にして21点で、少量ではあるが哺乳類5種を確認することができた（表1・2）。以下、それらの種類と部位の特徴について述べる。

表1 讃岐国府跡 37次調査出土動物種名一覧

	綱(Class)	目(Order)	科(Family)	属/種(genus/Species)
脊椎動物門 Vertebrata	哺乳綱 Mammalia	霊長目	ヒト科	ヒト
		Primates	Hominidae	<i>Homo sapience</i>
		食肉目	イヌ科	イヌ
		Carnivora	Canidae	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
		奇蹄目	ウマ科	ウマ
		Perissodactyla	Equidae	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Artiodactyla	イノシシ科	イノシシ属	
		Suidae	<i>Sus scrofa</i>	
		シカ科	ニホンジカ	
		Cervidae	<i>Cervus nippon</i>	

※種名表記については、阿部監修（2008）、遠藤・千石監修（2004）に従った。

ヒト

1区の地形落ちの埋土よりヒトの脛骨（左）を1点確認した。両端部が欠損した骨幹部から遠位部の破片で、端部割れ口の形状からは地中に埋設後に折れたものと判断される。地形の落込み部分で欠損資料1点が出土したのみであることから、墓壙などの原位置をとどめたものではないが、本調査区は、これまでの調査によって想定されている古代末から中世前半の屋敷地推定範囲外に位置し、当該時期に屋敷地狭間や隣接地に墓域が存在した可能性も示唆されるため、国府内の建物配置やその他の機能を持つ施設構成の解明を含め今後の調査を注視したい。

表2 讃岐国府跡出土動物遺存体一覧

NO.	調査区	出土遺構・層位	時期	分類群	種名	部位	左右	部分	備考
1	37-2区	SD2010	~10世紀後半	哺乳綱	ウマ	遊離歯	左	上顎前臼歯P2	L:35.79
2	37-5区	3面遺構面	~10世紀後半	哺乳綱	ウマ	基節骨	不明		前肢/後肢・左右不明
3	37-1区	地形落ちの埋土	~10世紀後半	哺乳綱	ヒト	脛骨	左	骨幹部~遠位部	
4	37-2区	7層	10世紀後半~11世紀前半	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	右		後方部欠損、GB:24.59
5	37-2区	SD2018	13世紀前半	哺乳綱	ニホンジカ	環椎	—	破片	
6	37-2区	SD2018	13世紀前半	哺乳綱	ニホンジカ	鹿角	左	角座~第1枝部	落角
7	37-2区	SD2018	13世紀前半	哺乳綱	ウマ	基節骨	右	近位	Bp:48.71、前肢/後肢不明
8	37-3区	SD3003	13世紀前半	哺乳綱	イノシシ属	上腕骨	左	近位部~遠位	遠位化骨、骨幹部外側部に打割痕、Bd:42.88,BT:36.15
9	37-3区	SD3003	13世紀前半	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	右	遠位前方部破片	
10	37-2区	6層	13世紀後半	哺乳綱	イヌ	下顎骨	右	下顎体(P1*P3P4M1)	大型、11:36.04,20:19.91
11	37-5区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ウマ	遊離歯	右	上顎切歯I3	
12	37-3区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ウマ	遊離歯	左	上顎切歯I2	
13	37-3区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ウマ	遊離歯	左	上顎前臼歯P3~M2のいずれか	L:26.69、B:26.07
14	37-2区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ウマ/ウシ	脛骨?	不明	近位部後方面?	
15	37-3区	6層	13世紀後半	哺乳綱	イノシシ属	基節骨	右	近位~骨幹部	内側、近位化骨、前肢/後肢不明、Bp:18.88、大型
16	37-3区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ニホンジカ	遊離歯	左	上顎後臼歯M2or3	L:17.09,B:17.11
17	37-5区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ニホンジカ	遊離歯	左	上顎後臼歯M2or3	L:18.76
18	37-2区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	左	腸骨	
19	37-5区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	右	骨幹部~遠位部	SD:17.5
20	37-5区	6層	13世紀後半	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	左		GB:(21.05)*復元値
21	37-3区	6層	13世紀後半	哺乳綱	不明	不明		骨幹部	ニホンジカ中手/中足骨骨幹部の加工?

※備考欄の計測場所の記号は、Driesch(1976)に従った。単位はmm

イヌ

下顎骨の破片を1点確認した。2区6層(13世紀後半)から出土したもので、歯は残存していないが第1前臼歯から第1後臼歯部分までの下顎体(右)である。第2前臼歯は欠歯で、歯槽は確認できなかった。欠損部分の形状から、本資料も埋没後に破損したものと考えられ、解体痕などの人為的痕跡も観察されなかった。前臼歯列長(図63の11)と第3前臼歯口先側の下顎骨高(図1の20)の計測値をもとに体高を復元すると、体高36cmの柴犬メスよりも大型で、体高38から41cmの柴犬オス大(小~中小型犬)あるいはそれより大型の中型犬程度の個体のものだと判断される。日本列島のイヌは弥生時代に大型化が認められ、中世においても大きさのバリエーションは認められるものの大型化の特徴は引き継がれており、本資料についても同様な特徴を示すものと考えられる(茂原1991)。

ウマ

遊離歯4点と基節骨2点の計6点を確認した。遊離歯はいずれも上顎歯で、SD2010(~10世紀後半)から出土した第2前臼歯(左)と、6層(13世紀後半)出土の第2切歯(左)および第3切歯(右)、第3前臼歯から第2後臼歯(左)のいずれかの計4点で、同一部位は含まれていなかった。第2切歯と第3切歯は出土地点が3区と5区にわたるが、骨格標本の同一部位と比較していずれもやや小さく、同一個体のものである可能性がある。基節骨は3面遺構面(~10世紀後半)とSD2018(13世紀前半)から出土している。前者は底側面が欠損しているため左右と前肢/後肢の同定が困難であり、後者についても近位のみ破片であるため前肢/後肢の同定には至らなかった。

その他、ウシあるいはウマなどの大型種の脛骨と考えられる近位部尾側面の破片を1点確認した。2

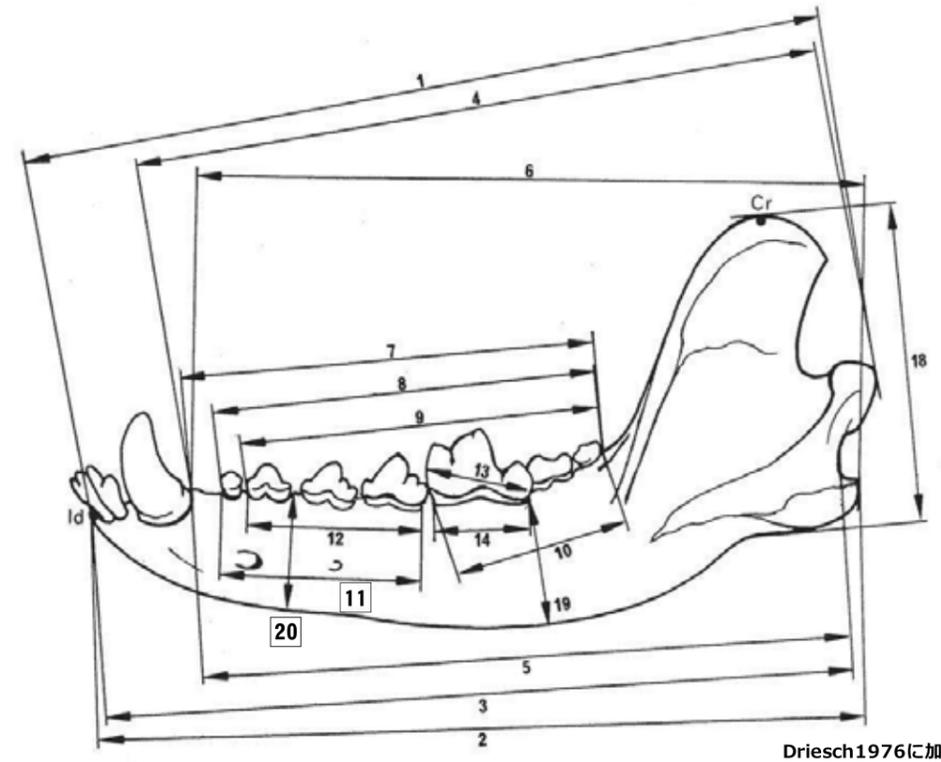


図63 イヌ計測場所位置図

区6層からの出土で、同一層から出土した大型哺乳類はウマのみであることから、同一種のものである可能性が高い。

イノシシ属

上腕骨と基節骨を各1点の計2点確認した。上腕骨はSD3003(13世紀前半)から出土し、近位端を欠く近位部~遠位(左)の破片で、遠位は化骨済の成獣個体のものである。下顎第3後臼歯が萌出中の30か月齢以下(2.5歳)の雄標本よりも大型であった。骨幹部外側部に打割の痕跡を観察することができ、食肉用や骨髄からスープを取るなどのために解体処理されたことがうかがえ、国府に居住した人びとの中世前半期におけるイノシシ属利用の一端を読み取ることができる。基節骨は6層(13世紀後半)出土で、遠位側を欠く近位から骨幹部の破片で、近位の化骨が終了した成獣のものである。同様に前述の標本(近位は一部未化骨)より大きな個体であった。形態からイノシシかブタかを区別できないため、イノシシ属とした。

ニホンジカ

最も多くの点数を数え、鹿角、環椎、肩甲骨、寛骨、大腿骨を各1点、また遊離歯と踵骨を各2点の計9点を確認した。7層(10世紀後半~11世紀前半)から出土した踵骨(右)は後方部が欠損しているものの踵骨幅(GB)は下顎第3後臼歯が萌出中の雄(2歳未満程度)よりも大型のものであった。鹿角(左)はSD2018(13世紀前半)から出土し、主枝角側を欠く角座から第1枝部の落角である。SD2018からは環椎の破片も出土している。同じく13世紀前半相当のSD3003からは、破片ではあるが肩甲骨(右)が確認された。また、6層(13世紀後半)からは、上顎第2もしくは第3後臼歯と考えられる資料2点(いずれも左)と寛骨の腸骨(左)の破片、骨幹部から遠位部の大腿骨(右)、踵骨(左)が出土している。大腿骨は骨幹部幅から前述の現生標本より小型のもので、踵骨もGB値は7層出土の

ものより小型のものだと判断される。その他に、6層からはニホンジカの中手骨もしくは中足骨の骨幹部を加工したものと考えられる両端部を欠く資料が出土しており、ニホンジカの骨や鹿角を加工したものが利用されていた可能性が示唆される。頭部から頸部の歯と環椎、胴部の肩甲骨と寛骨、四肢部の大腿骨と踵骨のように、全身の各部位が確認されていることから、ニホンジカ1頭すべてが運び込まれ、国府内で解体処理された可能性が高い点が指摘できる。

3 讃岐国府跡における動物資源利用

時期別出土動物相の特徴

上記の資料について、時期別に様相を比較してみると、10世紀後半までにはヒトとウマ、ニホンジカを、また13世紀代にはイヌとウマ、イノシシ属、ニホンジカを確認することができる(図64)。資料数が少ないため各時期の特徴を正確にとらえることは難しいが、ウマは古代末にも中世前半にも認められること、また食料資源となった可能性のあるイノシシ属とニホンジカは、10世紀代まではニホンジカ1点であるのに対して、中世になるとイノシシ属とニホンジカが複数点認められる状況がうかがえる。讃岐国府跡は古代末から中世前半において、留守所として機能していたとされており、当該期の検出遺構からは、これまでの官衙的な配置と異なり、複数の屋敷地が立ち並ぶ。また、留守所から発給された文書などの記載から、留守所で実務を担ったのは地域の有力者で、これらの屋敷地は、それらが居を構えた痕跡であると想定されている(信里・佐藤 2016、香川県立ミュージアム 2017)。動物資料の様相からは、それらの屋敷地の前段階の、古代の官衙的な施設の一端と考えられる10世紀代までの遺構や、それらを被覆する7層からは、食環境がうかがえる資料の出土が貧弱であるのに対して、中世前半になるとウマに加えて食料資源や骨製品の素材となった可能性が高いイノシシ属とニホンジカの出土が認められる状況へと変化する。これらのことから、調査地区においては中世前半に、より居住地としての特色が濃くなることを示しているものと理解することもできる。

動物遺存体出土地点の特徴

動物遺存体の出土分布を平面的に捉えると、調査区内の37-1~3.5区のいずれからも出土が認められる。古代末には37-1.2.5区で確認され、調査区の東寄りに偏る傾向が認められる(図65)。37-3.5区では古代の建物跡が複数棟検出されているため、建物などの集中する東辺の低地に残滓を投棄した状況を読み取ることができる。また、中世前半においては37-2.3.5区で出土が認められ、調査区の西寄り

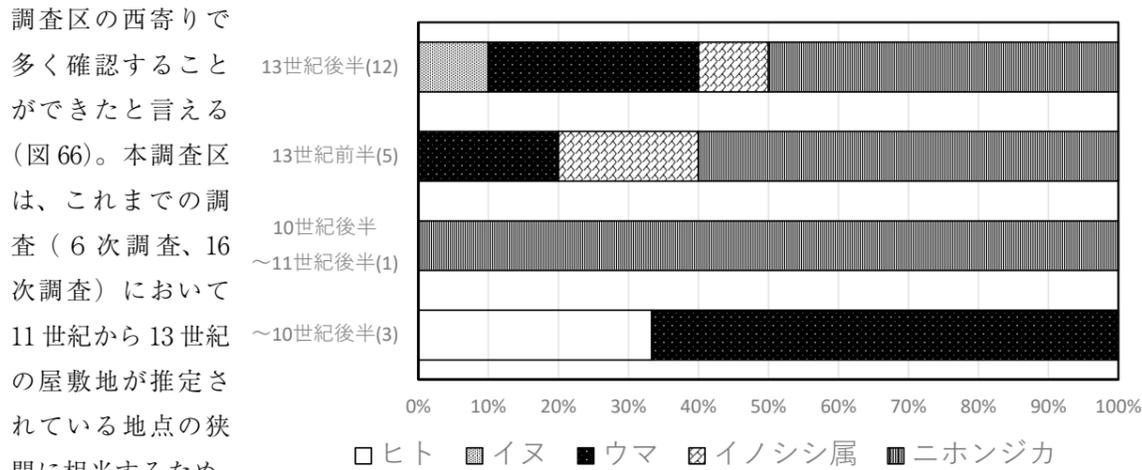


図64 動物遺存体 時期別出土相

不用になった資源を屋敷地内ではなく屋敷地の周縁部や溝に投棄した状況を確認できたと言えよう。

他の国府跡出土動物遺存体の特徴

他地域の国府跡においても動物遺存体が出土しており、それらの資料の概要を述べ、讃岐国府での資源利用について考察を深めてみたい。徳島市国府町に所在する観音寺遺跡は阿波国府の推定地とされ、ウシとウマを中心に約2800点の資料が出土している(西本 2007)。資料点数で最も多く確認された動物種はウマで、ウシも多く、上記2種で全体の6割を占める。その他にニホンジカもウマに次ぐ量が出土しており、イヌが多いのも特徴と言える。ウマが多く確認されたことおよび遺跡が阿波の国府と推定

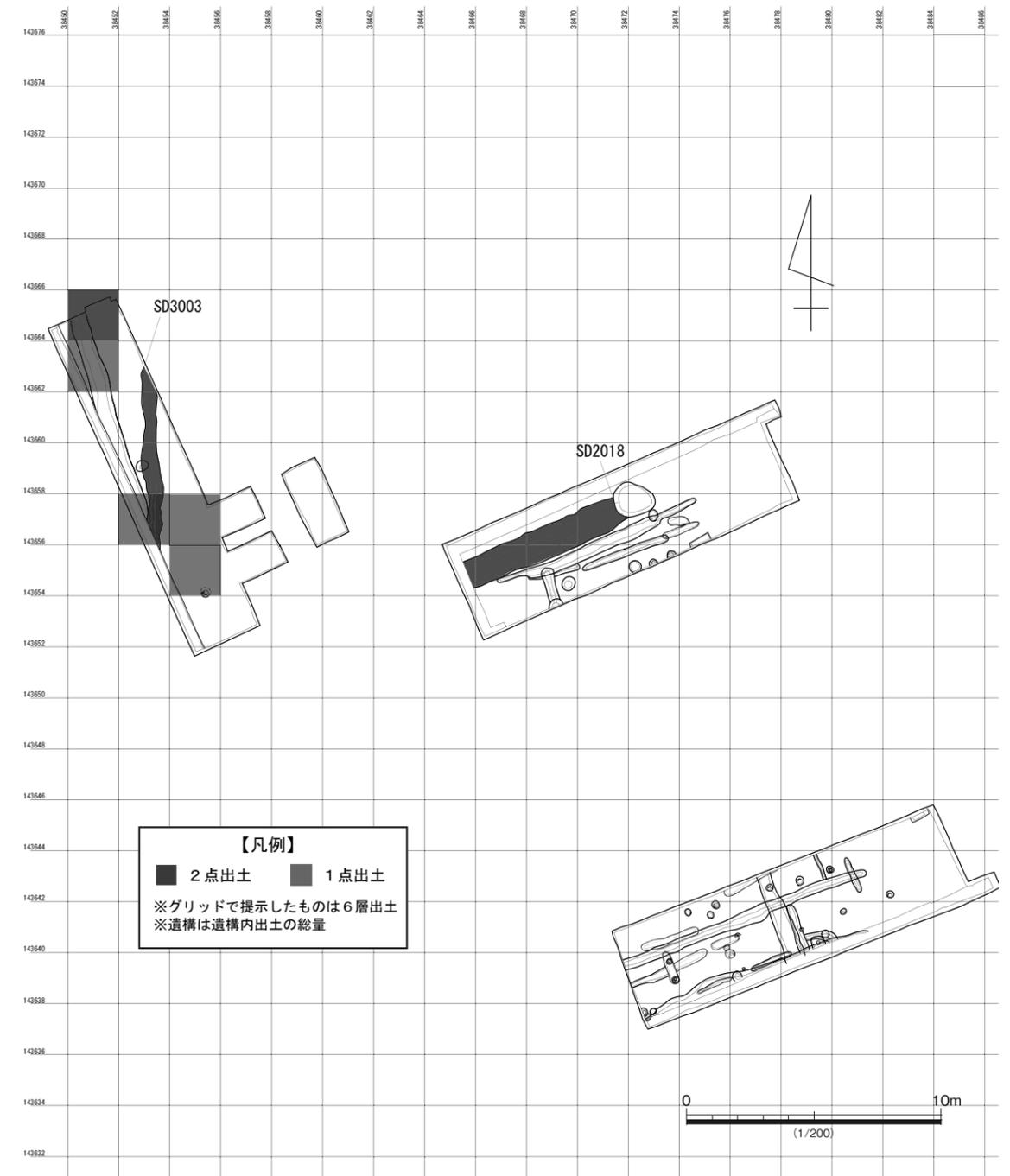


図65 37次調査 2面及び6層での動物遺存体出土位置と点数

されていることから、国府として軍馬を飼育していた可能性が指摘されている。イノシシもしくはブタはニホンジカと比較してかなり少なく、ネコ、アナグマ、タヌキ、ヒト資料も採集されている。次いでスッポンの背甲や腹甲が多く確認され、ガン・カモ類やニワトリを含むキジ類、サギ類などの鳥類も複数種確認されている。その他に魚類としてはブリ属、クロダイ属、マグロ属、貝類は殻皮のみが確認されている。また、出雲国府跡では、動物遺存体の出土量はわずかであるが、土坑から刀形代や斎申などの祭祀遺物と共伴してニホンジカが出土している(松井 2003)。部位は頭頂骨や後頭骨などの頭蓋骨と下顎骨の頭部のみで、部位が限定されるニホンジカも祭祀で用いられた可能性が指摘されている。

以上のように、出土量が大幅に異なるものの、ウマが最も多くニホンジカとイヌ、イノシシ属も認め

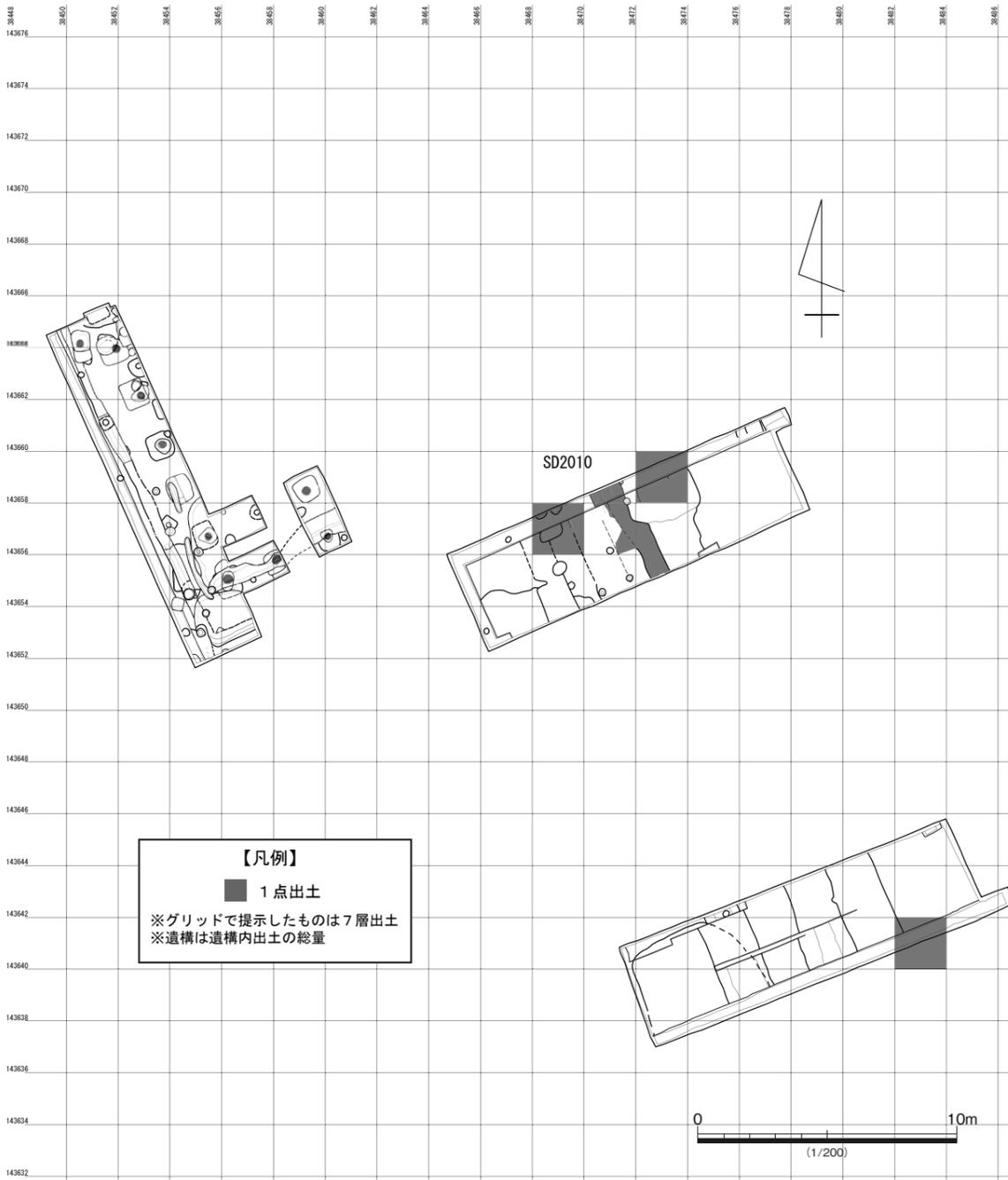


図 66 37 次調査 3 面及び 7 層での動物遺存体出土位置と点数

られる点で、讃岐国府跡の資料は観音寺遺跡の出土傾向と共通する特徴を示しているといえる。讃岐国府においてもウマやイヌが飼われ、ニホンジカやイノシシ属を食料資源として利用した状況を読み取ることができる。また、今後ウシやネコなどの哺乳類やスッポン、鳥類、魚類なども確認される可能性がある。

4 まとめ

以上のように、本調査において出土した動物遺存体は少量ではあったが、5種の哺乳類を確認することができた。注目される点としては、古代から中世前半における国府でのウマの利用、また中世前半になるとウマだけでなくニホンジカやイノシシ属が認められ、イヌの存在も確認できるなど、時期的な利用の変化も捉えることができた。ウマを中心にニホンジカも一定量認められる点は、阿波国府跡とも共通し、本遺跡資料においても国府での動物資源利用の特徴を大枠で捉えることができたと言える。これまでの讃岐国府跡の調査においてまとまって確認されていなかった動物遺存体の出土によって、国府や讃岐地域における古代から中世の動物資源利用の実態を読み取る上で、非常に有意義な成果を得ることができた。

また、それらの出土地点が屋敷地内ではなく、屋敷地の周縁や溝内、あるいは屋敷地間の狭間であったことから、国府での動物資源の投棄場所や狭間地の利用について知るための情報も得ることができた。

讃岐国府内での資源利用の実態をより明確にするためには、今後の調査において、建物跡などの施設だけでなくそれらの周縁にも注意を払い、さらに多くの動物遺存体が検出されることを期待する。

【参考・引用文献】

- 阿部永監修 2008『日本の哺乳類』(改訂2版) 東海大学出版会
- 遠藤秀紀・千石正一監修 2004『改訂新版 世界文化生物大図鑑 動物 哺乳類・爬虫類・両生類』世界文化社
- 香川県立ミュージアム 2017『讃岐びと、時代を動かす 展示図録』
- 信里芳紀・佐藤竜馬 2016『讃岐国府跡1』香川県教育委員会
- 茂原信生 1991「日本犬に見られる時代的形態変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集、国立歴史民俗博物館、89-107頁
- 西本豊弘 2007「観音寺遺跡の動物遺体」『観音寺遺跡IV道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書』第2分冊、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第71集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、203-219頁
- 松井章 2003「出雲国府跡5号土坑から出土した動物遺存体」『史跡出雲国府跡』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14、島根県教育委員会、175-177頁
- 松本和彦・信里芳紀・株式会社イビソク・須山貴史・齋藤努・日鉄住金テクノロジー(株) 2019『讃岐国府跡2』香川県教育委員会
- Driesch, Angela Von Den 1976 *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites*. Peabody Museum Bulletins 1, Peabody Museum Press, Cambridge

第2節 放射性炭素年代測定について

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也

1 はじめに

香川県坂出市の讃岐国府跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第3節）。

2 試料と方法

試料は、37-3 区の SP3023 から出土した柱（試料 No.1）と、SP3030 から出土した柱（試料 No.2）の、計 2 試料である。試料 No.1 は測定試料 3 点を採取してウィグルマッチングを行ない、試料 No.2 は単体で放射性炭素年代測定を行なった。なお、発掘調査所見によれば、SP3023 は 9 世紀代、SP3030 は 8 世紀前半の建物の柱穴と考えられている。測定試料の情報、調製データは表 3、4 のとおりである。

試料 No.1 の柱はヒノキで、年輪数は 70 年輪以上みられ、最終形成年輪が残っていなかったが辺材部は残っていた。測定試料は、外側から 1～5 年輪目 (PLD-41817)、外側から 31～35 年輪目 (PLD-41818)、外側から 66～70 年輪目 (PLD-41819) の 3 か所から採取した。

表3 ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ
PLD-41817	試料No. 1 調査区：37-3区 遺構：SP3023	採取位置：外側から1～5年輪目
PLD-41818	遺物No. P1113 種類：生材（ヒノキ） 試料の性状：辺材部 年輪数：70年以上	採取位置：外側から31～35年輪目
PLD-41819	器種：柱 状態：dry	採取位置：外側から66～70年輪目

表4 単体測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ
PLD-41820	試料No. 2 遺構：SP3030 調査区：37-3区 遺物No. P1115	種類：生材（コウヤマキ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 器種：柱 状態：dry

試料 No.2 の柱 (PLD-41820) はコウヤマキで、最終形成年輪は残っていなかった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

表 5 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代、ウィグルマッチング結果を、表 4 に単体試料の暦年代較正結果を、図 67 にウィグルマッチング結果を、図 68 に単体試料の暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代 (yrBP) の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、

表5 試料 No.1 の放射性炭素年代測定、暦年代較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年代較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-41817 試料No. 1 外側から1～5年輪目	-26.12 \pm 0.29	1270 \pm 20	1270 \pm 20	685-709 cal AD (26.80%) 712-743 cal AD (35.43%) 761-765 cal AD (4.59%) 772-773 cal AD (1.45%)	670-775 cal AD (94.00%) 792-797 cal AD (1.12%) 814-816 cal AD (0.33%)
PLD-41818 試料No. 1 外側から31～35年輪目	-25.76 \pm 0.25	1282 \pm 19	1280 \pm 20	678-706 cal AD (33.43%) 726-731 cal AD (4.53%) 736-750 cal AD (14.82%) 758-769 cal AD (12.62%) 771-773 cal AD (2.87%)	672-709 cal AD (39.03%) 711-774 cal AD (56.42%)
PLD-41819 試料No. 1 外側から66～70年輪目	-28.40 \pm 0.23	1264 \pm 19	1265 \pm 20	687-742 cal AD (65.22%) 762-764 cal AD (1.62%) 772-774 cal AD (1.43%)	673-754 cal AD (79.03%) 756-775 cal AD (11.30%) 791-802 cal AD (2.80%) 810-821 cal AD (2.33%)
最外試料年代				757-774 cal AD (65.29%) 793-795 cal AD (2.98%)	739-775 cal AD (81.87%) 790-803 cal AD (13.58%)
最外年輪年代				759-776 cal AD (65.29%) 795-797 cal AD (2.98%)	741-777 cal AD (81.87%) 792-805 cal AD (13.58%)

測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。なお、暦年代較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

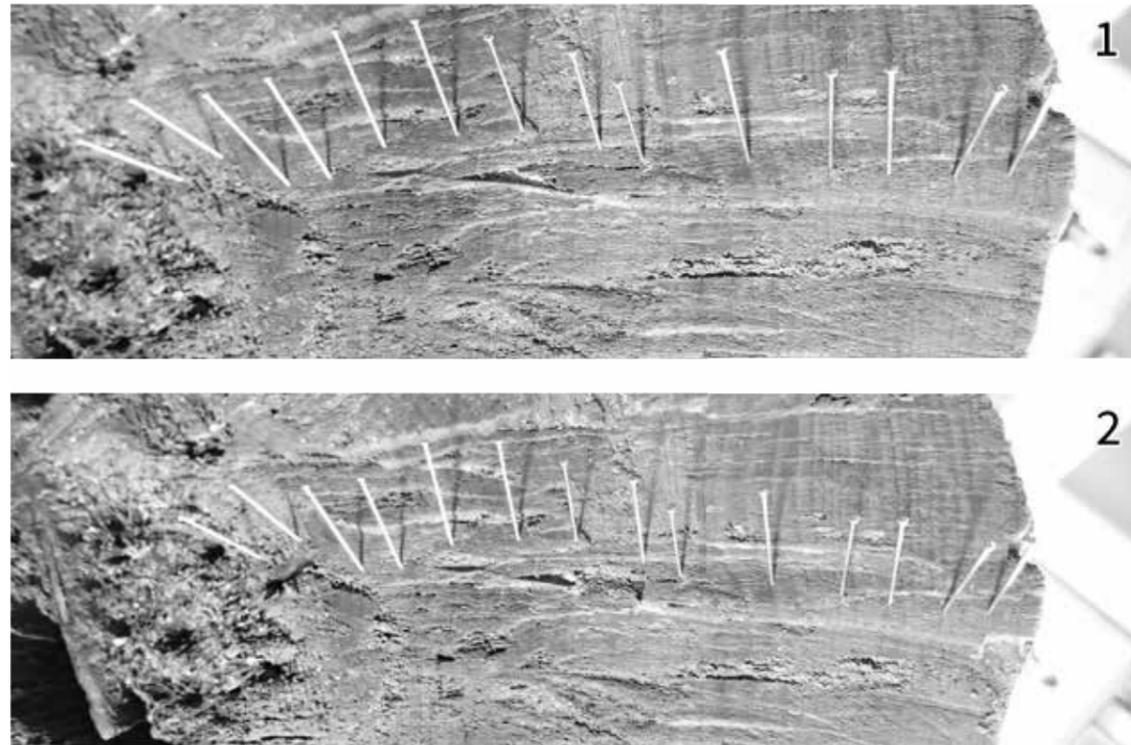
[暦年代較正]

暦年代較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 \pm 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年代較正には OxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて、試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1 年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年代較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、今回得られた最外試料の年代範囲は、最外試料としてまとめた 5 年輪分の中心の年代を表している。したがって、試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数 2 年（2.5 年を小数以下切り捨て）を考慮する必要がある。



4 考察

以下、2σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。

SP3023 の試料 No.1 (PLD-41817 ~ 41819) の最外年輪年代は、741-777 cal AD (81.87%) および 792-805 cal AD (13.58%) で、8 世紀中頃～9 世紀初頭の暦年代を示した。これは、奈良時代～平安時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側である程古い年代が得られる (古木効果)。試料 No.1 は、最終形成年輪は残っていないが辺材部が残っていたため、古木効果の影響を受けていてもわずかであると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果に近い年代と考えられる。

発掘調査所見によれば、SP3023 は 9 世紀代の建物の柱穴と考えられており、調査所見と測定結果は整合的である。

試料 No.2 (PLD-41820) は、431-554 cal AD (95.45%) で、5 世紀前半～6 世紀中頃の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期に相当する。なお、試料 No.2 は最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

発掘調査所見によれば、SP3030 は 8 世紀前半の建物の柱穴と考えられており、測定結果は調査所見よりも、150 ~ 320 年程古い暦年代を示した。古木効果の影響により古い暦年代を示した可能性や、5 世紀前半～6 世紀中頃に伐採され、使用されていた柱を 8 世紀前半に転用した可能性などが考えられる。

表6 単体測定試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C 年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-41820 試料No.2	-25.03 ± 0.23	1570 ± 19	1570 ± 20	436-463 cal AD (26.35%) 476-499 cal AD (24.10%) 510-515 cal AD (3.73%) 531-546 cal AD (14.09%)	431-554 cal AD (95.45%)

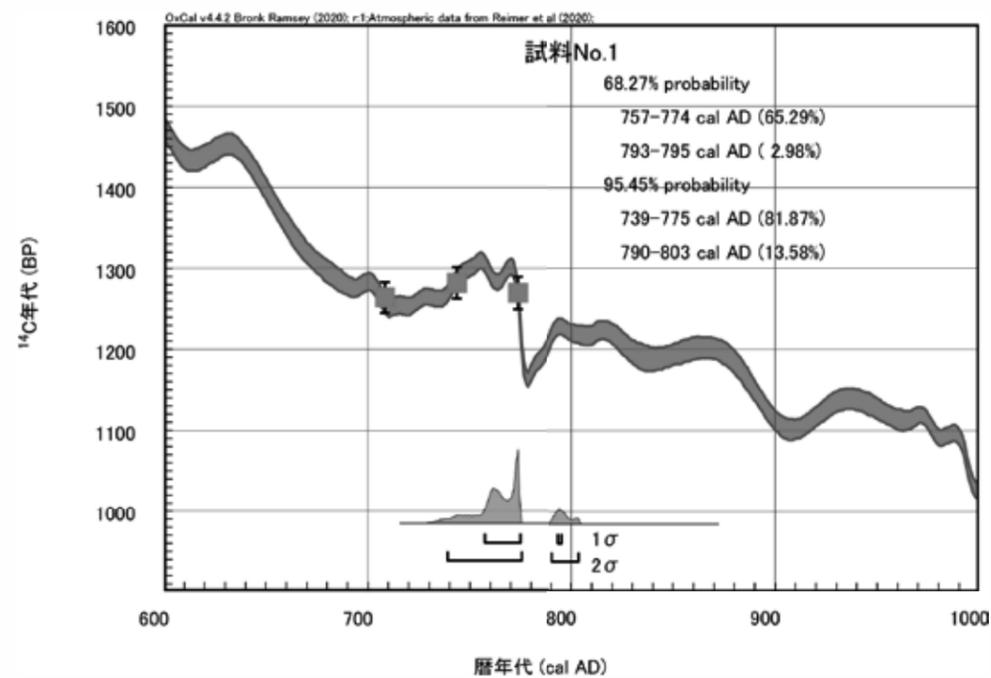


図 67 ウィグルマッチングを行った試料 (ピンの間隔は 5 年輪)

1. 試料 No.1 年輪計測結果

2. 試料 No.1 測定結果の試料採取位置 (PLD-41817 ~ 41819)

3. 試料 No.1 ウィグルマッチング結果図 1

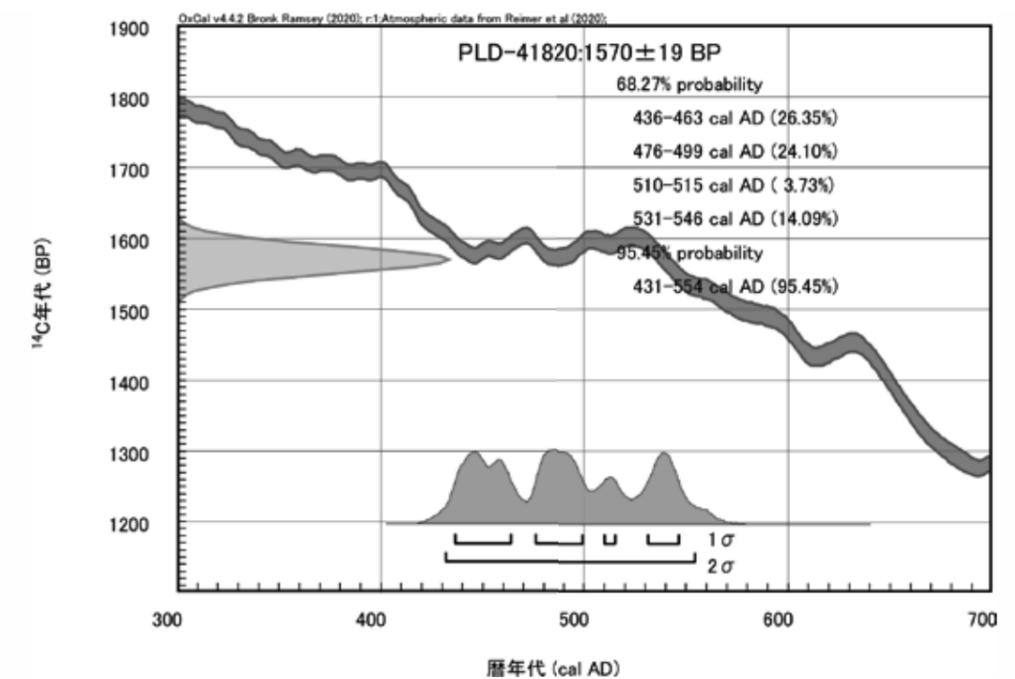


図 68 暦年較正結果

【参考文献】

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389.
 Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第3節 讃岐国府跡出土柱の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

香川県坂出市の讃岐国府跡から出土した柱の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第2節)。

2 試料と方法

試料は、37-3区の9世紀代の建物の柱穴であるSP3023および8世紀前半の建物の柱穴であるSP3030から出土した柱2点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、SP3030の柱は針葉樹のコウヤマキ、SP3023の柱は針葉樹のヒノキであった。同定結果

表7 讃岐国府跡出土柱の樹種同定結果

試料No.	調査区名	出土遺構	器種	樹種	木取り	時期	年代測定番号
樹種-1	37-3区	SP3023	柱	ヒノキ	芯持丸木	9世紀代	PLD-41817~41819
樹種-2	37-3区	SP3030	柱	コウヤマキ	割れ	8世紀前半	PLD-41820

を表7に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を示す。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図69 1a-1c(No.2)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~5列となる。分野壁孔は窓状となる。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図69 2a-2c(No.1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急

である。放射組織は単列で、高さ1~15列である。分野壁孔はトウヒ~ヒノキ型で、1分野に2個見られる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

4 考察

同定の結果、8世紀前半の建物の柱穴であるSP3030の柱はコウヤマキ、9世紀代の建物の柱穴であるSP3023の柱はヒノキであった。コウヤマキおよびヒノキは木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い。またコウヤマキは水湿に強いという性質を持つ(伊東ほか, 2011)。

香川県内で確認されている平安時代の柱の樹種はコウヤマキやヒノキが多く(伊東・山田編, 2012)、傾向は一致する。

【引用文献】

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌. 238p, 海青社.
 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.

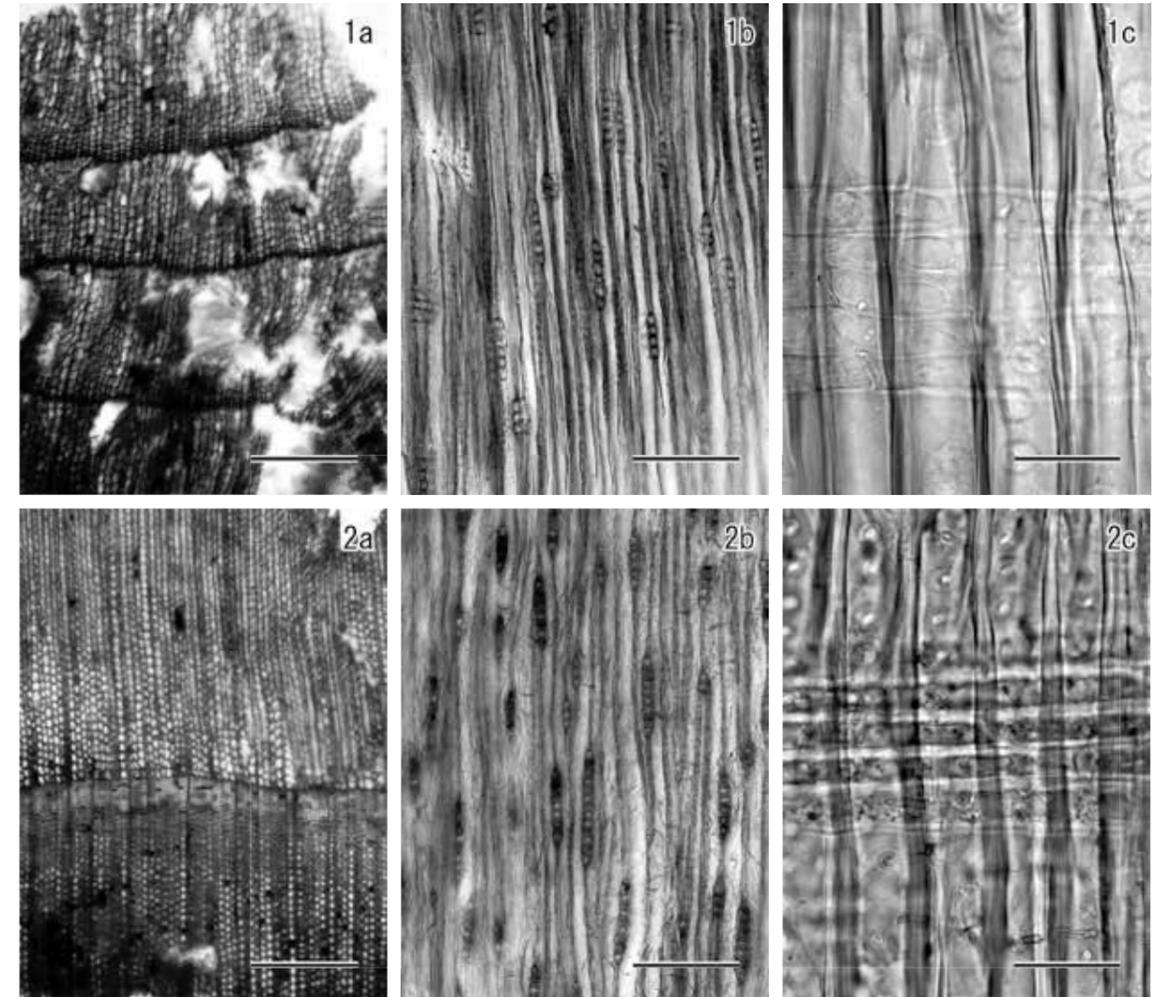


図69 讃岐国府跡出土柱の光学顕微鏡写真

1a-1c. コウヤマキ (No.2), 2a-2c. ヒノキ (No.1) a: 横断面 (スケール = 500 μm), b: 接線断面 (スケール = 200 μm), c: 放射断面 (スケール = 50 μm)

第4節 讃岐国府跡の花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

香川県坂出市に所在する讃岐国府跡では、遺跡周辺の古環境を検討するために堆積物が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

2 分析試料および方法

分析試料は、37-1区の8世紀前半に埋没した土坑(37-1区 SD1042)から採取された3試料(39層、40層、42層)と、36-2区の10~11世紀頃の遺物包含層から採取された2試料(32層、33層)、36-4区のSD4001の直上から採取された1試料の、計6試料である(表8)。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

表8 分析試料一覧

試料番号	調査区	層位	岩質	備考
花粉-1	37-1区	39層	黄灰色砂質シルト	9~10世紀に埋没した土坑
花粉-2		40層	褐灰色粘土	
花粉-3		42層	砂礫混じり褐灰色粘土	
花粉-4	36-2区	32層	暗青灰色粘土	10~11世紀頃の遺物包含層
花粉-5		33層	暗灰色粘土	
花粉-6	36-4区	SD4001直上	褐灰色砂質シルト	10世紀代に埋没した遺構の上面の層

試料(湿重量約4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、十分な量の花粉化石が含まれていない試料については、プレパラート1枚を検鏡するに留めた。また、保存状態の良い花粉を選んで単体標本(PLC.3135~3142)を作製し、写真を図70に掲載した。

3 結果

検鏡の結果、37-1区の39層と36-4区SD4001直上の試料からは、十分な量の花粉化石が得られなかった。6試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉24、草本花粉24、形態分類のシダ植物胞子1の、総計49である。これらの花粉・胞子の一覧表を表9に、分布図を図71に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

十分な量の花粉化石が得られた層準の樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの産出が目立つ。草本花粉では、イネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属などの産出が目立つ。さらには、栽培植物のソバ属も産出している。

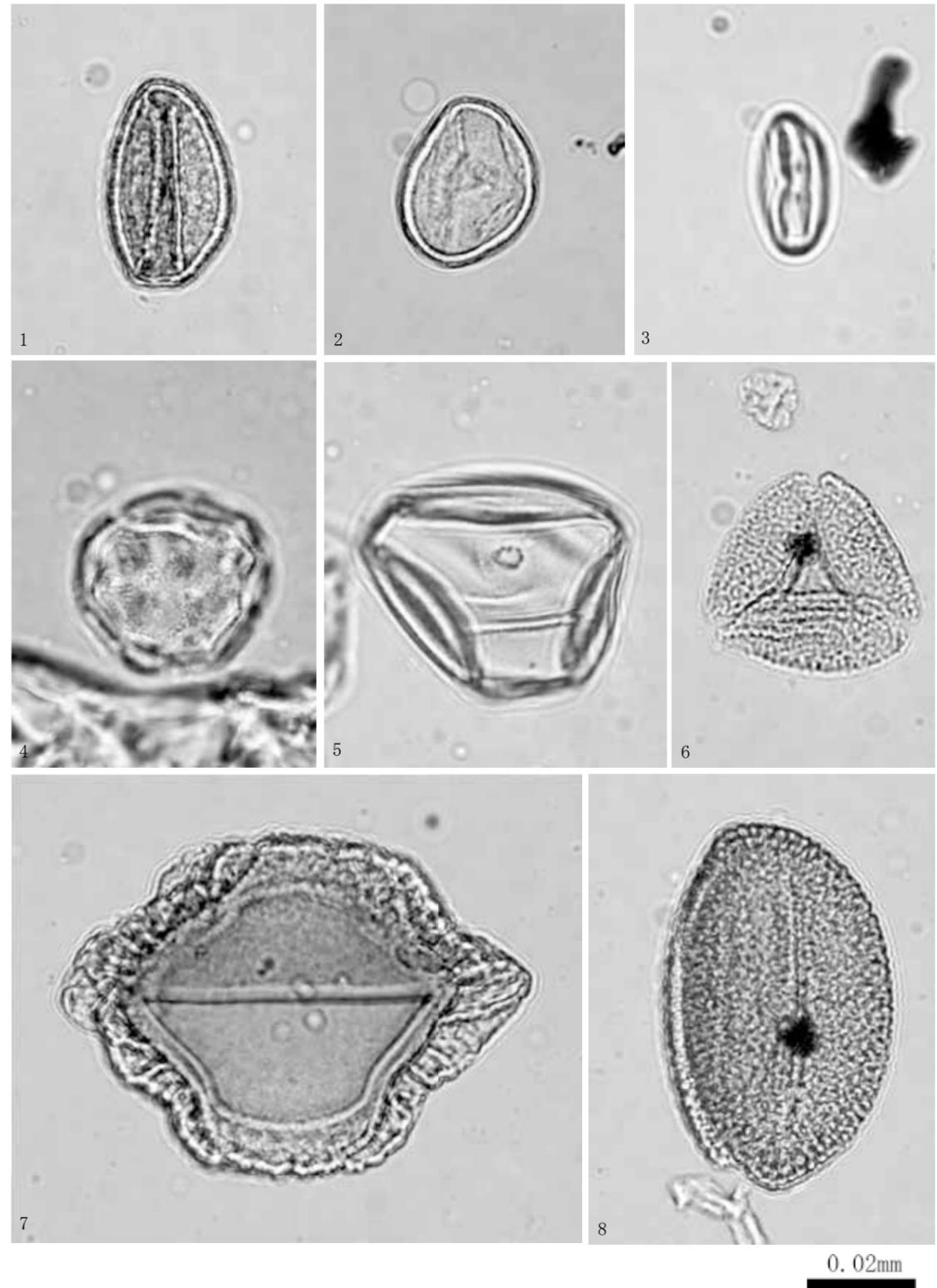


図70 産出した花粉化石

- 1. コナラ属コナラ亜属 (32層 PLC.3135)
- 2. コナラ属アカガシ亜属 (32層 PLC.3136)
- 3. クリ属 (32層 PLC.3137)
- 4. サジオモダカ属 (40層 PLC.3138)
- 5. イネ科 (40層 PLC.3139)
- 6. ガガブタ (32層 PLC.3140)
- 7. ヒシ属 (32層 PLC.3141)
- 8. ソバ属 (40層 PLC.3142)

4 考察

8世紀以降に埋没したとされるSD1042から採取された試料(40層、42層)では、マツ属複雑管束亜属やコナラ属コナラ亜属などの産出が目立ち、クリ属を伴っている。これらの分類群は、二次林要素の植物を含む分類群として知られているため、遺跡周辺の開けた明るい場所には、ニヨウマツ類やコナラ、クリなどから成る二次林が分布していた可能性がある。また、スギ属やコナラ属アカガシ亜属の産出も目立つため、遺跡周辺の山地や丘陵地などにはスギ林やカシ類からなる照葉樹林も分布していたと考えられる。草本花粉では、イネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属などが産出しており、土坑周辺にこれらの草本類が分布を広げていたと思われる。さらには、サジオモダカ属やイボクサ属、ミズアオイ属といった好湿性植物の産出も見られるため、土坑周辺には湿潤な環境の場所も存在した可能性がある。一方で、これらの分類群は水田雑草を含む分類群としても知られており、イネ科の産出と合わせて考えると、土坑周辺に水田が存在していた可能性がある。さらには、栽培植物のソバ属も産出しており、土坑周辺においてソバ栽培が行われていた可能性もある。ただし、古代の役所という遺跡の性質上、遺構のすぐそばに耕作地が存在していたのかは検討の余地があり、水田やソバ栽培については慎重な判断が必要である。

10～11世紀頃の遺物包含層(32層、33層)では、上記の遺構(40層、42層)と同じく、樹木花粉ではスギ属やマツ属複雑管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の産出が目立ち、草本花粉ではイネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属などの産出が目立つ。よって、遺跡周辺には10～11世紀代においても8世紀代前半と同様な古植生が広がっていたと考えられる。すなわち、遺跡周辺にはマツなどの二次林やスギ林、カシ類の照葉樹林などが分布しており、試料採取地点周辺にはイネ科やアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属などの草本類が生育していた可能性がある。ただし、32層では、オモダカ属やイボクサ属、ミズアオイ属、ガガブタ、ヒシ属といった好湿性植物が産出しているため、32層の堆積時には付近に湿潤な環境の場所が存在していたと考えられる。特にガガブタとヒシ属は水面に葉を浮かべる浮葉植物であるため、32層の堆積時は付近に水深のある水域が存在した可能性がある。

なお、十分な量の花粉化石が得られなかった2層準(37-1区の39層、36-4区のSD4001直上)には、砂礫が比較的多く含まれていた。砂礫を運ぶような営力が働き、堆積速度が速かったために花粉が堆積しにくい状況であったと推測される。

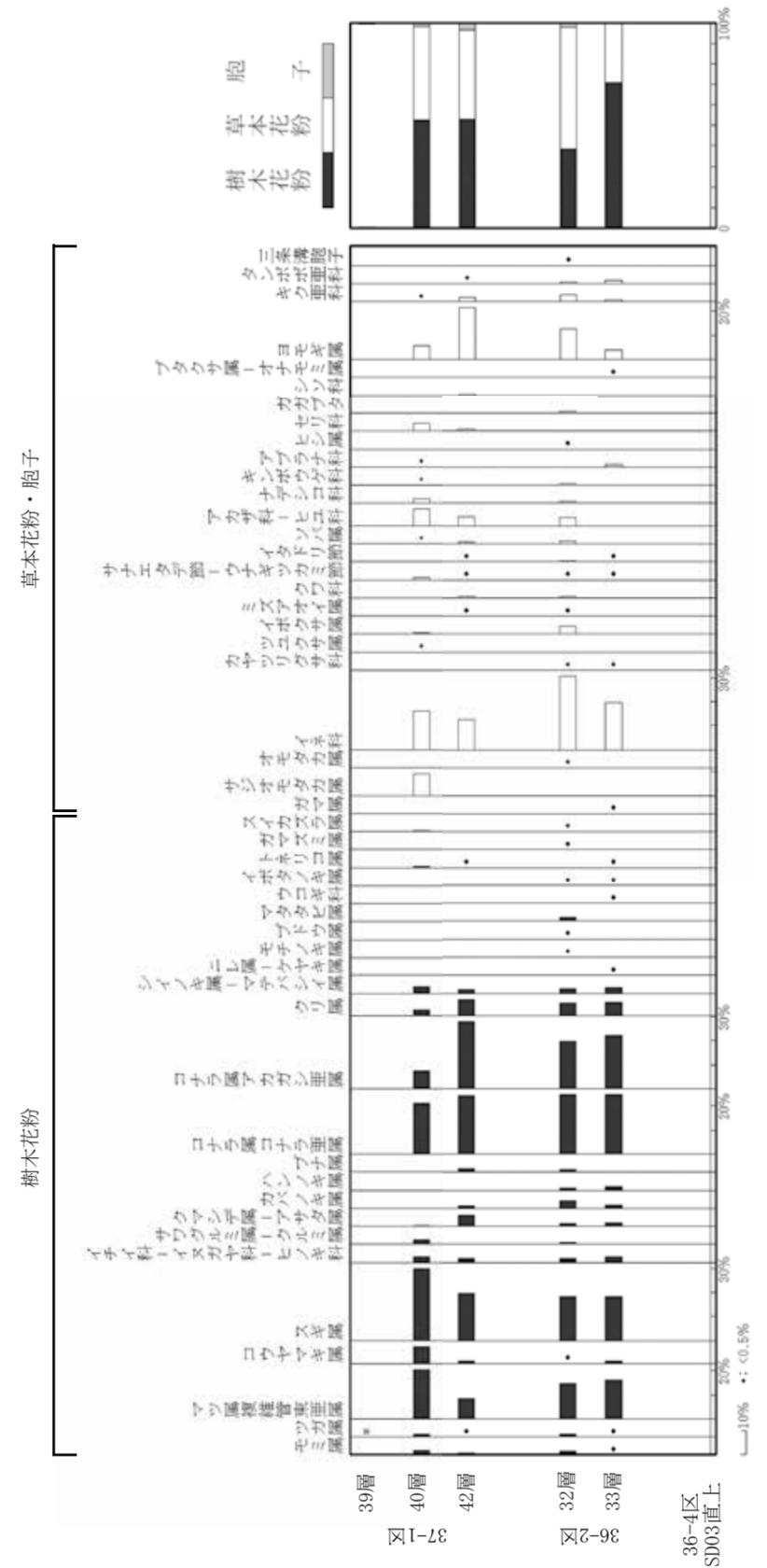


図 71 讃岐国府跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。*は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

表9 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	37-1区 SD1042			36-2区		36-4区
		39層	40層	42層	32層	33層	SD4001直上
樹木							
<i>Abies</i>	モミ属	-	4	2	3	1	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	2	1	2	1	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	-	41	17	30	33	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	14	2	1	2	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	60	40	37	37	-
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	5	3	3	5	-
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	4	-	2	-	-
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	-	1	9	2	3	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	2	6	3	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	-	2	3	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	-	3	2	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	-	42	49	50	50	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	15	56	40	45	-
<i>Castanea</i>	クリ属	-	5	14	11	12	-
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	5	3	4	5	-
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	1	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	1	-	-
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	1	-	-
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	-	-	-	3	-	-
Araliaceae	ウコギ科	-	-	-	-	1	-
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	-	-	1	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	1	1	-	1	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	-	-	1	-	-
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	-	1	-	1	-	-
草本							
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	-	1	-
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	-	34	-	-	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	-	-	1	-	-
Gramineae	イネ科	-	61	48	161	57	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	-	-	2	1	-
<i>Commelina</i>	ツユクサ属	-	1	-	-	-	-
<i>Aneilema</i>	イボクサ属	-	2	-	18	-	-
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	-	-	1	2	-	-
Moraceae	クワ科	-	-	3	3	-	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	3	1	1	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	-	-	1	3	1	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	1	3	5	-	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	-	26	15	18	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	7	-	4	-	-
Ranunculaceae	キンポウゲ科	-	1	-	3	-	-
Brassicaceae	アブラナ科	-	1	-	-	3	-
<i>Trapa</i>	ヒシ属	-	-	-	1	-	-
Apiaceae	セリ科	-	13	3	-	-	-
<i>Nymphoides indica</i>	ガガブタ	-	-	-	4	-	-
Labiatae	シソ科	-	-	2	-	-	-
<i>Ambrosia-Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	-	-	-	-	1	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	21	82	67	11	-
Tubuliflorae	キク亜科	-	1	7	15	2	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	-	1	4	4	-
シダ植物							
trilete type spore	三条溝孢子	-	-	-	1	-	-
Arboreal pollen	樹木花粉	1	200	202	203	204	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	-	172	167	312	82	-
Spores	シダ植物孢子	-	-	-	1	-	-
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	1	372	369	516	286	-
unknown	不明	-	7	13	11	2	-

第5節 考古学的所見との整合

考古学的な調査所見と、自然科学分析成果との整合について記す。

(第1節)

古代から中世にかけて、利用される動物種や用途、出土位置の変化があることが挙げられた。讃岐国府跡では、大型の柱穴を持つ古代的な建物によって構成される施設が点在している状況から、古代末や中世前半には、数十mの範囲に建物が集中する屋敷地状のまとまりがいくつも見られる状況に変化する。今回分析した地点は、それらの屋敷地の境界付近であり、屋敷地での動物利用をある程度反映したものである可能性が高い。

古代末～中世前半の遺構は、留守所の状態であった国府の実態を示す可能性が示されている(香川県教育委員会 2016 ほか)。これまで遺構や出土遺物、文献資料の記載からも指摘されていたこれらの変化の内容について、今回動物利用の観点からも変化が指摘でき、他の官衙の事例なども参考に、今後も資料の蓄積を行っていく必要がある。

(第2節～第3節)

37-3区のSP3030は、SB3001を構成する柱穴で、8世紀前半に比定できる(第3章)。遺構年代と相当乖離し、柱が古い年代を示すことは外表の年輪の分析が行えていないことを勘案しても解釈が難しい。遺構の年代についても、これ以上遡る可能性はかなり低い。

県内8世紀代の柱材の年代測定事例では、山下岡前遺跡(東かがわ市)、稲木北遺跡(善通寺市)で、同様に古い年代を示す。上記2遺跡は寺院跡、官衙遺跡である。一方SP3023の柱材については、8世紀後半の年代が示された。これらは、報告にある9世紀という遺構年代とも整合的である。

県内の官衙遺跡における柱材をはじめとした建築材の使用実態については、今後の資料の蓄積と比較検討した上で再度評価する必要があるが、古代において前代の木材を部分的ではあるが流用している可能性を、選択肢の一つに入れる必要がある。

なお、樹種については、2試料ともに異なる。

(第4節)

36-2区と37-1区で、古植生を示す要素は比較的類似し、大きな差異は見られない。花粉分析の示す植生は、いずれの調査区からも近い鼓岡神社の所在する丘陵等の植生を示している可能性が高い。2地点では堆積年代差もあるが、植生に関しては大きな変化が長期間なかったものと考えられる。

37-1区では栽培植物の可能性も示されているが、他の国府の事例でも、出雲国府跡では栽培植物の花粉が検出され、供物や国府域周辺の水田の存在が想定されている(島根県教育委員会 2003)。周辺の耕地の存在は否定できないが、讃岐国府跡はかなり限られた範囲に国府の施設を配置している状況が想定され、多くの耕作地は見込めないことから、分析者と同様、今後の状況を見ながら慎重に判断することが必要と考える。

また、36-2区の低地堆積物内の分析から、周囲に水深のある湿地が想定できるという指摘については、隣接した開法寺池、あるいは36-2区を含む範囲が低地帯2に含まれる可能性を補強しうるものである。

第5章 まとめ

第36次調査・第37次調査地点1・第38次調査地点の遺構の変遷や、国府にかかわる施設の展開状況について整理する。

1. 第36次調査

(1) 遺構の変遷

遺構は36-4、5区で確認され、8世紀～11世紀のものが中心となる。これらの遺構の形成前後も含めた調査地の変遷を整理すると、大きく下記の3つの段階に分けられる。

① 8世紀

36-4～6区では、調査区北端で平坦面が造られる。平坦面の造成は南側の丘陵（池ノ山丘陵）の斜面を削平する形で行われ、平坦面の縁辺をつなぐと、現在の丘陵の形状に類似する。この時期の遺構としてはSD5002やSD5003といった、丘陵の縁辺に合わせて開削された小規模な溝が挙げられる。これらの遺構は、8世紀後半を上限とし、それらの遺構形成以前に想定される平坦面の造成も、8世紀代に遡ると考えられる。

② 9世紀～11世紀

SP5004のような柱穴や溝が確認される。SP5004は10世紀代の遺構であるが、柱穴の掘削以前に置かれた盛土である灰白シルト層は、9世紀代の遺物を含むことから、10世紀以前の建物等を更新する形で整地が行われ、SP5004がつくられたと考えられる。また、SP5004の検出位置は、先行するSD5002やSD5003よりさらに南側の丘陵斜面に近い。9～11世紀にさらに丘陵側へ遺構が展開した可能性を示唆する¹⁾。

出土遺物は、瓦、施釉陶器、転用硯等、官衙に多く見られる遺物を一定量含んでおり、その傾向は東側に所在する開法寺東方地区の出土遺物と程度の差はあるものの類似している。

③ 11世紀後半～

36-4～6区では遺構面がF層とした造成土により埋没する。36-1～3区でも厚い包含層（B層）が確認されF層に近い時期のものと考えられるが、こちらは造成土ではなく、自然に堆積した層である可能性が高い。いずれも埋没は古代末～中世前半に比定できる。開法寺東方地区及び開法寺地区の北限付近に流れる低地帯2は古代末までに埋没し、上面からの遺構形成がなされることが想定されており（香川県教育委員会 2016）これらの状況と第36次調査での遺構面の埋没は連動しているといえる。

遺構面の埋没後の開法寺池周辺は、主に耕作地としての土地利用が行われたと考えられ、それに伴う造成土も複数段階確認された。

(2) 讃岐国府跡の広がり の把握

第36次調査では、これまで開法寺池以西では確認されていなかった讃岐国府跡に関連する遺構が、開法寺池の所在する谷筋まで及ぶことが明らかとなった。断片的な確認であり、最も西に設定した36-6区でも平坦面が形成されたことを考えると、さらに西側や丘陵上にも遺構が広がる可能性がある。

また、調査によって確認された遺構・遺物の時期をみると、9世紀～11世紀に盛期を確認することができる。施釉陶器、瓦や転用硯、生産に係る遺物等が確認され、これらの変遷や遺物内容は、開法寺

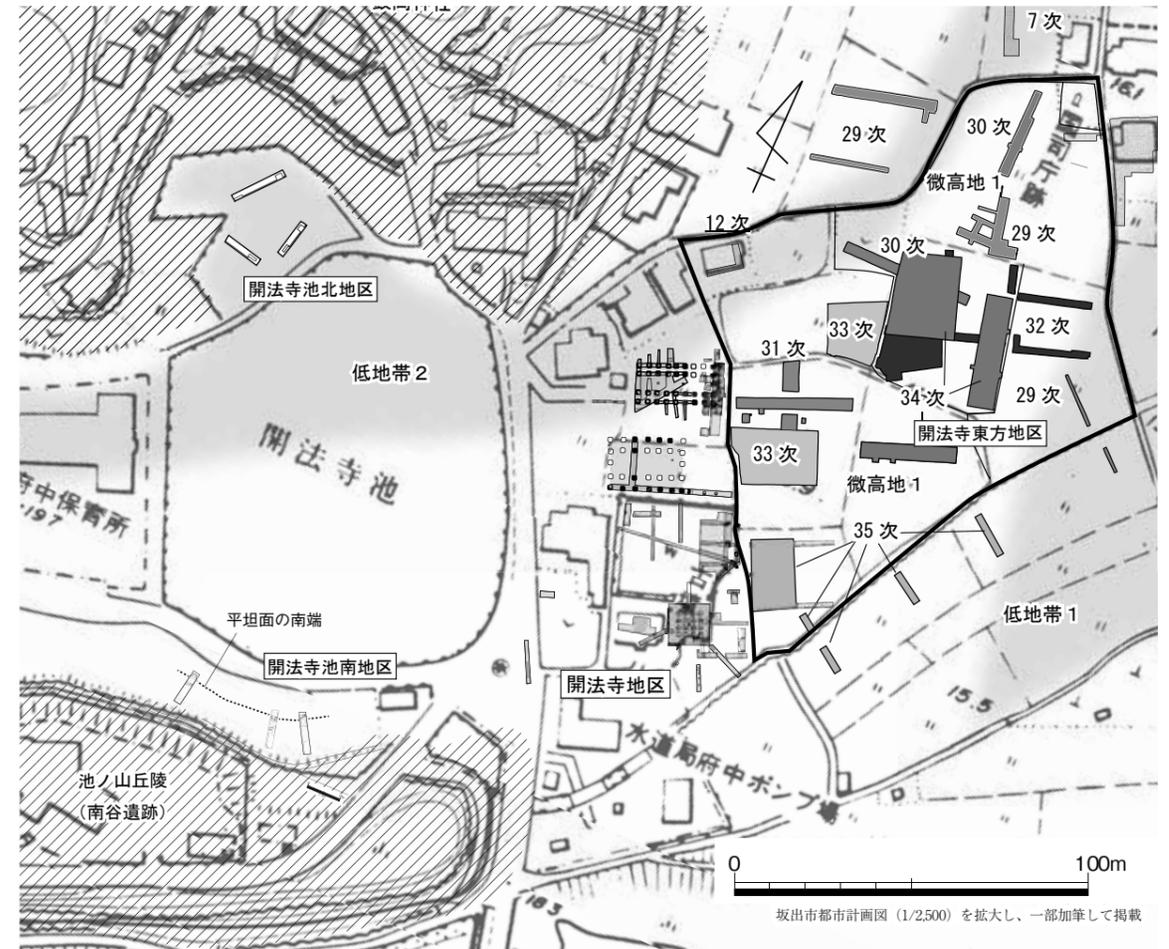


図72 第36次調査地点及び周辺の状況

東方地区と遺構の盛衰や遺物の特徴が類似している。

開法寺東方地区等の国府の施設が、盛期を迎える中で周辺エリアへとその範囲を拡大させていった状況を、遺構・遺物から想定することができる。

2. 第37次調査

地点2は、第3章でその変遷や特徴について整理したため、ここでは地点1の遺構変遷を、古代の遺構を中心に整理する。

① 7世紀後半

遺構はほとんど確認できず、37-3区において、SP3042等の正方位を指向する遺構が数基確認できる程度である。この時期に比定できる遺物も少ない。

② 8世紀前半

37-3区において、SB3001が確認される。その他の調査区では当該期の遺構は確認されていないため、建物群を区画する施設の実態は不明であるが、37-1区SD1043や37-2区SD2037のような地形の落ちの形成は、この時期までさかのぼる可能性がある。

③ 8世紀後半～9世紀前半

SB3002、3003のように、SB3001に後続する建物が少し位置を違って作られる。37-1区と37-2区では、遺構の切り合いからSD1042やSX2033がこの時期までさかのぼる可能性がある。なお、地形の落ちは依然として存在していた可能性が高い。

④ 9世紀後半～10世紀前半

SD1038やSD1041、SD2010等の施設を画する溝が開削される。当該期の建物は復元できないが、前段階の柱穴に後出する柱穴は認められるため、配置を変え、建物は継続していたものと考えられる。SP3048のように、礎石状の石材を用いた遺構も確認される。地点1の北西部に位置する第6次調査で検出されたSB79001のような円形柱穴で構成される建物や礎石建物が存在した可能性も想定される。

⑤ 10世紀後半～11世紀前半

古代的な建物を有する施設の廃絶期に当たる。遺構は、SD3010等の土器溜り状の遺構が37-3区南半を中心に出検される。この時期には37-1、2区で検出されていた溝や地形の落ちも埋没が進み、施設の内容や周辺も含めた地形状況に変化が生じたものと考えられる。調査地点より南側の第2次調査でも、段差部分の埋没は複数段階あり、埋没の最終段階は11世紀～12世紀とされている(香川県教育委員会2016)。これらと連動する形で、地点1の落ちの部分は段階的に埋没していった可能性が高い。

3面を被覆する7層も、この段階の直後あるいはその最中に堆積した可能性が高く、その後11世紀～13世紀の遺構が形成される(2面)。なお、②～⑤の遺構の変遷を図73に示した。

以上の変遷を踏まえると、37次調査地点1では、8世紀～10世紀の建物やそれを区画する地形、あるいは区画施設が存在している。また、第6次調査地との遺構面の連続性から、施設は従来の想定より北側に伸びる可能性が高く、低地帯3の推定地を含み南北に広がる施設の存在が推定される。

3. 第38次調査

(1) 遺構の変遷

第38次調査は、調査の概要のみを示しており、出土遺物の検討に基づいた詳細な年代については今後検討を行う必要があるが、大半の遺構が中世以降のものである。

古代の遺構は、38-1区のSB1003やSD1005がその可能性を残すが、出土遺物からその年代を絞り込むことは難しい。特に第37次調査や、調査地点選定の理由の一つとなった第18次調査で検出された8世紀代の柱穴と同時期のものである可能性は低い。SD1005を除くと、古代の遺構は、調査地の東端付近に存在することから、SB1003を含む調査地東側以東に古代の遺構が展開することが想定される。

中世以降の遺構は複数の段階に分かれる。遺構の下限は近世まで下り、その後包含層が堆積する。中世でも長期間にわたって遺構形成がなされている地点は、讃岐国府跡でもあまり見られない。

調査地では南側が、より安定する地形となるといったように起伏が存在するが、それらは複数回の整地や削平といった地形改変を経て平坦化され、後に遺構が形成されている。

(2) 国府の主要施設の一つの把握

第37・38次調査は、いずれも従来想定されていた国府の施設(香川県2016・2019では単位④、⑤と呼称)について把握することを調査の主目的とした。結果としては、東限には古代より存在していた地形の落

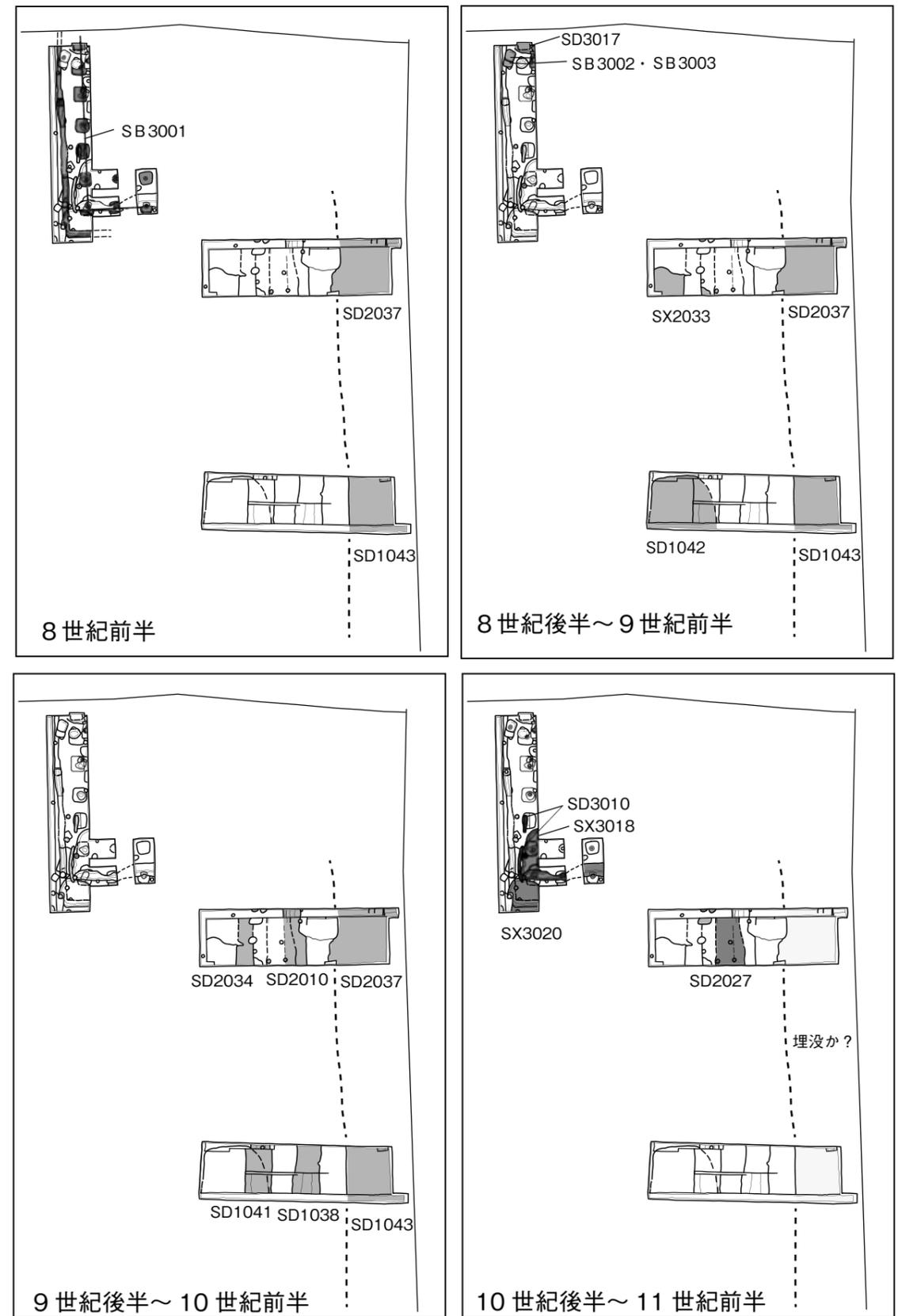


図73 第37次調査 地点1遺構変遷

ちと溝群が検出でき、西限は第38次調査での希薄な古代の遺構状況と、既往の調査で見つかった8世紀代の柱穴(第18次調査 SP05)によりおよその絞り込みを行うことができた。従来はこの二箇所を含む範囲内に2つの施設を想定していたが、第6次調査・第18次調査で検出された古代の柱穴の規模や柱穴間距離が37-3区SB3001と類似すること、低地帯3の範囲を越える形で古代の遺構の展開が確認できることから、少なくとも8世紀の段階では地形面が継続する範囲(図74の点線の範囲)の中で、再度施設の内容をとらえ直す必要がある²⁾。仮にこの範囲で施設が展開するのであれば、専有面積は一辺70mを超える範囲となり、讃岐国府跡でも主要な施設の一つになる可能性が高い。

施設内の建物については、第6次調査SB79001や第37次調査SB3001等、床束を持つ建物が目立つが、それらの配置や詳細な構造の復元は現段階で難しく、今後の課題となる³⁾。また、現段階で把握している遺構状況から、施設の性格について評価を行うことは難しいが、第6次調査のSB79001や第18次調査で確認された柱穴(SP05)の年代は、いずれも8世紀前半を下限とし、第37次調査SB3001の年代と近い。これらを同一時期の建物と見なせば、中央付近の状況はなお不明であるが、8世紀前半には、コの字あるいは口の字状に建物が配置される官衙的な性格の施設を想定することもできる⁴⁾。

また、遺物の出土傾向では、8世紀～10世紀までの時期幅でとらえられるが、転用硯も含めた陶硯

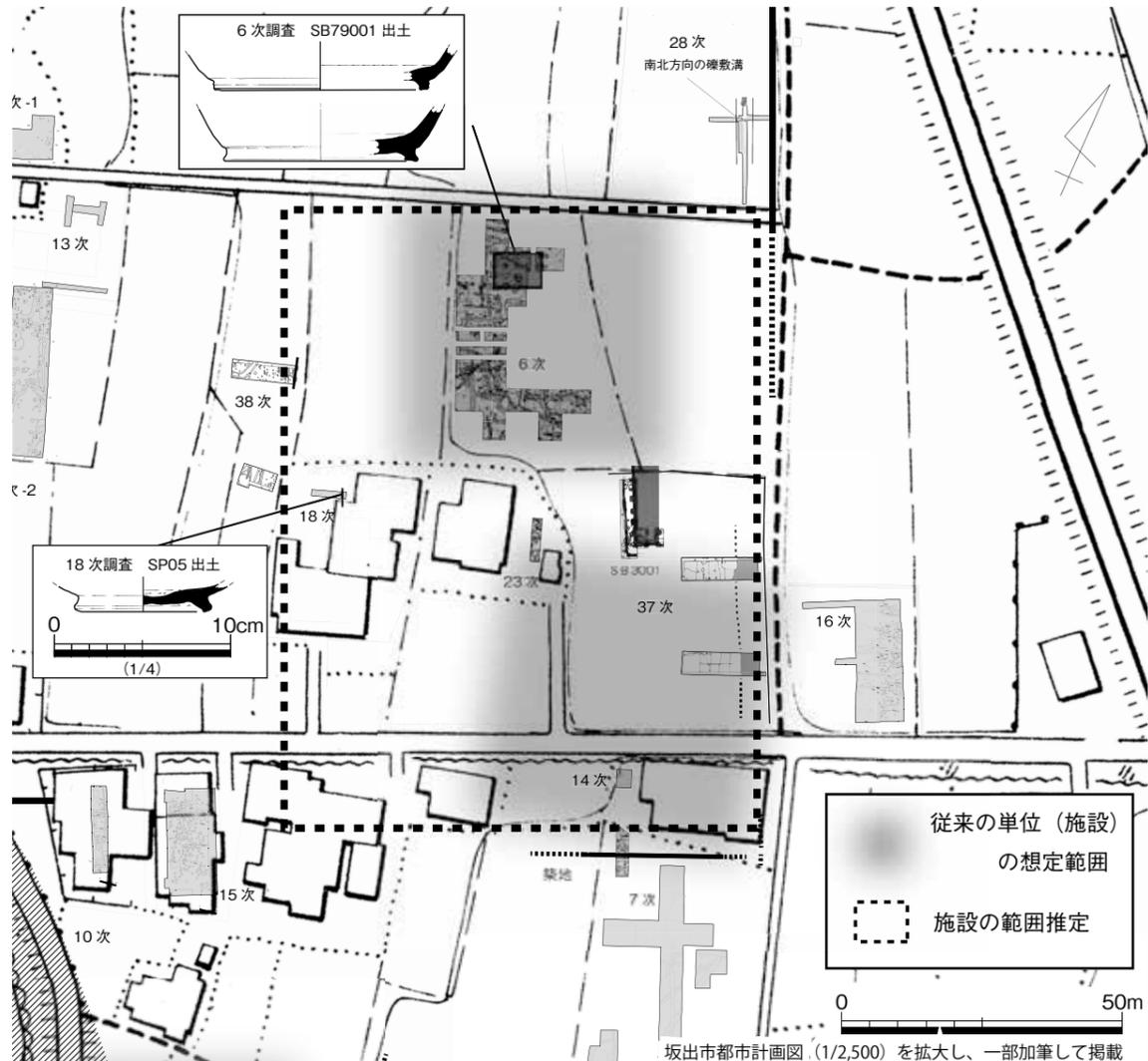


図74 37・38次調査地点周辺の古代遺構

が比較的目立ち、今回報告したものに限っても18点確認された。第6次調査でも、10点近くの出土が確認されており(香川県教育委員会2016)推定した範囲では比較的陶硯が集中する傾向にある⁵⁾。それに対して施釉陶器や、軒瓦の出土量は開法寺東方地区などと比べてもさほど多くない。ただし、出土した軒先瓦については、軒平瓦はすべてKF201型式、軒丸瓦については、これまで讃岐国府跡で出土していない型式で、10世紀以降に下る可能性が高いといった傾向がある。

これらの遺物の出土傾向が、施設の性格に起因するものかは、今後の周辺の調査や既往の調査成果の点検も踏まえて評価を行う必要があるが、いずれにせよ異なった特徴を持つ施設が展開する可能性は高く、遺構の状況も合わせながら、周辺施設との比較を行っていくことが必要となるであろう。

4. 今後の課題

平成30年度から令和2年度の発掘調査によって、讃岐国府跡の施設の広がりが見明らかとなった(第36次調査、第37次調査地点2)ほか、国府の主要な施設として考えられていた範囲の東辺の区画状況及び、内部の遺構の変遷について知ることができた(第37次調査地点1、第38次調査)。

今後は、絞り込まれた範囲内の遺構の状況や変遷について把握していく必要があるとともに、既往の調査成果もあわせ、遺構・遺物の特徴を再検討していくことも必要である。

また、第36次調査や第37次調査の地点2の成果を参考にすると、従来の周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されていた讃岐国府跡の範囲についても、さらに拡大する可能性を想定すべきであり、讃岐国府跡の広がりについて確認するための継続的な調査も必要である。

【註】

- 1) 池ノ山丘陵上の南谷遺跡では、尾根の縁辺部に位置する溝状遺構(報告ではSXと表記)が確認される(香川県教育委員会1989)。出土遺物には、中世以降のものを含むが、古代の瓦・須恵器も一定量含まれ、これらの資料からも、丘陵上も含めた形で谷筋の開発が広く行われていた可能性が考えられる。
- 2) 範囲の北辺については、確たる証拠は得られていないが、28次調査での古代の遺構面が、6次調査や37次調査での遺構面の標高より0.5m程低い位置で確認されることから、暫定的に現在の地境付近を北辺としている。南辺については、7次調査で確認された築地(香川県教育委員会2016)の周辺を南辺と捉える。7次調査地の南端では、低地帯2が所在し、地形的に下がる状況が確認されており、地形と施設から、南辺を設定している。
- 3) 床束柱を持つ総柱建物を持つ施設として、郡衙等に多く見られる正倉群が挙げられる。正倉の層柱建物の規模は、全国的に見ても3×4間や3×3間が多数であり(松村1983)、37次調査で見られるような桁行が5間を超えるものは少ない。しかし、各地の正倉の中に、1棟あるいは数棟規模の大きなものが存在する例もあり、それらを法倉とみる意見もある(大橋編2012)。そのほかにも、国庁域に総柱建物を備える例も存在する(常陸国庁)ほか、政庁の脇殿に床束を持つ建物も存在する(肥前国庁)など、国府に関連する総柱構造や床束柱を持つ建物の性格については、複数の可能性が考えられ、現段階での性格の特定は難しい。
- 4) 6次調査の報告では、8世紀代の建物の柱穴内に、礎石の存在が確認できる状況もふまえ、礎石と柱穴を併用する改築の段階を想定している(香川県教育委員会2016)ほか、後出する建物(SB79002)は、3×8間の規模を持つ。37次調査でも、配置を少し変え建物が見られるため、各時期の建物配置は異なる可能性があり、それらを念頭に置いた整理が必要となる。
- 5) 開法寺東方地区の調査では、計104点の陶硯の出土が確認された(香川県教育委員会2019)。今回調査地とは発掘調査面積も検出遺構の内容も大きく異なるため単純な比較は難しいが、そういった主要施設に匹敵する出土量を持つ。

【参考文献】

- (発掘調査報告書等)
- 香川県教育委員会1982『国庫補助による国府跡確認調査概要 讃岐国府跡』
 香川県教育委員会1989「昭和61年度」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度～昭和62年度』
 香川県教育委員会2016『讃岐国府跡1』
 香川県教育委員会2019『讃岐国府跡2』
 香川県教育委員会2011『平成22年度香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』
 香川県埋蔵文化財センター2013『平成23・24年度 香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』
 香川県埋蔵文化財センター2014『平成25年度 香川県内遺跡発掘調査 讃岐国府跡発掘調査概報』

讃岐国府跡3（香川県教育委員会 2021）

香川県埋蔵文化財センター 2013『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 24 年度』香川県埋蔵文化財センター 2014『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 25 年度』香川県埋蔵文化財センター 2016『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』香川県埋蔵文化財センター 2017『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 27 年度』香川県埋蔵文化財センター 2018『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 28 年度』香川県埋蔵文化財センター 2019『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 29 年度』香川県教育委員会 1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会 2002『小谷窯跡・塚谷古墳』香川県埋蔵文化財調査センター 2008『稲木北遺跡・永井北遺跡・小塚遺跡』香川県教育委員会 2019『岸の上遺跡Ⅰ』坂出市教育委員会 1992『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成3年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 1993『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成4年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 1995『坂出市内遺跡詳細分布調査報告 平成6年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 2002『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 2003『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 2004『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 2011『上氏部無線中継所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 本鴨遺跡』坂出市教育委員会 2020『開法寺跡Ⅰ』高根県教育委員会 2003『史跡 出雲国府跡1』高松市教育委員会 2007『高松市埋蔵文化財調査報告 107：屋島寺』高松市教育委員会兵庫県教育委員会 2001『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』香川県 1987『香川県史』第13巻 考古編坂出市 2018『坂出市史』資料補遺 考古編

（参考文献）

阿部義平 1989『官衙』ニューサイエンス社

海野聡 2018「地方官衙政庁域の建築の格式と荘厳性―国庁・郡庁正殿・国分寺金堂の比較から―」『地方官衙政庁域の変遷と特質』

第21回 古代官衙・集落研究会報告書

江口 桂編 2014『考古調査ハンドブック 11 古代官衙』ニューサイエンス社

大久保徹也 2018「国府以前のこと 綾北平野における大型石室墳の築造動向とその評価」『徳島文理大学比較文化研究所年報』第34号

大橋康夫 2009「国郡制と地方官衙の成立－国府成立を中心に－」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所

大橋泰夫編 2012『古代日本における法倉の研究』平成2 1～2 3年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書

尾上実 1993「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

香川県立ミュージアム 2019『讃岐びと 時代を動かす―地方豪族がみた古代世界―』

木下良 1977「国府の十字街について」『歴史地理学会紀要』19

金田章裕 1995「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』63集

国立歴史民俗博物館 1986『共同研究「古代国府の研究」』国立歴史民俗博物館研究報告 第10集

国立歴史民俗博物館 1989『共同研究「古代国府の研究」（続）』国立歴史民俗博物館研究報告 第20集

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室 開設四拾周年記念 考古学論叢』関西大学

佐藤竜馬 1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に』

古代学協会四国支部

佐藤竜馬 2016「Ⅳ 調査研究 讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）」『香川県埋蔵文化財センター年報』香川県埋蔵文化財センター

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港地

遺跡Ⅳ』香川県教育委員会

条里制・古代都市研究会 2009『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会

高橋照彦 1995『緑釉陶器』『概説中世の土器・陶磁器』新陽社

長井博志 2006「稲木北遺跡と古代の多度郡」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』

奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡 Ⅰ 遺構編』

奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡 Ⅱ 遺物・遺跡編』

乗岡 実 2002「第Ⅴ章 第3節 近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会

文化庁文化財部記念物課 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社

間壁忠彦 1990『備前焼』考古学ライブラリ 60 ニューサイエンス社

松村恵司 1983『古代稲倉をめぐる諸問題』『文化財論叢』同朋舎

山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』新陽社

山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

渡部明夫 1983「讃岐国府跡の発掘調査とその問題点」『香川史学』第12号

遺物観察表

土器・土製品観察表

番号	地区	出土遺構	種類	器種	調整		色調		法量（c m）		備考	
					外面	内面	外部	内部	口径（c m）	器高（c m）		底径（c m）
1	36-23区	遺構外	須恵器	杯	ナデ	マメツ	N5/ 灰	N5/ 灰	3.6	3.2	-	火樺あり
2	36-1区	遺構外	須恵器	壺？	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	5Y6/1 灰	(17.4)	-	-	
3	36-2区	遺構外	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	10YR4/3 におい黄褐	10YR6/1 褐灰	(19.2)	6.8	12.4	
4	36-1-3区	遺構外	須恵器	鉢	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	10Y6/1 灰	(20.2)	-	-	籬産
8	36-4区	灰褐色シルト層	土師質土器	足釜	ナデ	-	2.5Y8/2 灰白	-	7.4	2.2	-	
9	36-4区	灰褐色シルト層	緑釉陶器	碗	ナデ	ナデ	2.5GY7/1 明オリーブ灰	5Y5/1 灰	-	-	-	畿内産
10	36-4区	灰褐色シルト層	須恵器	皿	ナデ	ナデ	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰	(17.8)	-	-	
11	36-4区	灰褐色シルト層	須恵器	碗	施釉、ケズリ出高台、ナデ	施釉、ナデ	7.5Y5/2 灰オリーブ	10Y6/2 オリーブ灰	-	-	(5.9)	
12	36-4区	灰褐色シルト層	土師質土器	甌	ハケ目	指オサエ、板ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 におい橙	(20.7)	-	-	
13	36-4区	灰褐色シルト層	土師質土器	羽釜	ハケ目、ナデ	板ナデ、ナデ	10YR4/3 におい黄褐	10YR7/6 明黄褐	(23.6)	-	-	
14	36-4区	褐灰色シルト層	緑釉陶器	皿	ナデ、施釉	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	
15	36-5区	褐灰色シルト層	土師質土器	皿	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	10YR5/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	-	-	(6.8)	
16	36-4区	褐灰色シルト層	土師質土器	杯	ナデ、底部ヘラ切後ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	(11.0)	2.4	(6.4)	
17	36-5区	褐灰色シルト層	土師質土器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/3 におい黄橙	-	-	(3.4)	
18	36-4区	褐灰色シルト層	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	11.4	3.6	6.9	
19	36-4区	褐灰色シルト層	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	(10.0)	
20	36-4区	褐灰色シルト層	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	(7.2)	
21	36-4区	褐灰色シルト層	須恵器	皿	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	(22.0)	2.4	(16.3)	
28	36-4区	SD4001 直上	土師質土器	碗	回転ナデ、ナデ	マメツにより不明	5YR7/6 橙	10YR7/3 におい黄橙	-	-	(6.8)	
29	36-4区	SD4001 直上	土師質土器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5YR7/6 橙	10YR8/2 灰白	(14.3)	3.7	(7.6)	
30	36-4区	SD4001 直上	須恵器	皿	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	(14.0)	1.8	(10.8)	
31	36-4区	SD4001 直上	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	(10.0)	
32	36-4区	SD4001 直上	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	
33	36-4区	SD4001 直上	土師質土器	鍋	指オサエ、板ナデ	-	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	-	-	-	
37	36-4区	SD4001	土師質土器	碗	マメツ	マメツ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	-	-	(8.5)	
38	36-4区	SD4001	須恵器	蓋	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	N7/ 灰白	N5/ 灰	-	-	-	転用碗
39	36-4区	SD4001	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ後ナデ	N8/ 灰白	N6/ 灰	-	-	(18.8)	
40	36-4区	SD4001	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	(13.6)	4.4	(8.4)	
41	36-4区	SD4001	須恵器	杯？	回転ナデ	回転ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	(15.8)	-	-	
42	36-4区	SD4001	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	(13.0)	-	-	
43	36-4区	SD4001	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	(8.4)	
44	36-4区	SD4001	須恵器	碗	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	(18.0)	-	-	
49	36-5区	褐灰色シルト層	土師質土器	皿	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	(8.4)	1.3	(3.4)	
50	36-5区	褐灰色シルト層	黒色土器	碗	ナデ、ヘラケズリ	マメツ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	-	-	(5.8)	
51	36-5区	褐灰色シルト層	灰釉陶器	碗	回転ナデ、ナデ	回転ナデ後ミガキ	-	(胎土)7.5Y7/1 灰白	-	-	7.6	
52	36-5区	褐灰色シルト層	須恵器	壺？	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5Y4/1 灰	10YR4/2 灰黄褐	-	-	(8.4)	
53	36-5区	褐灰色シルト層	須恵器	蓋	回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	15.6	(1.3)	-	
54	36-5区	褐灰色シルト層	須恵器	蓋	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	10YR5/1 褐灰	7.5Y6/1 灰	(18.8)	-	-	粘土付着
55	36-5区	褐灰色シルト層	須恵器	壺	回転ヘラケズリ	回転ナデ	N6/ 灰	5Y5/1 灰	-	-	(7.1)	
61	36-5区	SD5002	須恵器	甕	タタキ	ナデ、指オサエ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	(11.1)	(11.5)	-	転用碗
63	36-5区	SP5004	土師質土器	皿	ナデ、底部ヘラ切り	ナデ	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/4 淡赤橙	(11.4)	1.8	(7.0)	
64	36-5区	SP5004	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	
65	36-5区	SP5002	須恵器	蓋	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	(14.2)	-	-	
66	36-5区	SP5004	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	(13.9)	-	-	
67	36-5区	SP5004	須恵器	碗	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	(14.8)	-	-	
68	36-5区	SP5004	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	(7.2)	
71	36-5区	灰色シルト層	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	(12.6)	3.4	(7.3)	
72	36-5区	灰色シルト層	須恵器	杯	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	(13.0)	3.8	(10.0)	
74	36-5区	遺構外	須恵器	底部	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰	-	-	(11.2)	他個体付着
78	37-1区	SD1001	土師質土器	足釜	ナデ、指オサエ	ナデ、ハケ	10YR7/4 におい黄橙	10YR6/4 におい黄橙	22.6	-	-	
79	37-1区	SD1001	土師質土器	足釜	ナデ	-	5YR5/6 明赤褐	-	-	-	-	
80	37-1区	SD1002	土師質土器	皿	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	10YR5/6 赤	2.5YR5/6 明赤褐	8.8	-	6.8	
81	37-1区	SD1002	白磁	碗	-	-	2.5GY 灰白	N8/ 灰白	16.6	-	-	
82	37-1区	SP1022	黒色土器	碗	回転ナデ、ヘラ切り	マメツ	10YR8/2 灰白	N3/ 暗灰	(14.8)	5.3	6.4	
82	37-1区	SD1002	土師質土器	鍋	ナデ	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	22.0	-	-	
83	37-3区	SP3004	須恵器	杯	ナデ、底部ヘラ切り	ナデ、マメツ（転用）	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	(9.0)	
83	37-1区	SD1002	土師質土器	足釜	ナデ	ナデ	7.5YR5/3 におい橙	-	-	-	-	
86	37-1区	SD1005	土師質土器	足釜	ナデ	-	10YR5/3 におい黄褐	-	-	-	-	
87	37-1区	SD1007	土師質土器	皿	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	8.2	1.6	5.9	
88	37-1区	SD1007	土師質土器	杯	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	14.2	-	8.1	
89	37-1区	SD1007	瓦器	碗	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	N4/ 灰	N4/ 灰	12.8	-	-	
90	37-1区	SD1007	土師質土器	碗	回転ナデ、底部ヘラケズリ	回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	-	-	6.0	吉備系
91	37-1区	SD1007	白磁	皿	-	-	N8/ 灰白	10YR8/1 灰白	11.0	-	-	
93	37-1区	SD1008	白磁	碗	-	-	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	14.6	-	-	
94	37-1区	SD1011	土師質土器	皿	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	8.5	1.2	6.0	
95	37-1区	SD1011	瓦器	碗	ナデ	ヘラミガキ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	5.6	
96	37-1区	SD1011	土師質土器	杯	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	8.3	
97	37-1区	SD1011	土師質土器	杯	回転ナデ、底部ヘラ切り	回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	14.7	-	-	
98	37-1区	SD1011	黒色土器	碗	指オサエ	ヘラミガキ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	13.8	-	-	
99	37-1区	SD1010	黒色土器	碗	ナデ	ヘラミガキ	7.5YR6/4					

瓦観察表

番号	地区名	遺構名	器種	調整		色調		全長 (cm)	狭端幅 (cm)	広端 幅(cm)	厚さ (cm)
				凸面	凹面	凸面	凹面				
5	36-2区	遺構外	丸瓦	不明	布目、板ナデ	25Y6/1 黄灰	5Y7/1 灰白	(7.6)	-	(5.8)	2.3
6	36-1区	遺構外	平瓦	縄タタキ	布目	N7/ 灰白	N6/ 灰	(10.7)	(6.9)	-	2.1
7	36-2区	遺構外	平瓦	格子タタキ	布目	25Y6/2 灰黄	N7/ 灰白	(9.7)	-	(10.1)	1.6
13	36-4区	褐灰色シルト層	平瓦	縄タタキ	板ナデ	25Y5/1 黄灰	10YR2/1 黒	(19.9)	-	(13.9)	2.1
22	36-4区	褐灰色シルト層	丸瓦	スリ消し、ナデ	布目、ケズリ	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR1.7/1 黒	(14.3)	(5.2)	-	2.0
24	36-4区	褐灰色シルト層	平瓦	縄タタキ	布目、板ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y4/1 灰	(16.1)	-	25.1	2.5
25	36-4区	褐灰色シルト層	平瓦	縄タタキ、ナデ	布目、板ナデ	5Y6/1 灰	2.5Y7/2 灰黄	(18.2)	-	(14.0)	1.8
27	36-4区	褐灰色シルト層	平瓦	縄タタキ	布目、ケズリ	5Y6/1 灰	N5/ 灰	(9.2)	(14.6)	-	2.0
28	36-4区	褐灰色シルト層	平瓦	縄タタキ、ナデ	布目、板ナデ	N5/ 灰	N6/ 灰	(13.8)	(11.0)	-	2.3
35	36-4区	SD4001 直上	平瓦	縄タタキ	布目	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/3 淡黄	(10.6)	-	(9.8)	2.3
36	36-4区	SD4001 直上	平瓦	格子タタキ	布目	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	(11.1)	(6.0)	-	2.1
45	36-4区	SD4001	丸瓦	ナデ	板ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	(16.4)	-	(8.3)	2.2
46	36-4区	SD4001	平瓦	縄タタキ	布目、ケズリ	5Y7/1 灰白	N6/ 灰	(16.6)	-	(13.5)	1.9
47	36-4区	SD4001	平瓦	ナデ	布目	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/1 灰白	(10.3)	(10.7)	-	2.2
56	36-5区	褐灰色シルト層	丸瓦	布、ケズリ	縄タタキ	N4/ 灰	N5/ 灰	(10.2)	-	(6.6)	1.4
57	36-5区	褐灰色シルト層	平瓦	格子タタキ、縄タタキ	布目	N5/ 灰	N5/ 灰	(9.7)	-	(13.5)	1.7
58	36-5区	褐灰色シルト層	平瓦	板ナデ、縄タタキ	布目	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	(18.7)	(12.1)	-	2.3
59	36-5区	褐灰色シルト層	平瓦	板ナデ	布目	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	(11.7)	-	(7.4)	2.3
60	36-5区	SP5001	平瓦	縄タタキ	ナデ	7.5Y7/1 灰白	N6/ 灰	(15.3)	(10.8)	-	2.1
62	36-5区	SP5009	平瓦	格子タタキ、縄タタキ	布目	N4/ 灰	N4/ 灰	(8.7)	(13.5)	-	1.9
69	36-5区	SP5004	平瓦	ナデ、格子タタキ	布目、ケズリ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	(13.4)	-	(11.5)	2.0
70	36-5区	SP5004	平瓦	格子タタキ	板ナデ、布目	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	(9.4)	(15.2)	-	2.0
73	36-5区	灰色シルト層	平瓦	縄タタキ	布目、ナデ	N4/ 灰	N5/ 灰	(12.2)	-	(9.8)	1.6
85	37-1区	SD1002	軒丸瓦	四葉素弁蓮華文	マメツ	N6/ 灰	2.5Y8/1 灰白	(20.1)	(11.9)	-	1.8
115	37-1区	SP1021	平瓦	縄タタキ	布目	5Y5/1 灰	7.5YR4/2 灰褐	(4.0)	-	(5.5)	1.8
127	37-1区	SD1038	平瓦	縄タタキ	摩滅	N4/ 灰	2.5Y5/ 黄灰	(6.1)	-	(5.6)	2.1
128	37-1区	SD1038	平瓦	縄タタキ	布目、ケズリ	N4/ 灰	N4/ 灰	(10.6)	-	(15.2)	2.2
137	37-1区	SD1041	丸瓦	ナデ	布目、ケズリ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y5/2 暗灰	(5.7)	(5.5)	-	2.1
138	37-1区	SD1041	軒平瓦	ナデ (KH201 か?)	不明	N3/ 暗灰	-	(5.2)	(2.0)	-	-
139	37-1区	SD1041	平瓦	ナデ	布目、ケズリ	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	(7.7)	(8.2)	-	2.0
140	37-1区	SD1041	平瓦	ケズリ	布目	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	(2.9)	(4.2)	-	2.2
149	37-1区	SD1042	丸瓦	ナデ	布目	N4/ 灰	N3/ 暗灰	(7.5)	(6.0)	-	2.3
152	37-1区	SD1042	丸瓦	ナデ	布目	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	(6.7)	-	(4.2)	1.4
153	37-1区	SD1042	平瓦	縄タタキ	布目	N6/ 灰	2.5Y8/2 灰白	(4.7)	(6.5)	-	1.8
154	37-1区	SD1042	平瓦	縄タタキ	布目	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	(4.5)	(5.8)	-	2.2
163	37-1区	SD1042	丸瓦	ナデ	布目	5Y6/1 灰	2.5Y5/1 黄灰	(7.5)	(7.8)	-	2.0
166	37-1区	SD1042	平瓦	縄タタキ	布目	N4/ 灰	N4/ 灰	(3.0)	-	(5.7)	1.8
178	37-2区	SD2001	軒平瓦	ナデ	布目、ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	(10.4)	-	-	4.0
210	37-2区	SK2020	平瓦	格子タタキ	布目	N7/ 灰白	N8/ 灰白	(3.9)	-	(4.6)	2.8
220	37-2区	SP2013	平瓦	縄タタキ	布目	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	(5.0)	-	(4.6)	1.7
225	37-2区	SD2010	丸瓦	ナデ	布目	N6/ 灰	N6/ 灰	(8.0)	-	(7.1)	1.8
229	37-2区	SD2027	平瓦	縄タタキ	ナデ	N8/ 灰白	N5/ 灰	(10.8)	-	(8.4)	1.7
236	37-2区	SX2033	丸瓦	縄タタキ	布目	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	(9.4)	(9.2)	-	1.9
237	37-2区	SX2033	平瓦	ナデ	布目	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	(8.3)	-	(5.5)	1.9
287	37-3区	SP3042	丸瓦	ナデ	布目	2.5T8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	(17.4)	-	(9.1)	1.8
321	37-3区	SD3010	平瓦	縄タタキ	板ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	(12.0)	-	(13.5)	2.5
331	37-5区	6層	軒平瓦	ナデ (KF201)	不明	2.5Y8/1 灰白	10YR8/3 浅黄橙	(5.3)	(6.0)	-	4.5
344	37-4区	SD4002	丸瓦	ナデ	布目	7.5Y7/1 灰白	N6/ 灰	(4.0)	(6.8)	-	1.4

金属器観察表

番号	地区名	遺構名	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
34	36-4区	灰褐色シルト層	鉄	ふいご羽口	(3.5)	4.4	4.0	
48	36-5区	褐灰色シルト層	鉄	釘か?	3.9	-	1.0	
92	37-1区	SD1007	鉄	鉄滓	2.7	4.1	2.1	
169	37-1区	6層	鉄	鉄鏝	(8.3)	(2.0)	0.35	
170	37-1区	6層	鉄	鉄鏝	(5.0)	0.8	0.45	
171	37-1区	6層	鉄	鉄	3.8	4.0	1.9	
172	37-1区	6層	鉄	鉄滓	7.6	9.4	3.6	
173	37-1区	7層	鉄	鉄鏝	(10.4)	(0.8)	0.5	
212	37-2区	SK2020	鉄	不明製品	(3.0)	(1.4)	(0.5)	
242	37-2区	6層	鉄	不明製品	4.7	10.7	3.1	
243	37-2区	6層	鉄	鉄釘	(6.5)	(1.3)	(0.7)	
244	37-2区	6層	鉄	不明製品	2.1	4.8	0.7	
245	37-2区	6層	鉄	鉄滓	3.5	5.1	2.4	
246	37-2区	6層	鉄	鉄滓	5.0	7.7	3.2	
247	37-2区	6層	鉄	鉄滓	4.3	5.3	1.9	
252	37-2区	遺構外	銅	銅鏝	1.8	0.9	3.0	
253	37-2区	7層	鉄	不明製品	(2.8)	(1.0)	(0.4)	
275	37-3区	SP3027	平瓦	鉄滓	(2.0)	(2.6)	(1.3)	
276	37-5区	SP5003	鉄	鉄滓	(2.2)	(2.9)	(1.8)	
335	37-3区	6層	銅	飾り金具	(5.6)	1.4	0.15	
336	37-3区	6層	鉄	鉄滓	2.3	3.0	1.7	
337	37-3区	6層	鉄	鉄滓?	3.4	4.2	2.0	
338	37-3区	6層	鉄	鉄滓	(2.0)	(2.3)	(1.1)	

木器観察表

番号	地区名	遺構名	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
285	37-3区	SP3023	木器	柱痕	72.9	31.5	31.1	ヒノキ

石器観察表

番号	地区名	遺構名	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
75	36-4区	遺構外	石槍	サヌカイト	7.5	4.2	1.6	49.43
77	36-4区	遺構外	石核	サヌカイト	13.8	5.8	2.4	262.84
76	36-4区	遺構外	剥片	サヌカイト	3.6	4.75	0.85	14.54
167	37-1区	SD1042	石鏝	サヌカイト	3.4	-1.6	0.35	1.54
168	37-1区	SD1042	石鏝	サヌカイト	1.9	1.2	0.4	0.55
248	37-2区	6層	砥石	砂岩	4.1	3.3	2.2	47.7
340	37-3区	6層	不明	粘板岩か	-3.7	-0.9	0.4	2.4



1. 36 - 4 ~ 5区 全景写真 (南から)



2. 36 - 1 ~ 3区 遠景 (南から)



3. 36 - 5区 SP4005 (東から)



4. 36 - 4区 全景写真



5. 36-1区 南壁断面



6. 36-1区 南壁断割断面



7. 36-1区 南壁西端断面



8. 36-2区 東壁断面状況



9. 36-2区 東壁断割断面



10. 36-2区 全景 (北から)



11. 36-3区 西壁断面



12. 36-3区 全景 (北から)

図版4 遺構写真4



13. 36-4区 灰褐色シルト層検出状況



14. 36-4区 北半部完掘状況



15. 36-5区 灰褐色シルト層上面



16. 36-5区 SP4005断面



17. 36-4、5区全景



18. 36-4区 SD4001 完掘状況



19. 36-5区 SP5009断面



20. 36-6区 平坦面検出状況



21. 37 - 3.5区全景写真



22. 37 - 1区 全景写真

図版6 遺構写真6



23. 37-4区 全景写真



24. 37-4区 S P 4005 断面



26. 37-3区 S P 3023 断面



25. 37-2区 3面全景



27. 37-3区 SP3030 断面



28. 37-3区 SP3042 断面



29. 37-3区 SP3048 検出状況



30. 37-1区 SD1038 検出状況



31. 37-2区 SK2020 断面



32. 37-2区 SD2018 断面



33. 37-2区 SD2037 断面



34. 37-3区 SD3010 土器検出状況



35. 37-3区 SD3021 断面



36. 37-1区 SD1043 断面



37. 37-1区 2面遺構検出状況



38. 37-1区 SD1002 完掘状況



39. 37-2区 SD2001 検出状況



40. 37-3区 SP3027 検出状況



41. 37-1区 SD1038・SD1041 断面



42. 38-1区 完掘状況



43. 38-1区 SD1005 検出状況



44. 38-1区 SP1031 検出状況



45. 38-1区 SB1003 および周囲の柱穴



46. 38-2区 SE2002 断面および検出状況



47. 38-2区 遺構検出状況



48. 38-2区 SD2007 断面



49. 38-2区 全景

図版 10 遺物写真 1



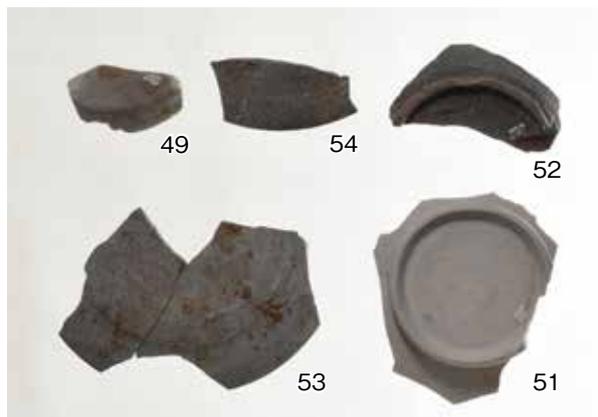
50. 36-1~3区 遺構外出土遺物



51. 36-4区 E・F層出土遺物



52. 36-4区 SD4001 出土遺物 1



54. 36-5区 F層出土遺物



53. 36-4区 SD4001 出土遺物 2



55. 36-5区 遺構出土遺物



56. 36-5区 SP5004・灰色シルト層出土遺物

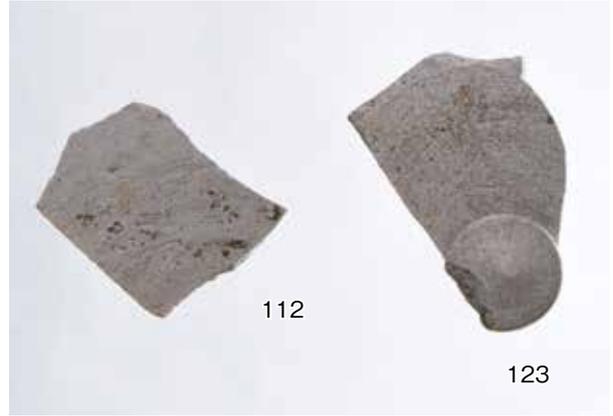


57. 36次調査遺構外出土遺物



85

58. 37-1区 SD1002 出土遺物



112

123

59. 37-1区 SP1018,SP1033 出土遺物



124

125

126

127

128

60. 37-1区 SD1038 出土遺物



134

135

136

61. 37-1区 SD1041 出土遺物



159

62. 37-1区 SD1042 出土遺物 1



158

160

162

163

63. 37-1区 SD1042 出土遺物 2



175

176

177

64. 37-1区 6層出土遺物



178

65. 37-2区 SD2001 出土遺物

図版 12 遺物写真 3



66. 37-2区 SD2018,SP2016 出土遺物 (硯)



67. 37-2区 SD2010 出土遺物



68. 37-2区 6層出土遺物 (硯)



69. 37-3区 SD3021 出土遺物



70. 37-3区 SP3004 出土遺物



71. 37-3区 SP3023 出土遺物



72. 37-3区 SP3023 柱痕



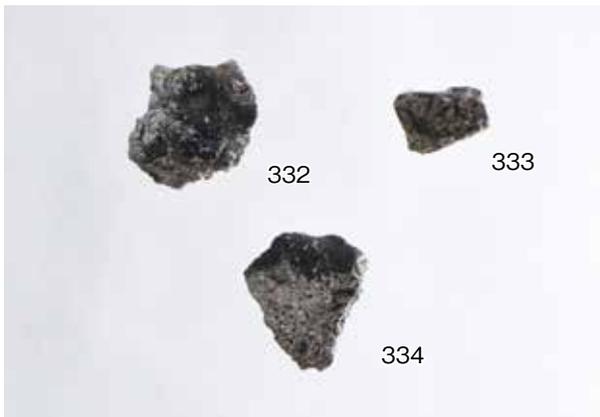
73. 37-3区 SP3042 出土遺物



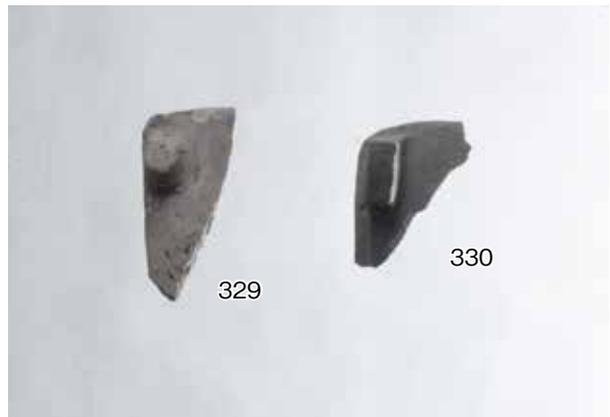
74. 37 - 3 区 3 面遺構検出時出土遺物 (硯)



75. 37 - 3 区 6 層出土遺物 (軒平瓦)



76. 37 - 3 区 6 層出土遺物 (坩堝)



77. 37 - 3 区 6 層出土遺物 (陶硯)



78. 37 - 3 区 6 層出土遺物 (石製品)



79. 37 - 4 区 SD4001 出土遺物



80. 37 - 4 区 SP4005 出土遺物



81. 37 - 4 区 遺構外出土遺物 (硯)



82. 出土動物遺存体 1



83. 出土動物遺存体 2

報告書抄録

ふりがな	さぬきこくふあと								
書名	讃岐国府跡3								
副書名									
巻次	第3冊								
編著者名	竹内 裕貴、石丸 恵利子、パレオ・ラボ AMS年代測定グループ、小林克也、森 将志								
編集機関	香川県埋蔵文化財センター								
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp								
発行機関名	香川県教育委員会								
発行年月日	2021年3月20日								
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡 番号						
讃岐国府跡	香川県坂出市府中町 本村ほか		37203		34° 17' 35"	133° 55' 06"	2018.11 ~ 2020.11	380m ²	保存目的
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	官衙・ 集落跡	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	柱穴・土坑・溝・井戸		土器・瓦・鉄製品・ 石製品・石器				
要約	<p>平成30年から令和2年度まで実施した讃岐国府跡の試掘調査及び確認調査の報告書である。各年度ごとに国府の範囲や、主要な施設の内容を確認するための調査を行った。</p> <p>調査の成果としては、讃岐国府跡の範囲が従来考えられていたよりも西側、北側に展開することが判明したことや、それらに伴う古代の柱穴等の遺構の存在についても判明した。</p> <p>また、従来想定されていた施設の範囲確定のための調査を行い、地形と溝によって区画された範囲における建物の存在といった施設内部の様相の一端が明らかとなり、従来の複数の想定地を含む形での施設の広がりや推定されることとなった。</p>								

讃岐国府跡 3

2021年3月20日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 株式会社 中央印刷所